

WATERBEAT
2002-2018（上）

楸

○目次

W A T E R B E A T

2002
―
2018

(上)

FIREHEART WATERBEAT

4

理想の箱庭 ― Side White ―

11

Selfish Gene

20

La Vie en Rose

31

微睡

46

幼馴染

55

大人の特権

66

大人の特権 後日譚 82

大人の特権 後日譚の後日譚 89

剣とハープと貴方 97

聖地と故郷と貴方 103

水の守護聖 158

別冊 (下)

理想の箱庭 - Side Black -

Melancholia

籠は連理、鳥は比翼

輪（リング）

手記

とけあう恋

3倍返し

W
A
T
E
R
B
E
A
T

2002

|

2018

⌞
上
⌟

FIREHEART WATERBEAT

水はなぜ、青いのだろうか。

空はなぜ青いのか、というのと同じように、時々湧き上がっては答えを明確に把握しないまま消えてしまう疑問だ。

確か光の波長がどうか、太陽の白色光の中の青い波長だけがどうか昔聞いた気がするが、
とうの昔に忘れてしまった。

黄色く見えたり紫に見えたりするよりはましかな、と思う程度である。特にこの状況では。

目の前には大きな水槽。部屋に漂う青い光は水面の向こうからの太陽光が水を通じた結果の産物だ。

その仕組が何であれ、水が青色に光る所為で、この場所は常に青色の照明に照らされたような色合いが広がっている。

とても綺麗だ。

全身で浴びる青い光は、水色の恋人に包まれているひとときのように、心地良い。

部屋の壁まるまる一面を占拠する、アクリル製の透明な壁の向こうでは、4・5匹のイルカ達と白い身体の水の守護聖が共に泳いでいる。

普段は彼らのショー（リュミエールは除く）を水中の視点から眺めるためのこのレストランの席に、オスカーは一人で座っていた。

とても利口な海の哺乳類たちと戯れる水の守護聖を眺めるほうが、自分で泳ぐよりも楽しい。

今、その水の守護聖は、一匹のイルカに掴まって——というより捕まって——泳いでいた。水の中に入った瞬間から、リュミエールはイルカ達に大人気だ。

一回り体の小さなそのイルカは、この水族館で一番ベテランな芸達者なのだとか。そしてまた、リュミエールを一番気に入っているのもこのイルカであるらしい。

オスカーが眺める目の前で、ちよんちよん、と小柄なイルカが口先でリュミエールの身体を突付く。何か、と首を傾げた水の守護聖の、両手の間を潜るようにして、急にイルカがものすごいスピードで泳ぎ出した。びっくりしたリュミエールは、反射的にイルカの身体に手を回すようにしてしがみ付く。

力強い流線型の身体は、リュミエールをくつつけたままスピードを上げ、プールの底をぐつと回ると、真っ直ぐ上へ向かって泳ぎ——オスカーの視界から消えた。

1、2、と頭の中で数える。

次の瞬間、視覚的には大きな衝撃を立てて——アクリルの厚い壁はその水の中の音を見た目ほどにはこちら側に伝えない——しなやかな白い身体が水の中に落ちてきた。細かい泡と長い髪が身体の落ちた軌跡に沿って尾を引く。

少し遅れて、頭から飛び込んできたイルカが、からかうようにその人の周りを泳いで回った。つんつん、と何度も突付かれるリュミエールの顔は微笑っている。

そのリュミエールが、オスカーの視線に気が付いて、手を振った。まだリュミエールの周りを離れないイルカの頭を、水の守護聖は数回撫で、それから軽くその手を翻した。名残惜しげにイルカがリュミエールから離れ、仲間の一匹のほうへ帰る。

リュミエールがオスカーに向けて手招きしながら、水面へと向かって上昇していく。水色の長い髪が幻惑的にゆらゆらと揺れた。

笑いかけて返事をしたオスカーは、席を立つと、ウェイターに自分とリュミエールのための飲み物を頼み、プールサイドへ上がるためのレストラン脇の階段の方へ歩き出した。

波の緩やかな海岸に面した水族館。少し歩いた近くにはホテルや公営プールもある。レジャー地として人気があるが、鬱陶しく思うほどには人の姿も多くなく、ゆったりとした雰囲気を楽しめる。

守護聖に与えられた休日を、オスカーはリュミエールを連れて小さな星に下り、数日間、この水族館と併設したレストランとを借り切って過ごすことにした。

海に縁の無かった生まれ故郷の星には無かった、水族館とそこで行われるイルカの見事な演技を、視察に降りた星で初めて目にした時から、リュミエールとイルカとが共に泳ぐ姿を見たかったのだ。

水の中を自由自在に、滑らかな動きで、驚くほど力強く泳ぐイルカの姿は、生命力の美しさを凝縮したように美しい。

そして彼らと共に戯れる水の守護聖は、それ以上に綺麗だ。

常識では考えられないくらいに息が長い。しなやかな身体は、何時でも優雅さを失わないのに、信じられないほどの力強さとスピードを生み出す。

彼と共に泳ぐイルカたちは、オスカーが妬けるほどに、リュミエールに擦り寄り、愛情を顕に何度も何度も戯れる。

彼らの棲む水の一切を司る、彼らにとっては神にも等しい、至高の優しい存在。それが自分たちの手で触れられるところに突然やつてきて、優しく触れられて、これが喜ばないでいられようか。

イルカになったつもりで考えてみると、なんとなく実感が沸く。

自分も、心から欲するただひとつのものが絶対に手に入らないと考えた時の絶望感、それが手の内に収まったのだと知らされた時の気の遠くなるほどの幸福感は——よく覚えている。

水から上がるうとしてからも、しばらくイルカ達に戯れられていたようで、オスカーが階段を上がつてプールサイドに着いた時、リュミエールはようやくプールの縁に手を掛けたところだった。

オスカーの姿を認めて微笑み、プールから勢いよく身体を躍らせて陸に上がる。

オスカーに向かって歩いてくる白い身体は、オスカーが抱き寄せようとすると軽く身を翻した。

「貴方の服が濡れてしましますよ」

「構わないさ」

細い身体を性急に引き寄せて抱き締めると、薄めの唇を唇で塞ぐ。とたんに強い塩の味がして、驚いて顔を離してしまった。

「海水ですから。お忘れでしたか？」

驚いた顔のオスカーが面白かったのか、リュミエールがぐくぐくすと笑う。イルカの棲む水が淡水であるはずが無いのに、普通のプールのように泳ぐリュミエールの姿に、すっかり失念していた

のだ。

少年のように照れ笑うオスカーの姿は、リュミエールしか知らない。暖かいものがリュミエールの胸にも広がる。

もう一度、軽く唇を触れ合わせると、オスカーは先ほど上がってきた入り口の方へ、ウェイターが持ってきたドリンクを受け取りに行った。その間にリュミエールは、プールサイドに置いていた薄い上掛けを着ている。

振り返ったオスカーの目に、陸の上でも優雅でしなやかな、光を受けて輝く身体が映った。

ありがとうございます、と微笑んでグラスを受け取ったリュミエールと共に、プールサイドに座ってイルカたちの泳ぐ様子を眺めた。

ショーもだが、こうやって彼らを自由に過ごさせている時間のほうが、彼らがどれだけ知能も身体能力も高く、遊び好きであるかということを証明しているような気がする。並んで泳いだり、ジャンプしてはわざと身体を横にしたまま着水し、派手に水飛沫を上げて楽しんでいる。先ほど下から見上げていて気が付いたことだが、イルカはよく腹を上、背を下にして泳いでいることがある。重力をあまり感じない水の中では、上も下も彼らにとってはあまり関係ないのかもしれない。

「よく自然の海では、ジャンプを繰り返しながら船と並んで泳ぐイルカの姿を見かけますけれど、あれは何でも船の真似をしてるんだそうですよ。彼らにとっては水面の上に飛び出ている物体が不思議でたまらないらしいです」

リュミエールの持つ、レモンスカッシュのグラスの縁に掛けられた、レモンスライスの黄色が涼

しげだ。

「海でイルカに会ったことはあるのか？」

「ええ、ありますよ。故郷の海では時々一緒に泳いでました。」

「羨ましいな」

「目の前にいるじゃないですか。貴方も彼らと一緒に泳げば良いのに」

「お前がじゃなくて、昔からお前と一緒に泳いでたイルカ達が、だよ」

とたんに言葉に詰まり、そのまま顔に薄く朱を散らす水の守護聖が可愛い。

こんなときに見せる顔は、公に過ごす時のそれよりもずっと幼く、気品を保ちつつも、得も言われぬ艶がある。

（そんな顔を見ていると、直ぐにでもホテルに連れ帰りたくなるんだがな……まあ、いいか。）

とりあえず今は、この穏やかな時間を楽しむことにしよう。

そう思つてよく冷えたカルーアミルクに口を付けたら、リュミエールが顔を赤くして俯いたままの姿勢で小さく呟いた。

「昔を羨ましがらなくても……今の私は貴方だけのものですよ」

日常と異なる時間を日常と異なる場所で過ごして、いつもより大胆になっているらしい。普段のリュミエールなら絶対にこんなことは言わない。

思わずついさっきの決意を翻しそうになったオスカーだった。

自分で自分の発言にどうしようもなく戸惑ったらしいリュミエールが、グラスを置いて慌しくプールの中に飛び込む。

途端に泳ぎ寄り、キュウキュウ、と甘えた声を出すイルカたち。リュミエールは水面から顔を出すと、居た堪れないような顔をしながら、それでもオスカーに微笑いかけた。

オスカーは上着を脱ぐと、リュミエールの待つプールサイドに近づく。

「一緒に泳ぎませんか？」

「水の守護聖様ならともかく、俺が入るとこいつたちに嫌われそうなんだがな」

水の領域も、そこに棲む優雅な曲線の生き物も、この水色の守護聖のものだ、という気がする。自分の炎の性質は、とてもではないが水に棲むもの達に好かれそうにはない。

水の守護聖は一瞬、何を耳にしたのかわからないというような顔をした後、くすくす笑った。

「そんな訳はありませんよ。手を」

お貸しください、というように、リュミエールの白い手が伸べられる。何が何だか判らなかつたが、とりあえず誘われるままにオスカーは片手を出した。

その片手を握ったリュミエールの手が、オスカーの手を水の中へ導く。軽く波打つ水の感触が手に馴染んだ。

リュミエールを取り囲んでいた流線型が、オスカーのその手のほうに寄って来る。先ほどリュミエールを投げ飛ばしたらしい小柄なイルカが率先して、2、3度、オスカーの手を口先で突付いた

——かと思うと、キュルキュルと声を出しながら、オスカーの掌へ身体を摺り寄せた。

明らかに甘えているその仕草は、オスカーにとって

「意外ですか？」
炎の守護聖の考えを読んだように、リュミエールが言葉を継ぐ。

「まさか慣れられるとは思わなかった」

オスカーはややぽかんとした顔つきでそう答えた。

「当然じゃないですか、」

大事にしていた秘密を話す子供のようになり、酷く嬉しそうになり、リュミエールが言う。

「この子達の中にも、私の中にも流れている血潮の熱さは、間違いなく貴方のものですから」

……とても悔しい気がする。

そんな言葉の一つ一つにさえ、どうしようもなく好きだと自分に思わせてしまう水の守護聖が。

反撃してやらなければ、と思う。

「俺は、お前の心さえ手に入れていれば十分なんだがな」

水の中のリュミエールは、深海色の目を真ん丸に見開いて、再び顔を赤くする。

また照れて俯くだろうと予想していたリュミエールの反応は、意外な方向に出た。顔を染めたまま、上目遣いで軽くオスカーを睨みつけるような表情をとると、伸べられていたオスカーの手を思い切り、ぐい、と引つ張った。

バランスを崩し、水の中に落ちる。塩辛い水の中で笑って纏れ合いながら、青い光の中でキスをした。

お仕置きは今日の夜までお預けだな、と考えながら。

一瞬、どこに迷い込んだのかわからなかった。

まだ召喚されて間もないこの常春の聖地といえど、この場所に比肩する程の庭園は無いであろうことは容易に察せられる。

一面に広がる薔薇の海。色は白を中心として淡いものが多く、香気もこの種類の花々にしては弱いほうだろう、と思われた。

優しい色合いの中で時折混じる真紅の薔薇が、かえってその存在を強く主張する。

決して広大な空間ではなかったが、聖地の中にあつてなお、別世界の楽園のような——
そう、ここは「理想の箱庭」なのだ、と思った。

すべてが夢の中のような。

自分の揺らした茂みの音に、驚いて振り向いた、長い長い髪の麗人も。

非現実的といえば、その風景の中心のその人物こそが最も非現実的に見える。

白い、おそらくは絹のローブに包まれた長身は、しなやかさと柔らかさを兼ね備え、男性のものが女性のものか一向に見当がつかず。

見たこともない色合いの艶やかな青銀の髪は、足元まで延びてなお余りあり、薔薇の庭園を縁取る芝生の上に広がっている。

驚きに見開かれた深海の瞳は、少しの間を置いて、やがてふわりと笑みの形に変えられた。

暖かい、包み込むような波動。

どこまでも広がる大海が意識の片隅に映った。

この感覚を、自分は何処かで知っている。

いつ、何処で？

「駄目ですよ、ここに来ては……オスカーに怒られてしまいますよ？」

首座の守護聖を敬称なしで呼ぶその声音は、春を迎える暖かい雨を思わせるもので。

驚いて何も言えず動けもしないまましていると、白い手がゆつくりと、迎え入れる形で伸べられた。そこで我に返って初めて、自分が垣根の中に半分埋まったままの状態でいることに気がついた。あわてて体を茂みから引き抜く。

そういえば、この辺りは炎の守護聖の私邸の近くだった、とその時思い出した。

他の7つの守護聖たちが幾つも代を重ねる中、聖地の時間でさえ気の遠くなるほどの永い時を一人で在任したままの、その首座の守護聖について聞かされた奇妙な風聞も、記憶から立ち上る。

炎の守護聖の敷地内には、彼が彼以外の人間の立ち入りを一切禁じている一角があると。

ではここが、その場所なのだろうか？

立ち入るどころか、近寄ったことが炎の守護聖に知れるだけで、烈火のように怒りを顕にすると聞く。

あの物静かで落ち着いた首座の守護聖からは、到底想像もできなかったが、本当のことらしい。噂を聞かせてくれた、大抵の事には動じない緑の守護聖が、命が惜しければ近づくのは止めといった方がいいぜ、と青い顔で言う程度には。

「あの、あなたは……」

考えるより先に言葉が口をついて出た。

が、向かいの優しい人な人が小首を傾げ、さらり、と流れる艶やかな髪の流れを目にした瞬間、自分かひどく不躰な態度をとっていることに気がつく。

「あ、あの、すいません、俺、ランディって言います！ 今度、女王陛下より風の守護聖の任を拝命しました！」

この状況も目の前の人物も何もかもがさっぱりわからなかったが、とりあえずの最低限の礼節としての自己紹介というのは、聖地に来てから強く躰けられてきた習慣だ。

前任に連れられて、他の7人の守護聖たちに紹介されて回った時の台詞を、咄嗟に口にする。目の前の麗人は、軽い驚きを、次いで柔らかな微笑をその顔に浮かべた。

「素敵ですね……ご存知ですか？ あなたの2代前の風の守護聖も、ランディという名だったのですよ」

「あ、はい、俺、その方の御名を頂いたんです」

不思議そうな顔をする麗人に、風の守護聖が言葉を継ぐ。

「俺、前の星では番号で呼ばれてたから、前任の風の守護聖の方が、『俺の師匠の名だ』って言って、つけてくださったんです」

「そうですか……いい名を頂きましたね」

優しい人はそれだけを言い、細い手を伸ばしてランディの髪を撫でた。訳もなく顔が赤くなる。

ふと、白い手の動きが止まった。

かと思うと、指の感触が風の守護聖の頬の上をなぞる。指の辿った線に沿って鈍く走る痛みを感じた。

どうやらさっきの垣根を通り抜けた際、木の枝で引っかかり傷でも作っただけらしい。

「痛みますか？」

「少し……」

よっぱど気が動転していたのだろう。我に返ると少しずきずきと痛む。特に1箇所、深い所があるらしい。

「ここで少し待っていてください、直ぐに簡単な手当での道具を持ってきますから」

至上の美貌で微笑まれながらそう言われて、風の守護聖はどもりながらはい、と返事をするのがやっとだった。

質量を感じさせない身体が風のように軽く翻って、長い長い髪が薔薇に囲まれた芝生の道程に靡く様子をただ見ていた。

やはりどう考えても、ここがああ噂の禁断の地で、どう考えても、ここに居るのはまずいように思う。

青銀色の髪の麗人が戻ってくるまでの間に、ランディはそう考えた。

あの恐い物知らずの緑の守護聖を怯えさせるほどの、首座の怒りを買う場所。それは確信だ。楽園を思わせるこの庭園。そしてそこに住む、至上の美貌と深く優しい慈愛を持つ佳人。その人がその身に纏う、不思議な、それでいて、ランディにもよく馴染んだことのあるような波動。

首座の炎の守護聖をして、極秘事項にせしめるだけの理由が、理屈でなく感覚だけで十分に理解できた。

やがて小さな箱を手に戻ってきた、優しげな人に恐る恐る尋ねる。

「あの、俺……ここに居たら、まずいんじゃないんですか？」

気まずそうに芝生に座り込んだまま、小さくなって見上げるようにそう訊いてくる風の守護聖の目の前に、その麗人は座り、箱を開けながら優しく微笑った。

「勿論、そう長居は出来ませんが、傷の手当てぐらい私にさせて頂けませんか？」

それから、少し表情を変えた。薄めの唇の上に人差し指を当てた、悪戯っぽい微笑。

「恐い恐い首座の守護聖様は、今日も今日とて私を置いて、お一人でお仕事に出てしまいましたから」

そう言つてくすくすと笑うその姿は、先ほどのその人よりも遥かに幼く映つた。

「あの人も、昔はずいぶん悪童で。聖地を抜け出しては怪我をして……もちろん強さを与える炎の守護聖ですから、大きな怪我はしませんけれど。でもどうしようもなく女性好きで、喧嘩好きで、下界に降りて小さな傷を作つては、他の守護聖の方々に内緒で、私がこうやって手当てしてあげたのですよ」

ぽかん、と口を開いた風の守護聖に気づき、再び佳人が優しく笑いかける。

「意外ですか？」

「意外……です」

「今では、立派な首座の守護聖様、ですものね」

目の前の人はそう言つて再びくすくす笑うが、風の守護聖に言わせれば、意外、なんてものではない。

ランディの知っている首座の炎の守護聖は、確かに明るく快活で楽しい人物だが、他の遊びたい盛りの守護聖たちが気が引けるほど、おおよそ下界に行つただとか浮いた話だとかを聞くどころか、想像することさえ困難な相手だ。

「誰にでも、若く、何も知らない頃というものがあるのですよ」

気がつけば、傷の手当てはすっかり終わつていた。

頬に触れていた優しい手つきの手が、そのままランディの頭へ伸び、優しくその髪を撫でる。

「だから貴方も、今はまだ若くて、多くの失敗を犯すかもしれませんけれど。それは決して、恥すべきことではないのです。貴方の先輩である、他の守護聖たちも、オスカーでさえも……たくさ

んの失敗を重ねて、そして成長してきたのですから。」

そう静かに語る表情は、痛みを知っている人の優しさだと、ランディには感じられた。

「守護聖の運命は過酷ですけれど、どんなに傷ついても、辛い目にあっても、進むことを止めないで下さいね……それが、宇宙を導く、ただひとつの道なのですから」

優しい手が、ゆっくりと離れてゆく。

治療を終えた手から微かに匂ったのは、多くの薔薇の香りと、ほんの少しのハーブの香りだった。

「私はいつでも、貴方方を見守っていますから」

深い微笑を湛えながらゆっくり語る、その言葉に嘘は無い。

その佳人からは、ランディを、聖地全体をも包み込んでしまうほどの、優しい水のような波動が

唐突に気がついた。

なぜそれまで気がつかなかったのか、不思議なほどに、はつきりと。

これはサクリアだ。

首座の守護聖、その炎の性質には欠けているはずの属性を帯びたサクリアが、常に炎の守護聖のその大きな欠片を埋めるように、その身の周囲に存在していた。

聖地に強く存在する首座の炎の守護聖の力、その本質に常に寄り添うように存在していた、聖地を包み込むもうひとつの力。

星の美しく輝く深夜、誰もが眠りの海にまどろむ時間に、何度か感じたことのある、聖地中を巡り、そして星々へと向かって流れ出す、暖かく、優しい気配――

今まで一体だと思ってきた力が、常にひとつところに身を寄せる2つの力から成っていたのならば。

軽い違和感を覚えた、首座の守護聖から感じるサクリアの意味が明快に知れる。

（首座の、あの方は――ご自分の時を止めてしまった、のだそうだ。）

俺も師匠からの伝え聞きだが、と断りながら、夜の闇に紛れさせるように、ランディに語った先代の言葉を、今ようやく鮮明に思い起こす。

（俺たちと同じように流れ行くはずだった、時を引きとめ、――禁を犯したのだと。）

――禁を犯した、罪人なのだと。

（かつて――守護聖の座は、9つ、あったのだそうだ。）

失われたひとつは――

「――それでも」

はっと現実引き戻されると、向かい合ったままの麗人は、その深海色の目を閉じ、静かに言葉を続けていた。

その瞼の裏には、何が映っているのか。

「サクリアを持つ身こそが守護聖であり、守護聖こそが――宇宙を導く、絶対的な存在なのです」
例え、禁を犯した、罪人であれ。

ランディに向けて、ゆっくりと開かれた、宇宙を思わせるその深い色の瞳が、無言のままにそう語った。

「――あなたも……」

これ以上、聞いてはいけない。

翳く深い闇に足を捕らわれたような悪寒を感じ、そう考えながらも、ランディは、気がつけば震える声で尋ねていた。

尋ねずにはいらなかった。

「あなたにも、何も知らない、若い頃というものがあつたのですか……？」

青銀色の長い長い髪の方は、少しだけ驚いた表情を見せ。

再び、ゆっくりと眼を閉じて。

「ありましたよ。——何も知らない、無知な……無知な子供でした。」

桜色の薄めの唇が、静かに、そう言葉を紡いだ。

「彼は、罪を犯し」

代の変わることのない、ひとつの、守護聖の座と。

「そして彼を止められなかった、私も、罪を犯したのかもしれないけれど」
表に出ることのない、ひとつの、守護聖の座と。

「それでも」

歪められた摂理は、どちらかを失った時、崩壊への道を辿るのだろうか。

「オスカーこそが、私の絶対的な存在で——オスカーを、愛しているから」

突き放された赤子のように、不意に言葉が途切れた。

「さあ、もうお行きなさい」

その人の背後に広がる、淡い色の薔薇の波が目についた。少し傾いた聖地の日差しが柔らかく景

色を照らし出している。

地に流れるほどの長い長い、青銀色の髪を持つ人は、深い慈愛をその全身に湛え、暖かい表情でランディを見守っていた。

何が変わったか。何も変わってはいなかった。

「オスカーを……お願いしますね」

ただその言葉だけで。

その人が、どれほどに深く首座の守護聖を愛しているか、痛々しいほどに伝わってくる。

すべての世界から切り離され、楽園に囲われた、炎の対となる存在。

宇宙の表側から失われた、ひとつの、守護聖の座。

名を訊きたかった。

でも尋ねてはいけない、と知っていた。

白い立ち姿は、垣根を通り抜け、楽園から消えてゆく赤いマントをただじっと、長い間、見送っていた。

そして身を翻すと、炎の守護聖の帰還を告げる赤い夕日に照らされながら、長い青銀の髪を波打

たせ、薔薇に包まれた楽園からかの人を迎える小さな館へと、静かにその姿を消していった。

「今晚、よろしいでしょうか？」

予感がしていたから、今夜はテラスへの掃き出し窓もカーテンも予め全開にしておいた。早い時間の夜闇の空気から琥珀色の仄明るい室内へ、顔だけ覗き込むその水色の姿に向けて、俺はベッドに横になったまま無言で手招きして手元へ呼び寄せる。

嬉しそうな顔を見せる割にはのんびりと、室内へ入ってこちらに近付くローブ姿の、いつそ朴訥なほどにゆるゆるとサンダルの編み上げ紐を解いてベッドへ上がろうとするその途中で、いい加減にこつちが焦れて上半身を起こし、その身体を抱き寄せた。微笑いながらベッドに乗り上げたリュミエールの両腕が優しく、しかし俺の実体を確かめるような程度にはしっかりと俺の身体に廻される。夜風に少し冷えた身体に、触れ合った部分から互いの体温の温かさを感じた。

口付けをして、上下を返してその軀を埋め、そのまま慌ただしく、とりあえず一回抱いた。

目を閉じて満足の溜息を吐いた唇にゆるく唇を重ね滑らせて、力の抜けた細身の淡い軀を上に乗せ、軽めに抱き締める。青銀の長い髪が溢れて俺の身体に落ち掛かった。

夜はまだ夜半に差し掛かったばかりだった。開いたままの窓から差し込む月は中天を早くに過ぎた十三夜で、聖地のまろい温度と湿度に少し朧ろとして霞んでいる。

故郷の草原の星は寒暖差が激しく、夜は常に冷え込むから、見上げる数個の月々はいつも冴え冴えとしていた。

腕の中のこいつが故郷の海洋の星で見た月は、幾つの、どんな月だったのだろうか。

こんな関係になつても想い合う者同士ではない、という事実は、可笑しいような正しいような、幾許かの胸苦しさを伴う不思議な心持ちがいつも付き纏う。

関係だけで言えば、互いの就任後のかなり早い時期からだつた。

まだどちらも十代だったその頃、今日と同じ十三夜の月に誘われるように外へ出たら、噴水の縁に腰掛けたリュミエールが月光に照らされ、茫洋とした音色でハープを爪弾いていた。声を掛けたら、こちらを見上げた深海色の瞳はよりによつてうつすらと涙を浮かべ、月の光を弾いていた。

「…どうした」

と、辛うじて平静を保つて尋ねたら、暫くの逡巡を見せた後、

「……このようなこと、貴方をお願いする筋合いでないとは判っているのですが…」

と前置きされた上で

「私を、抱き締めて下さいませんか」

と言われた。

後から落ち着いて考えるとんでもない申し出という気がしたが、その時はごく自然で、むしろ予想すらしていたようでもあった。ハープをその手から降ろし、立ち上がらせて、軀を密着するようにして抱き締める。応えるように俺の脇の下から背中へ廻された腕が、きゅ、と僅かに締まり、

両の掌がぴつたりと俺の背に沿った。白い頬と鼻筋が俺の首筋に押し付けられる。

僅かの隙をも残すまいとするそれは、何を求めているか、どうして欲しいかが明瞭に判る仕草だった。人の熱を、鼓動を、肌触りを求め、飢え、感じさせて欲しいと切望していた。これ以上ないごく素直な感情の発露だった。

存分に応えてやった。力一杯抱き締め、掌を背に、腕に、項うなじに滑らせ、髪に手を潜くぐらせ、額を合わせ、瞼を寄せ、指を絡めて、吐息を交わす。そのひとつひとつに、万感の想いを込めたリュミエールの確かな反応が返る。

そう言うなら若気の至りと言ってもいいが、止めようがなく、その頭を両手で抱え込んで奪うように唇を重ねた。これだけ全身を使つて愛撫すると、唇に何の感覚も無いことが不自然にすら感じるものだ。さつきまでのリュミエールと同じように、今は俺がその感覚に飢えていた。

最初だけ軽い抵抗があった気がするが、もうその頃には自分の意識が先行してあまり把握しなかった。深々と唇を合わせて舌を忍び込ませると多少の戸惑いが返ってきたが、その戸惑いは拒否のそれではなく、どう応えれば共有感覚を返せるのかを探る戸惑いだった。いくらかの遣り取りの後にやがて馴染んで、浅い、深いキスのひとつひとつにこの上なく的確で甘い反応が返る。聡明な生徒のように。

教えてやればどこまでも素直に吸収すると気付いて、あとはもう人目の付かなそうな辺りに引きずり込んで、なるべく柔らかそうな場所を選ぶのがやっとだった。それから後はただひたすら、言葉にならない感覚を与え続けて、学んでは返ってくる感覚を受け取り続けた。

これまで幾人もと軀を交わしてきたが、リュミエールほど全身全霊で真つ直ぐに全てを受け入れ、

素直に反応を返してくる相手は他にいない。格別、という言葉の通り、肌触りから応え^{いら}まで、何から何までがすべて桁違いの極上の経験だった。流星は守護聖、ということか、と、脳の片隅でいささか場違いな感想を抱いたりもした。

「…ここまでしていただくつもりは無かったですけれど」

私邸に連れ帰って改めてベッドの中で抱き締めていた最中、そう呟かれて、今更ながらやり過ぎたかと慌てかけたが、

「でも、ありがとうございました。大変お上手ですね。…多分。」

そう言われて安堵しつつも、一気に色んな思考が入り乱れ、とりあえず一番気になった箇所を最初に問い直す。

「多分、てのは何だ。不満でもあるのか。」

「比較対象にできる他の経験がありませんから。申し訳ないですが」

「……」

あっけらかんとした初体験の自己申告に、そうだろうな、と改めて思いつつ、この余りにもの素直さを考えると念押ししておかなければならない事があった。

「申し訳ながらなくていいから、他の経験なんてするなよ。俺だけにしておけ。クラヴィス様あたりにうつかり『お願い』なんて絶対にするな」

リュミエールが軽く目を見開き、宙を見て考えを巡らせ始めたので

「想像するな、俺だけにしろと言っている」

と告げて、唇を塞いで進行中の思考を止めさせた。リュミエールは笑いながら、律儀にキスの返戻

を超越した。

つらつらと話を聞くに、故郷の海洋の惑星では家族やごく親しい者同士で肩を抱く、手を繋ぐ、顔や髪に触れる、抱き締め合う、時には軽いキスもするという身体的接触が日常茶飯事だったのに、聖地へ来て以来そういうものの一切が絶たれたのがずいぶん堪えていたらしい。なるほど、と思った。この上なく清らかな水の守護聖様にうかうかと物理的に接触しようとする者はそういないし、身体感覚の欠如は神経系の安定に想像以上の深刻なダメージを与えるから、責められるべき類の話でもなかった。

おそらくこの頃に最もリュミエールと接触が多かったのはカティスで、奴か、下手をすると俺の想像した通りにクラヴィス様が相手になっていたかもしれない。年齢差がリュミエールを躊躇わせていた可能性もある。この時代にオリヴィエがいたなら、まず間違いなくリュミエールは俺より先にオリヴィエに頼んでいただろう。一方でリュミエールにしてみれば、俺の性的な交友関係が相当に派手である、という噂が、この申し出の壁の高さを下げていた面が間違いなくあったに違いない。大勢の中のひとつの些細な申し出、に紛れることができる可能性。

最後まで遂行されたのは流石に想定外だったようだが、海洋惑星では性的規範にも同性愛にも大して厳しくなかったようで、初めての経験ではあったものの、欠乏していた身体的接触が想定以上の十二分に満たされたことを喜んですらいるようだった。温暖な気候の惑星らしい大らかさだ、と思った。文明というものが茶々を入れることはあるが、往々にして気候と性的関係の認容度は相関する。

「…そう仰るといふことは、またこの次、貴方においていけるといふ認識でよいのでしょうか？」

俺の腕の中に埋められたまま、鼻先と頬を、すり、と俺の胸元に摺り寄せる、その甘い仕草と優しい肌触りにぞくりとした。この次、がいつになるかは知らないが、単純に人の熱を求めるだけのこいつの欲求がそうそう頻繁であるとも思えず、この次どころか毎日でも独占したいと思った俺の想いは仕舞い込まざるを得なかった。

代償となる条件を探った挙句、

「……俺以外に肌を触れさせないと約束するなら、お前の好きな時にいつでも付き合つてやる」と言ったら、リュミエールは再度目を見開いて、

「何ですか、それは」

とさも可笑しげにくすくすと笑ったから、やっぱり判っていない。

それ以来、リュミエールはこうやってただ俺に愛されるためだけに、ひとつきかふたつきに一度くらいの頻度で俺のところへ来ている。今でも。

その後に徐々に判明した事実とは、互いの気質としての相性は相当に悪い、ということだった。

会議の場などで意見が一致する事などまず無い。俺は奴の案を生温いと言い、リュミエールは俺の案を苛烈だと言う。

事情さえ許せば双方の意見が採用されて共に実施されるのだから、殊更に対立する必要はないのだが、その場合でも結果的に実行された相手の案を快く思っていないのは互いに明白だった。

俺にとつての挨拶はリュミエールに軽口と取られ、リュミエールの挨拶は俺にとつての慇懃無礼になる。どこまでも相性が悪かった。

ただそれとは関係なく、俺とリュミエールとの交渉は続いていた。そろそろか、と思う頃に、月光に照らされた水色の姿がふわりと訪れる。言葉少なに導き入れ、あとは全身全霊で肌の感覚を交わす。

言い争いなどした日の夜に、しゅんと消沈した顔でわざわざやってくる事もあるくらいだった。ただこれについては伸直り云々がという訳ではなく、殺伐とした神経に人恋しさが募っただけであって、俺以外の肌を交える相手がいればそちらの方に行っていただろうという程度の話でしかない。わざと喧嘩を吹っ掛け、予想通りにその晩の来訪を受けたこともあるが、意図が外れた時の空虚感と、何よりその同じ時間にどんな思いであいつが過ごしているのかを考えるのがきつ過ぎたから、直ぐにそれは辞めた。

いずれにせよ、どれだけの年月を経ても、軀を交わす一時のリュミエールの、その恐ろしいまでの素直な反応はどこまでも変わりなかった。最初のあの夜から、今日こんにちに至るまで。格別だったはずのそれを物足りなく思い始めてきた事に、気付こうかどうか、未だに迷っている俺がいる。

「：お前の星には、幾つの月があった？」
寝物語に他愛ない言葉を交わす。昼間と違って、何かの拍子に險悪になる可能性を考慮しなくていい気安い時間だった。

主星および主星上に位置するところの聖地の月は1つだが、宇宙全体の固体惑星の平均と比べるとこれは例外的に少ない方で、通常は2つから4つ、俺の故郷の草原の惑星には小型の3つの月が

あった。周期が異なるから、同時に見える月の数は夜ごとに異なっていたが。

「聖地（じこ）と同じく、1つでしたね。けれどここよりずいぶん大きくて、衛星の直径が惑星の80パーセント。視野角が2度もあって、ほぼ、連星でした」

俺の上で話す甘い中域（チヤール）の言葉が、互いの胸壁を通して直接響いてくる。しっかりとした青年男性の身体付きで、論争の最中などは憎くすら思うほどに凛として芯が強いのに、この時間の時には淡いという印象が常に付き纏う。

「潮汐力がとても強くて、周囲の海と同様に月齢の影響を生物やヒトが強く受けていました。満月や新月の時には身体が浮くような印象さえしたものです」

首筋の髪を掻き上げてやりながら、思い当たる節があった。いつかの昔のスーパームーンの時、こいつの瞳の色が少しいつもと違っていた気がする。夜を共にして陶酔が深かったから、覚えている。

「…不思議だと思いませんか」

「何がだ」

「これだけ惑星間の環境が異なるのに、そのいずれでも46本の染色体を持ったヒトが発生しているというのが。…女王陛下、もしくは宇宙自身の意志と言われていますよ」

それは誰でも、一度は抱く疑問だった。異なる惑星系なら、進化学的には同じ形態、同じ遺伝子を持つところの話ではなく、遺伝という機構自体が全く異なる生命体が発生していて当然なのだ。特にその惑星が有する衛星の質量や個数の違いは、生命の形成に無数のバリエーション（あまね）を与える。

ところが同じ構造、同じ思考形態のヒトという種が、遍く宇宙（あまね）に自然発生している。星間航行を達

成して主星文化圏に組み入れられた星系の人類が、まず最も驚くのはその点であるという。火龍族などヒト近縁の種もいるが、それとて文化や思考形態にヒトとの大差はない。

ヒトやヒト類似以外の生物種が守護聖となる所を想像するとどうにもぞつとしないから、幸いといえは幸いではあった。

「…もつとも、守護聖が守護聖である間の染色体は一倍体だとか三倍体だとかいう話が、まことしやかに言われてますけれどね」

それも聞いたことがある。根拠としては、サクリアという人に非ざる特殊な能力を有するという事実もさりながら、主には、守護聖の任期の間は子供が生まれない、という点にある。

健全な成人男性を長期間にわたって一地域内に強制的に拘束するのであるから、それなりの設えが用意されている。決して表に出る類の話ではないが、各守護聖の私邸で働く女性には「そういうこと」があるかもしれない事を、彼女ら本人も承知で折り込み済みでの任用になっている。であるのに、在任中の守護聖に子ができたという話はこの永い聖地の歴史でついぞ聞いたことがない。

つまりは、一種の奇形である守護聖と、それを囲うための聖地という場所。

「貴方がどこまでも貴方なのに、まだご子女ご子息がいらっしゃらないんですから、結構な信憑性がありますよね」

どういう意味だ、と問おうかとも思ったが、発言の意図するところはこの上なく明白なので敢えて黙っておいて、その言葉に物寂しくなった唇へ、俺の上から覗き込むリュミエールに無言のまま目線だけで要求する。やはり無言で返された柔らかい微笑は、言葉にするなら「どうしたの？」だ。少し甘い、それでいてどこまでも無邪気な。

優しく降ってくる口付けを、たまには為されるがままに享受する。ちりちりと滲みるように痛み始めた胸の内には気付かない振りをして。浅くて肌触りを優先した、少し物足りなくて追いたくなるキスが重ねられる。

「進化生物学について学んだことはありますか」

一通りの口付けの後、俺の首筋に顔を埋め、溜息のようにリュミエールが呟く。

「多少はな」

「Y遺伝子は、Y遺伝子という己自身の継承と拡散のために、身体を支配し、闘争と怜悯をもってより多くの異性を獲得する。生物学的には貴方の方が、とても正しいのです。」

「……別に嬉しくはない。」

「私の方が歪んでいる、と言うべきでしょうね。争いを避け、異性としての女性に心動くこともなく、しかしながらこうやって、貴方の好意には甘える。…判っているのです。」

「……」

「男性という性の競争原理に従って、私の遺伝子はこの身限りで淘汰されるでしょうから、気に病むことでもないのでしょうかね」

細めた目で遠くの時を見、空を仰ぐように身体を伸ばす。いつか自由になるその日へ、無意識のうちに近づくように。身体の動きに連れて稀有な青銀の髪が俺の上空で波打つ。

俺の内で跳ねる脈拍は、そろそろ無視を許してくれそうにない。

「…俺はお前の子供が見てみたいがな」

「そうなんですか？」

現在に引き戻されて、心底意外そうという口振りでリュミエールが俺の顔を見返した。俺の言葉に交じる境界線には、おそらく気づいていない。残念なことに。

綺麗な水の守護聖様は目を細めて、かくも綺麗に微笑った。

「私の子供なんて、想像できないですね……あなたが退任後、美しい奥方とたくさんの子供たちに囲まれている姿なら、いくらでも想像できますけど」

思わず目を閉じた。臨界を超えた記念すべき瞬間。

そうか、よくぞ言った。覚悟は出来てるんだろな。

身を起こしながらリュミエールの両腕を掴み、引っ繰り返してその身を自分の身体の下に敷き込む。

「…俺の噂は聞いてないのか」

「貴方の？ さあ……何でしょう？」

こいつ、本当に俺自身には興味が無いんだな。多少なりとも気に掛けていれば、容易く耳に入っただろうに。

「聖地の歴代の呪縛を打ち破って、とうとうお子が出来ましたか。貴方なら有り得そうですね」

ころころ笑う。後でのお仕置きがひとつ増えた。

ベッドに埋もれたまま楽しげに問いかける瞳を、唇と瞼への軽いキスで促して閉じさせる。甘く伏せられた瞼と睫毛を確認し、一呼吸置いてから、言った。

「……もう、お前以外との人間とはここ一年寝ていない」

「…」

「愛している、リュミエール」

「……」

うつかり眠ったかと間違えるくらいの間を開けてから、リュミエールが飛び起きた。予想していたから覗き込んでいた顔を衝突しないように一旦引いて、これ以上なく目を見開いて硬直するリュミエールの顔に改めて躡り寄る。

「えとえとえつと、聴き間違いですよね、え？」

「なんて聴こえたかは知らないが、何度でも言ってやる。愛している、リュミエール。俺にはお前だけなんだ、もう」

「あいし……」

数瞬の間を置いて、大輪の開花を早送りで見えるように頬を真っ赤に染める。

「そんな、一年って、だって私、時々しか来てませんのに、だってその間は、てっきり他の女性方がいると、え？」

「気にするところはそこか。お前を想像しながら独りでしてたって聴きたいのか？」

「……」

あ、一瞬意識が飛びかけてやがる。本当に気を失うなよ、積みもり積もった言いたい事はまだ山程あるのだから。

「勃たないとは言わないが、他の誰かと寝たところで嬉しくとも楽しくとも愉よくともないんだから

仕方が無いだろう。」

自分が本気になったのだと気付いて、けれども無邪気なお前に何も言えず、諍いは相変わらずで、そしてたまの夜のお前の訪れにこの上なく心を乱されながら平静な振りをして、俺がこれまでにどれほど、どれだけ、どんな思いをしてきたと思っっている。

「お前以外精神的性的不能にされた事の責任は取ってもらう」

「ふの……責任、取るって、ええっとごめんなさい、あ、ここ謝るところなんでしょうか、その、責任ってどうすれば」

「俺を愛して。」

「……………」

深海色の両の瞳を見開いたまま、俺の言葉の意味がその身体に染み渡る、細波さざなみのような音が聴こえた気がした。

両手を伸ばして、ゆっくり、ゆっくり抱き締める。

「オスカー、…、…あ………」

俺の掌が触れた肌からの、おそらく経験がない感触に明らかに戸惑っている。腕の輪を閉じていく過程で、胸元辺りまで朱に染めて火照るリュミエールの躰から、その熱で初めて香る甘い良い匂いが立ち昇った。

「…お前にこれから教えることはいろいろあるが、まずひとつ教えてやる。こういう行為は、愛情によって全く次元の違う体験になるってことだ」

「オスカー…」

言葉が続けさせないまま唇を塞いだ。リュミエールの鼓動が恐ろしく早く、呼吸も熱っぽく浅いから息が続かずに切れ切れに唇が重なっては離れる、そのひとつひとつごとに軀を震わせる。いい傾向だが、まだまだ足りない。

唇を首筋に滑らせ、抱き締める両手でその熱い全身を愛撫しながら囁き続ける。

「愛してるよ。もう帰さない、離さないからな。……なあ、このまま二人で一緒に暮らそう。お前がいいなら皆に公表したい。執務だつて、想い合えるならきつと上手くいく。結婚する？ 俺、お前との子供が欲しい。王立研究院の遺伝子ジェネティック・エンジニアリング工学なら何の問題もない。どうしても生体で出産しないとて言うんなら、俺が腹膜妊娠で産んでもいい。」

狩猟採集生活で小規模の集団生活と小規模の一夫多妻を、農耕生活で極端な階級社会と巨大なハーレムとを形成し、文明を得て一夫一妻と不貞塗れの社会を経験した挙句、広大な宇宙を制し、ナノテクノロジーを制して、ヒトはとつくの昔に遥か次のステップへと進んでいる。

リュミエールは初めて経験する肌の触覚の刺激と、注ぎ込まれ続ける聴覚の刺激との混乱の極みで涙目になって、途切れ途切れの小さな喘ぎ声を上げながら、俺の言葉にいちいちその涙目を白黒させるという状況にある。

ひたり、と俺は全ての動きを一旦止め、身を離してリュミエールに問うた。

「…嫌？」

「……」

火照った顔の、深海色の涙目で見詰め返される、その永遠のような一瞬、待った。

唇が、喉が乾く。人並みに緊張する。長い間綺羅きらびやかに繰り広げてきた恋の数々が、たった一

人に収束する瞬間。

愛しい人は、泣き出す寸前までその綺麗な表情を崩して、答えた。

「もつと、教えてください…」

力の限り抱き締めながら、脳裡で想像する。俺がこれまで積み上げ続けてきたあらゆる願いのひとつひとつを、とろりとした表情と声で「……ん。」とひとつひとつ受諾する水の守護聖。

想像でなく必ず実現させてやる、と誓った。これまで数え切れない程の女性に振り向けてきた炎の守護聖の手練手管を、ただ一人だけに注ぐのだ。出来ない訳がない。

十三夜の月は傾き始め、時は夜半を過ぎた頃。

宇宙を統治すあのお転婆な女王陛下は、誰よりも俺達の事を喜んでくれるだろう。すべて世は、事も無し。

いつもの彼の端正な表情が僅かに甘く崩れて、女王候補の手作りのその黒いケーキを嬉しそうに口に運ぶ。白いクリームと、ほろほろとしたチョココレートの薄切が細かく掛かっているから、綺麗に食べるには少しばかりの器用さが必要だ。

平常の彼なら恐らく無難にこなしただろうに、オスカー様、チョコレート付いてる、と女王候補の彼女に笑いながら指摘されているところを見ると、手元が狂うほどに実は余程の好物であつたらしい。顔をほの赤くすらしながらナプキンで口元を拭う。

女王試験も終盤の、心地よい昼の茶会の離れた席から、相当に意外な心持ちでその光景を眺めた。それから、ふ、と彼がこちらを向く、そのひとかけらの気配が湧き掠めたところで視線を逸らす。

彼と私との間には、重なる時間も場所も存在しない。よもやそれらを同じくしたところで、私を見ればその氷青色の瞳は一瞬で冷たい色を帯びるのだろうか。

こちら側に座る女王候補と歓談を続けながら、私も彼女らの作ってくれた菓子を頂きつつ、それでも彼の珍しいその時の表情はいつまでも脳裏に残り続けた。

キルシュトルテ。

女王候補、つまりは程なくして女王となった彼女が、育成大陸からレシピとして持ち帰ってくれ

たそのケーキの事を、私はこの茶会の件まで知らなかった。ましてやそれが彼の好物であるなど、尚更のこと。

彼は何処で知ったのだろう、と思うけれど、私などより余程聖地から外界へ出る機会の——公的にであれ、私的にであれ——多い人であるから、問うても詮無いことではある。

長い名で言うと、シュヴァルツヴェルダー・キルシュトルテ。黒い森の桜桃のケーキ、というほどの意味だ。別の言語ではガトー・ド・フォレ・ノワールといい、こちらも黒い森のケーキという意味になる。

ココア生地のスポンジケーキが黒い森。そこに雪に見立てた生クリーム、更にその上の中央に落ち葉としてチョコレートコボ^{切片}を散らし、周囲には絞り出しクリームと、黒い森の特産品のキルシュ、すなわち桜桃^{さくらんぼ}をあしらう。スポンジの間には生クリームとキルシュのコンポートと一緒に挟む。生クリームにもココアスポンジにも、ふんだんに度数の高いキルシュ^{桜桃}ヴァッサー^{留酒}を含ませるから、風味としてはアルコールの強い、ケーキと言っても比較的大人向けのものとなる。その辺りが彼の気に入ったのかもしれない、とも思ったが、それにしても根本的にはケーキなので甘く、そういうものを彼が自ら進んで食べるどころか、好物ですらあったというのが今でもかなり意外だ。辛口^{ドライ}のものばかり好むと思っていたから。

桜桃はサワーチェリー、ブラックチェリー、生のさくらんぼ、と、複数のレシピを見比べると使っているものが違ったりして幅がある。スポンジの間に挟むクリームはチョコレートクリームを使っているものもあるが、生地がココア入りなのでこれはやはり生クリームがいいだろうな、と思う。それもゼラチンの入った、弾力のあるザーネクリームで。というのも、キルシュヴァッサーを多め

に混ぜても形が崩れないし、一緒に挟むチェリーに高さがあるので、普通の生クリームだとフォークを入れた時に崩れやすくなるだろうと思うから。

ケーキの足元にもチョコレートコーを飾ったものは、白と黒のモノトーンの色合いの対比が可愛らしい。

いろいろと眺めているとだんだんと、実際に作ってみようかと思うようになった。そう考えると、楽しみでふわふわと心が浮き立つ。

菓子作りはもともと好きな方なのだろうと思う。聖地ではとりわけ茶会が多くて、しばしば手作りの菓子を用意する機会があった、という後追いの要因もあるだろうけれど。

聖地に居ても、小麦粉など一般的な菓子の材料、生クリーム、ココアなどは、良い品質のもので簡単に手に入る。難しいのはやはりキルシュヴァッサーと、生にせよ加工品にせよ、なにがしかの桜桃の実だ。

どちらも様々な種類があるし、そうであればどれがいいかは自分の舌で確認したくなる。基本的には地の物、特産品という扱いだから、一般に広く出廻るようなものでもない。となると外界に自分で赴く必要があるし、長期戦になるかな、とも思った。

それを密かな楽しみとして、心躍らせる私がいる。

私たち守護聖にとって、外界へ出る機会は見えないチケットのようなものだ。時折ふと、ひらりと手に入り、それを消費して、外出先での執務の間の僅かな自由時間、私的な望みをひとつふ

たつささやかに叶える。

彼については話から除かざるを得ない。王立派遣軍を率い、あるいは視察で、炎の守護聖として外界へ赴くことも比較的多くあるなら、平時の抜け道だつていくらでも知っている人だ。

そうではない私は、この子供じみた楽しみに数少ない手持ちのチケットをだいぶん消費した。機会を縫つては目を付けていた産地に訪れ、桜桃キルシュと桜桃キルシュの蒸留酒とをいくらか試し、手に入れる。持ち帰るにしてもそう目立つ訳にはいかないうから、荷物が少なくなるよう、僅かな時間で可能な限り厳選した。

オリヴィエの外界へ出る用件の際に、しれつとひっそり便乗したことすらあった。私らしくない行動に当のオリヴィエは随分驚いていたようだけれど、極めて大人な精神の持ち主だから深くは追求されなかった。丁重に礼と謝辞とを述べてから、早々に彼と別れていつもの収集の続きに嬉々と向かった。

水の守護聖だということは当然秘匿していたが、ゆく先々で随分と歓待された。キルシュトルテに使いたいと告げると、キルシュヴァッサーもキルシュも、おすすめの既製品はもちろんの事、秘蔵の品や僅かしか作れない自家製の品すら出して勧めてくれた。レシピに対する助言、ちよつとしたこつ、キルシュトルテに纏わる数々の思い出話。

「きつと上手くいくわ。笑顔と真心は何よりもお菓子を美味しくするのよ」

そう言われて、自分がずっと微笑んで子供のように心躍らせ続けている事に気付く。

ひとしきり集めたところで種類も味もだいぶん把握し、これは、と思うものも絞られた。

キルシュヴァッサーは蒸留酒なので、味というよりは風味の方に大きな差が出る。さくらんぼの薫りが存分に堪能でき、かと言ってケーキの甘やかな楽しさの邪魔にならないものを。スポンジの間と飾りに使う桜桃は、酸味が強く料理などにも用いられるサワーチェリーではなく、それ自体が甘いダークチェリーのシロップ漬けにしたが、漬液が砂糖を控えてキルシュヴァッサーの割合を相対に多くしたものを選び、桜桃だけで食べるとアルコールの辛さと桜桃本来の甘酸っぱさが引き立つ。優しい甘さの生クリームと一緒に食べると良いアクセントになるはずだ。

選びに選んだそれらと、他にも厳選して入手した材料とを携えて、新しい宇宙の中のこれまで通りの聖地の森の片隅、水の守護聖が代々引き継ぐ小屋へと、晴天のある日に満を持してようやく足を向けた。

取り立てて贅を尽くしたというわけでもない、むしろ質素とも言える、数部屋しかないその小屋としか言いようなない平屋だが、使うのはほぼ私だけに限られるのだから、新しく建てるって言われれば断つただろう。

ただここに関しては前代の水の守護聖から引き継いだもので、ことさら取り壊す理由もなかったからそのまま使っている。こういう機会の際には確かに便利ではあるな、と珍しくそう考えた。

そのほうが却って維持管理に手間を要せずに済み、結局はコストも環境負荷も低くなるから、と

いう理由で、水・電力などの最低限のインフラは整っている。久し振りに鍵を開けてドアを開け放つと、通気性を優先して設計された室内は黴臭さもなく、窓越しの柔らかな光と、ささやかな秘密をいつでも同じように受け入れてくれる懐かしい空気とが出迎えてくれた。

庭に出れば、バジル、ローズマリー、カモミール、エシャロット、アップルミント、マートル、他何種類かのハーブが、お互いと雑草とで陣地争いの様相を呈している。クレソンは最初からこの辺りに自生していたものだ。

すっかり収穫を終えたかと思っていたミニトマトの苗が、聖地の常春の空気に幾許かの遅れた実を付け、真つ赤な食べ頃に熟れてぶら下がっていた。

腕捲りをし、髪を纏め、手指と手首を丁寧に洗ってから、いよいよ取り掛かる。

まずは真つ先にココアのスポンジ生地だ。粗熱を取る時間が必要だし、ゼラチンを混ぜたザーネクレームが固まるまでの時間を考慮すれば尚の事である。

粉を丁寧に篩う、卵をしつかり泡立てる、けれど泡立て過ぎず、肌理を整える。粉もバターも、適度に分けて手早く混ぜる、混ぜ過ぎない。オーブンに入れる時は開け過ぎない。焼き上がりには高いところから落として空気を入れ替え、萎み過ぎないようにする。

丁寧に基本を押さえてさえいれば、スポンジケーキはそう失敗しない。聖地は気候が安定しているから楽だという面もある。海洋惑星の雨の多さに、手作り菓子の仕上がりが安定せずしょっちゅう泣かされていた故郷の妹の事を、ふと思ひ出した。

ココアスポンジの粗熱が取れるまでの間、キルシュシロップをたっぷり用意する。サヴァラン

ほどまで浸しはしないけれど、それでも充分に染み込ませたほうがこのケーキの良さが生きる、という気がする。一般的なレシピにあるシロップよりもキルシュヴァッサーの比率を多くし、味見をして、脳裡でココアスポンジとザーネクレーム、ダークチェリーの味とを合わせてみる。あまり味見を重ねると、わざと効かせる事を狙ったキルシュヴァッサーのアルコール度数で早々に酔いそう
だ。

ココア生地を焼いた幸せな香ばしさに加え、辺りの空気には既に、結構な酒精の蒸気とキルシュの薫りとが漂っている。

存分にキルシュシロップを染み込ませることを考え、スポンジは2枚でなく3枚に、カットガイドを使って均一に切り分けた。あまり高さがあると食べにくくなるから、桜桃は下段の間のみに入れることにし、上段は薄くザーネクレームを挟むだけにしよう。

冷ましたココア生地の3枚それぞれに十分なキルシュシロップを刷毛で染み込ませ、1段目の上に瓶詰めから取り出したダークチェリーの水気をよく切って並べる。切り分けやすく食べやすいように、最外縁と中央は桜桃を置かずに開けておいてザーネクレームで埋めるそうだ。なるほど、と思いい、その通りに桜桃を配置する。

キルシュヴァッサーを多めに入れたザーネクレームを作って、ゼラチンが固まらないうちに手早く、桜桃の間に隙間を作らないよう平らに伸ばし、2段目のココア生地を載せて更に薄くザーネクレームを敷く。その上に最上段のココアスポンジ。

少し時間を置いて生地を落ち着かせ、ココア生地の間で固まったザーネクレームのムースのよう

な弾力を確認する。しっかりと纏まっている。これならフォークを入れても崩れることはなさそうだ。

一安心してから、デコレーションに移る。

トルテの周りに塗る、雪を模した白いクリームはザーネクレームでない普通の生クリームだけれど、形が崩れない程度に少しかこれにもキルシュヴァッサーを混ぜる。口当たりが滑らかになるよう、肌理が荒くならないように注意しながら生クリームを泡立て、黒いトルテを綺麗に白く覆った。ココアスポンジの地肌が見えないように注意する。

それから落ち葉に見立てたチョコレートコボ、つまりチョコの薄切は、あまり細かく粉々に削れるとそれこそ食べづらくなるので、少しだけ温めてから比較的大きな切片となるよう気を付けつつスライサーで削る。味を楽しみたくて、ビターとミルクの両方を使った。ビターのうち上手くくるくと長く綺麗に巻いたものは、周縁に沿って丸く絞り出した生クリームの上、ダークチェリーの飾り付けに添えて黒い森の枝のように挿していく。

絞り出しのクリームより内側、デコレーションの中央に、チョコレートコボをたつぷりと散らした。トルテの側面、下縁に沿ってもチョコレートを軽く押し付けて飾ってゆく。これでほぼ出来上がりだ。

少し考えてから、もう1種類の白いチョコレートを手持ちの材料から取り出し、同じように少し温めてから削って、デコレーションを続けた。

ここに来て調理を初めてから随分と時間が過ぎたけれど、ずっと、物凄く楽しくて、幸せだった。

昼下がりには仕上がった、綺麗な、キルシュトルテのホールケーキ。自分でも良く出来たと思う。

白い生クリームと、黒いチョコレートコボート、丸みを強調した白い飾り絞りの上の濃紅色の桜桃との対比が綺麗だけれど、黒のチョコレートコボーの中に更にホワイトチョコのコボーを散らしてみた。キルシュトルテとしては邪道かもしれないが、コントラストが一層鮮やかになって自分としては気に入っている。

飾りのダークチェリーは落ち着いたマットな色調で柔らかく光を映している。艶出しのナパージュを乗せてみても照りが出て綺麗でよかったかもしれない。今からだと近くのチョコレートを巻き込みそうだから今回はしない事にするけれど、次はそうしようか。

白い大皿を目線の高さまで持ち上げ、いろんな方向から観察してみる。
暫くそうやって、時には小さく笑いながら矯めつ眇めつ眺め、

……そうしてようやく、数か月振りに、ようやく我に返り。

震えそうになる手に言い聞かせながら、ゆつくりとテーブルの上へキルシュトルテの皿を下ろした。

手を離し、目の前のそれを、眩暈のするような永遠に隔絶された距離から改めて見遣る。そこにあるのは先程までと全く同じトルテなのに、もはや私にとっては、ほんの以前の瞬間までの幸福の

象徴には、二度と戻り得なかった。

これを。これを私は、どうするのだろうか。

自分が食べるために作ったわけではない事は、自分自身がよく知っていた。自分以外の不特定の誰かのためでもない、聖地の人々の顔を思い浮かべられるけれど、何故選_よりに選_よってこれを作ったのかを問われて答えようのあるわけもない。

何よりも、よく判っている。痛いほどに知っている。

だって作っている間じゅう、それどころかレシピを見始めてからずっとというものの、思い浮かべていたのは彼のあの笑顔だ。

落ち着き払った端正な顔に、ふと甘さが混ざる瞬間。幸福が彼の心に入り込む時。

あれほど時間をかけた食材選びだって、それがどれだけ無意識にせよ、彼の口に合うものを、というのが絶対的な基準だった。

そうしてこの期間中ずっと、折に触れては、彼の幻の言葉を脳裏で聴き続けていたことを思い返す。やあ、これは美味しいな。俺の好きな味だ。俺のためにか？ 嬉しいな。

今となつてはその一音素すらもが、消え入りたいほどに身の置き所なく、どうしようもなく居た。堪れない。

こんなことになるこの時まで、迂闊に過ぎた。知らなかったし、気付かなかった。

オスカー。…オスカー。

私はこんなにも、貴方のことが好きだった。オスカー。

誰よりも近いところで、貴方のその強さに触れたかった。貴方の事を想って、貴方のために何かをしたかった。

その微笑みを、私に向けて欲しかった。冷たい瞳ではなく。

傲慢な己の望みは、その罪の重さに相応しい容赦の無さで、私自身の心を切り刻んだ。

私の罪の象徴とも言うべきは、この目の前の、控えめに言っても良い出来栄えと言えるキルシュトルテだった。

自分で口を付ける気には到底ならない、彼に食べてもらえる当てもない、だからといって誰かに披露するにはあからさま過ぎるこれを、一体どうすればいいというのか。

最適の材料を探して訪ね歩いてた間、各地で会った人たち。心からの歓待、共に悩み、あれこれとした心遣い、想いの籠もった食材、そして優しい励まし。その結実とも言うべきこの一皿のキルシュトルテが、全て私のこの上ない無思慮の所為で、あろうことか何処へも行き場がない。あまりの申し訳無さに涙が出そうだった。

せめて一口二口でも礼儀として自分で味わうべきだったのだろうが、食欲などどつくの昔に失せ

ているどころか、下手すると吐き気すらしそうだった。彼の事を想いながら作ったケーキに手を付ける気にもそもそも到底なれない。

嫌というほど自分の罪深さを思い知らされた挙句、重い足を引き摺って、少し離れた湖のほとりの木陰に皿ごと置き去りにしてきた。森の動物達に食い荒らしてもらえばまだしも救われるが、アルコールを相当に効かせてあることもあるし、根本的に野性の生物が好むようなものでもない。

まだ焼き菓子の良い薫りの残る小屋の室内に戻り、テーブルの脇の椅子へ落ちるように座り込むと、それからはもう二度と立ち上がれなかった。膝を抱えて蹲うずくまる、その間にも次から次へと彼の笑顔が溢れては、私を責めて消えていく。

全ては、こんなにも愚かな私が引き起こしたことだった。もう二度と、こんな事は永遠に終わりにするべきだった。もっと、もっと早くに。

貴方の笑顔。貴方の強さ。そして私のものではないその優しさ。貴方の存在。同じ時空ときに、こうして共に在ること。

全てを無かった事にするべきだった。こんな馬鹿げた間違いを二度としなくてよいように。金輪際、二度と。

「オスカー……」

口に出して、終わりにする。大事に、大事に想いを押し抱いて愛いとしんで、心の中の彼と決別する。

「オスカー……」

2回のノックの後にドアが開き、心臓が止まるかと思うほど驚いた。弾かれたように立ち上がってそちらを振り返る。

ありえない、彼の姿がそこにあった。見紛う事なき、燃え立つような緋色の髪。

整った顔立ちに張り付いた無表情と、右手に持ったその皿とに、私の血が絶対零度まで凍った。

開いた唇が固まる。何かを言わなければ、けれど何が言えるというのか。この状況で。

地の底へ血液が吸い込まれるような感覚があり、視界が暗転しそうになる。反応性の明らかな虚血症状の中、辛うじて思ったのは、何故それが見付かったのか、そして何故彼がここへ来ているのか、だった。よく開けた森とはいえ道らしい道もなく、聖地の警備上で彼もこの事は知っていたにせよ、置いてきた湖からはそれなりの距離がある。

私の疑問を敏感に嗅ぎ取ったのか、彼は何事かを言おうとし、しかし結局は何も言わないまま、無言でドアの外に私の注意を促した。

震えそうになる足をなんとか動かし、ドアの内側から薄く外を伺って、その光景に絶句した。

森の中の小動物、鳥たち、どこからこれほど集まったのかと思うほどの数が小屋を取り巻き、しかし幾許かの距離を置いて口々にさざめいている。よく見ればあの湖のほとりの方から、点々ここまで連なっている。

木漏れ日が上空から柔らかい下生えの地面に落ち、天使の梯子の光の筋が見える。

痛切な後悔とともに思わず目を閉じ、嫌でも悟らざるを得なかった。自分が只人ではないと、こ

んなささやかなお遊びの際にはつい忘れていてそれが、激しい悔恨を伴って思い知らされるのはこんな時だった。

サクリアなのか何なのかは知らないけれども、要するに今、彼の手に収まっているこのひとつの作品とも言えるそれに、念を込め過ぎたのだ。動物達が引き寄せられてしまうほど。他でもない私が。

「…もういい。皆、帰れ。」

目を閉じたまま動けない私の耳に、彼の静かな低い声が染み入る。瞼を開けてそつと見遣ると、炎の守護聖から声を掛けられた動物達は、三々五々にゆつくりと散っていくところだった。

ドアが彼の手で閉じられて、外の明るい光景が途切れ、私は彼の横で扉と向き合う形になり、再び背筋が凍った。

その手の中のものを置いて出ていってくれるのもいい、逆に外へ投げ捨てて私を責め立ててくれるのもいい。何でもいいからとにかく、彼と、私と、それとが共にある状態だけは一刻も早く止めて欲しかった。

俯いて顔を上げられないまま、横から彼の視線を感じる。何度か彼が物言いたげにする気配があつて、その度に動揺を隠し切れない私の身体が震えた。

「…美味そうだな」

彼の声音が聞こえて思わず耳を押さえたくなって、やがて思考に届いた言葉はそんな文章を綴っ

ていた。

「…え？」

緊張の解けぬまま、それでも幾分か拍子抜けし、顔を上げて思わず訊き返す。

「食べてもいいか」

ずっと避けていた視線が合うけれど、そこに気まずさはなく、

「…はい。どうぞ。」

すんなりとそう答えることができた。

彼がキルシュトルテの皿をテーブルに置き、広くもない室内を見渡してケーキナイフを見つけた頃に我に返り、慌てて自分で切ろうと手を伸ばしたけれどやんわりと押し留められた。少しの間だけ手首を戒められ、まだ震えている私の手を私自身に確認させるように。

無言のままにそれとない微かな誘導だけで、私を椅子に座らせる。大人しく従いながら、彼の動きを目で追った。

コンロの火を付け、薄刃の長いケーキナイフを軽く炙り、手を翳^{かざ}して温度を確認した後、おもむろにキルシュトルテの中央へ刃を入れた。彼の手の動きに合わせて、うっすら溶けたチョコレートコボーと生クリームが綺麗な断面を見せる。二等分に切り分けてから、一度綺麗にケーキナイフの表面を拭き取り、もう一度温め直してから、今度は1カット分に刃を入れた。丁寧だけれど切りの良い手付き。

私が差し出した皿の上へ、流れるように小扇型となった白黒のケーキが載せられた。切り口には濃紅色のダークチェリーが覗く。

彼は皿を受け取るとさっさとフォークを自分で用意し、私の斜め先に椅子を寄せて着席し、三角形の先端にフォークを入れた。

彼の口の中へケーキが収まってゆく、目も離せずにその光景を見続けた。

「…美味しい」

ふ、と軽く微笑って、彼がそう小さく呟く。トルテを見詰めていた顔を上げ、私を見遣って、そのままの同じ微笑みを私にくれた。

ぎこちなかったけれど、私も少しだけ微笑い返すことが出来たと思う。

涙が出そうだった。

この私の馬鹿げた行為を、その微笑みと共にただ不問に付してくれるなら、これほど有り難いことはなかった。耐え切れなくて目を閉じた。

「ほら」

そう声を掛けられて、閉じたばかりの目を再度開く。口元近くに、ココアスポンジと生クリームと桜桃の大きめの一片が載ったフォークがあつた。え、と、声に出ないまま彼の方を見る。

有無を言わずやや強引にフォークが近づいて、まだ何かを食べられる気分では到底なかったけれど、少し大きすぎるそれを勧められるままに口へ入れた。ほろ苦いココア生地、キルシュ酒の風味、クリームと桜桃の甘さと仄かな酸味。ゆっくり味わって、それでも、ほつとした。

「…美味しい」

思わずそう呟いて、自分の作ったものをそう評していいのか少し戸惑い、そしてふと、気付いた。今、彼は、その一片の一番美味しい所を私に勧めた。クリームも桜桃もチョコレートも、だから

少しばかり山盛りで。

視線を彼に戻したら、ごく真面目な表情で、

「…チョコレート。付いてる。」

そう言われたから、口元を手で確認した。何処？

「そこじゃなくて、」

言葉が続いたのはそこまでで、次の瞬間大きな吐息とも溜息とも付かぬものが唇を掠め、その次にはもう感に耐えかねたような彼の腕の中にいた。大きな掌が一時も間を置かずに私の体中を辿り、唇は唇に塞がれて、彼の味わった甘さと私のそれとが混じり合う。彼の膝の上で痛いほど抱き締められ、続けてまた一頻り唇が重ねられた。

翻弄されながらただ受け入れ、そしてその無言の激しい仕草の告白に必死で応えた。

「俺もお前も馬鹿だ。こんな判りやすい物を目の前に出されるまで気付かなかった。」

到底彼のものとは思えない、切羽詰まって押し殺した声を聴いて呆然とした。

「愛してる。愛している、リュミエール。お前の全ては俺のものだ」

私も、愛しています、と答えたかったけれど、もう胸が一杯で声が出なくて、ただ何度も頷いて、彼の背に廻した手で彼の服を力の限り握り締めた。

オスカー。

……オスカー。

そこから先、いつの間はどうやって狭い寢室のベッドの上で意識が途切れるまで追い落とされた

のか、はつきりとは記憶にない。

ただ何度か交わった後、泣きじゃくりながら交わした会話を幾つか覚えている。

…どうしていつも、あんなに冷たい瞳をしていたの。

「仕方ないだろう。そうでもしなければ、後はもう愛してるって言うしかなかった。悪かった。」

…ああ、そういえば、私もそうだったんだな、と思い至った。

目を合わせて、冷たい壁を取り払ってしまえば、貴方への想いしか残ってなかった。

だから私も、謝った。

…どうしてここへ。

「オリヴィエに言われた。アンタらがどういう結論を出そうが知らないけど、これだけは言つとかないとアタシが絶対後悔するからって。とにかく行けって。」

そうだった。彼はとても大人な人だけれど、それ以上に人の心に聡い人だった。

黙っててごめんなさい、オリヴィエ。

「判ってくれるさ。今度二人で謝ろう。…今はそれより、俺のことだけを考えろ。」

熱い身体にまた抱き込まれながらそう言われたから、素直に従った。

「今度、残ったキルシュヴァッサーでカクテルを作つてやるよ。『ラ・ヴィ・アン・ローズ薔薇色の人生』。」

…カクテルだったら是非こちらで、と、あと何本もあるキルシュヴァッサーを差し出せば、苦笑

でもされるだろうか。

目が覚めると、もう辺りは真つ暗だった。とはいえ感覚が間違つてなければ、夜に入つて直ぐぐらゐの時間帯だ。

いい匂いがする。アクアパツアのような。魚なんて置いてなかったから湖で釣つてきたのだらうけれど、釣り道具なんてあつただろうか、と思う。なんて器用な人。

寢室の扉は薄く開いたままで、キッチンの明るい光の中に彼の姿が見える。ストローを半分に切り、何をしているのかと思えば、即席の霧吹きを作つてコップの中に入れたキルシュヴァッサーを、ずっと放置していて少し乾いてしまったらしいキルシュトルテに吹き掛けている。本当に器用な人だ。

大きなトルテと小さな食べ掛けだったトルテ、両方にキルシュヴァッサーを掛けると、大きな方には覆いを掛け、小さな方のケーキ皿を手取る。

フォークで大きく掬うと、子供のようにかぶりつき、しばし味わつた後、相好を思い切り崩して微笑つた。

その笑顔が、今は陛下となつた彼女のあの時のそれよりも格段に幸せそうだと思うのは、自惚れが過ぎるだろうか。もっとよく見て確認したいけれど、視界はあつという間に涙で歪んでそれ以上は無理だった。

ただこちらを見て気付いた彼の照れ笑いは瞬間よく見えて、私も微笑い返しながら、再び視界は

一面の涙に覆われた。

微睡

あつけないほど簡単に全身を脱力させて、オスカーはずるりとソファへ横たわった。そうして残りの集中力を、微睡んで絹糸のように細くなった意識の維持に全力で注ぐ。

近くに立つて自分を見下ろすリュミエールから、ひやり、と、冷たい気配が肌に届いて、それが紛れもない殺気なのだと否応なく気付かされた。

今度二人で査察に降りることになった惑星は、決して難しくはないが面倒ではあると言える案件で、前調査と打ち合わせ、それから二人揃つての準備は思つていた以上に手間取り、予想外に長い時間を食つた。

炎の守護聖の執務室に夕焼の色彩が射し込み、壁のレリーフに陰翳を形作る。

その朱い光越しに縁取られ、一本一本が銀糸のように綺羅と輝く髪房。

難しくはないが面倒、まるで自分たちのようだと、自分の執務机に椅子を寄せて無言で書類を繰っている、その眼の前の水の守護聖を見遣つた。世に稀なほど整つた顔立ち、彫刻のように端麗で、そして冷たく。

己の緋色の髪を無造作に掻き上げ、長時間の業務の疲れからか、それともこの不本意な状況の気疲れからか、殊更大袈裟な溜息が自分の口先から盛大に溢れた。

水の守護聖はちらりと冷めたままの視線をこちらへ寄越し、その微かな動きに肩口から長い水色の髪が一房、流れた。

自分達の間にあるものは、聖地に来てからこれまでというものの、常にごく単純な、単純な話だった。相性が悪い、犬猿の仲、相反する存在。ただ単に、それだけの話だった。こうして同じ場に在る、その緊縛感だけで互いが酷く疲労する程に。

この自分へも一見平等が如くに投げ掛けられる微笑の、その実、その視線が他者に向けるときのそのように柔らかく解れていたことなど、一度も無い。思い出せる限り、ただの一度も。

豊かな情愛、と聖地中から称賛される一方で、自分に対しては常に固く閉ざされたままのその感情。気性相性ばかりは如何仕様もなく、それならそれで仕方がない事だと思いつながら、双方が受け流せばいいものを、頑なまでのそのリュミエールの態度が尚更オスカーを苛立ちに駆り立てるのが常だった。

それでも自分たちが対の力である事は、否定しようのない事実であり、故にこうやって二人揃って事態に^{あた}応することはそう稀でもなかったが、その度ごとに無言有言の対立は数限りなく燻し出され、すつかり出来上がった溝は深まるばかりだった。

再度溜息を吐き、そんな自分を無感情に小さく伺う水の守護聖の気配を感じる。

やがて窓の外に夜の帳が下りた頃、ようやくオスカーは自分の書類の束の最後の一枚にサインを終えた。同じようにペンを走らせたリュミエールから無言で差し出された書類と自分のそれとを交換し、もう一度署名をする。大きく息を吐いた自分と同時に、その人も小さく溜息を吐いたのが耳に届いた。

この時間まで掛かってこれだけ捌いても、未だ無事に終わり、とならないのは、自分も相手も口に出さずとも嫌というほど承知の上だった。この上、現地に着いてからの、大雑把な進行についての詰め打ち合わせが残っている。だがもう、この息の詰まるような状況はつくづくうんざりだった。

「腹が減った。続きは俺の邸^{やしき}でだ。」

目の前の、顔立ちだけは綺麗なその人は驚きに軽く目を見開いて戸惑った風だったが、今更構ったことではない。空腹を満たし、アルコールでも入れなければこれ以上やっていられるものか、とオスカーは思った。

話し合いながらの食事が済み、ドルチェが片付く頃にはおおかたの調整が済んでいた。打ち合わせというよりも言い争い、という方が適切であったかもしれないが。双方が大いに不満を残しつつ、ひとまずの予定の見込みは立ち、何はともあれ、これで後は現地向かうだけの状況が仮にも整った訳だった。

用が済んだのだからそのまま邸から追い出しても何ら差し支えはなかったはずだが、オスカーは半ば自棄のように酒席に誘った。毒を食らわば皿まで、の気分とも言えたし、形式的に誘ってさえ

おけば、当然のようにリュミエールの方から辞退されてもこちら側は薄情者の誹りを免れる。

意外にもリュミエールの返答は諾で、誘った手前、応じない訳にもいかなかった。早々に酔ってしまうことに内心決め、諸々の手配を使用人に告げながら、二人で居室に移動した。

違和感があったのだ。オスカーはその手の勘には長けている。

だが飲み干した。

まさかリュミエールが、という思いがあったし、いくら犬猿の仲と言えども、交わした盃を途中で放棄するのは相当な非礼に当たる。それで飲んだのだから、ある意味承知の上での成り行きとも言えた。

油断と言える点があったとしたら、リュミエールがどのタイミングで薬を入れたのか全く気付かなかった事だった。

水底の深淵にゆっくりと引き込まれてゆくような微睡まじろみに襲われ、自然ではあっても違和感の付き纏い続けるそれに、たとえ確証は無くとも、自分の勘がただの気の所為でなかったことを最終的に思い知った。

己を律する事に少なからぬ自負を置くオスカーにとって、罠に嵌められるのは飛び抜けて嫌悪する事の一つだ。自由の効かなくなり始めた身体の中で、沸々と怒りが湧き起こる。

と同時に、この状況をふと冷静に省みて、不可解で説明の付かない芒洋とした感覚に包まれた。

リュミエールは。この水の守護聖は。
何を考えて、こんな事を。

「……悪い。なんだか…急に眠くなってきた。」

何事にも気付いていないような自然な振る舞いを扮^{よそお}い、ソファに座り込んだまま、俯いて両の瞼に片手を添える。動かし辛くなったもう片手をなんとか伸ばし、サイドテーブルの上に空のグラスを置いた。

気を抜けば本当に直ぐにでも意識が途切れそうだったが、表向きはそのままに、内心だけで氣力を絞り出すようにして細い細い意識を繋ぎ、逆に罫を張る。

身体の力が急速に抜けてゆき、もはや失われつつある視覚が捉えた最後の瞬間、リュミエールはあの感情を閉ざした目で、柔らかく自分へ微笑い掛けていた。

「…お疲れなのでしょう。わたくしはこれでお暇^{いじま}しますから、どうぞごゆっくりお休みになってください。」

その声音の優しさの、深遠の響き。

「……ああ。」

オスカーはそれだけを呟くと、目を閉じ、脱力してずりとその身を横たえソファへ沈ませた。甘い誘惑にも似た、無意識の領域への心地良い誘^{いざな}い。

もはや指の一本も動かせず、身動^{みじろ}ぎも出来ない。むしろ正確には、自分からそれらを進んで放棄

した、に近い。身体のコントロールを全力で投げ捨て、眠った振りをしながら、その代わりに本当に途切れそうになる意識に向けて全身全霊を振り絞り、深層で辛うじてその糸を繋ぎ留める。

「……オスカー？」

些かの間を置いてから、すらりと立ち上がった水の守護聖の、意識の有無を問い掛ける無感情の声色に、瞼を閉じたまま無言を偽り、謀る。

自分の傍らに立ち尽くす気配のリュミエール。

その気配からふと、ゆらめいて流れ出た、冷たい緊張感がオスカーの肌を刺したのはその直後だった。

各地での騒乱の度に何度か遭遇した、覚えのあるそのびりびりとした感覚。
動かぬ身体の、淡い微睡の内で、脳髓が痺れ、背筋が凍った。

リュミエールは痛いほどに気を張り、自分を凝視したまま、身体を小刻みに震わせている、見えずともその気配が手に取るように判る。

そうしてその胸の中で、ひとつの決心を、強く強く思い念じている。

「絶えよ」と。

一途に、ただ一心に願う、その強く痛い気配。

激しいその気配に襲われながら、オスカーは不意に可笑しくなった。もし今、身体が自由が効い

たのなら、きつと自分は避けるでも逃げるでもなく、ただひたすら声を上げて笑っていたに違いなかった。

気付かなかった。

何がどう水の守護聖を追い詰めたのか知らなかったが、そこまで、それほどまでに、この自分たちの間の断絶が深かったとは。

気付かなかった。今の今まで。

心のどこかで、その暖かい優しさがいつか自分にも分け与えられる事を、どこかで期待していた。いつかは、と。

あからさまな強い気配をもはや隠もしない水の守護聖の、紛うこと無きこの状況に至って、よもやのそんな夢物語も雲散霧消し、心境は既に深々とした諦めの境地でしか無かったが、だからといってこのまま思うままにされてやる気もさらさら無かった。

未だ薬の影響は深く、身体はなおもって全く自由の効かぬが故に、今ここで直ぐにどうこうする事もままならない。何かの反撃が出来るとしたら、最善のタイミングの一瞬にすべてのエネルギーを注ぐより他になかった。

ともすれば微睡に落ちようとする意識を、氣力を振り絞って研ぎ澄まし、その時を待つ。

張り詰めた気配のまま、リュミエールがゆっくりと、ごくゆっくりと、音も立てずに自分の傍らのソファの座面に腰掛けた。

身体を傾け、自分の方を覗き込んでいるのだと、瞼越しの淡い光に影が射したことで知る。

緊張とともに伸ばされた片手は、顕になったオスカーの首筋を、

——そつと撫でて通り過ぎ、

頬を掠めて。

疑うべくもない、淡く優しい手付きで、その緋い髪を、梳いた。

同時に、ぼたり、と、温かい雫がオスカーの顔の上に降った。

これまでの全てを根底から覆す内側からの衝撃が、全力でオスカーの精神を叩き起こした。

ふ、と、リュミエールがゆっくり、柔らかく身を屈める。

自分の肩に微かに手を添え、羽毛のように、自分の上に暖かく寄り添う身体。細かく震え続けて。オスカーの顔の脇に顔を埋め、濡れたその頬が、オスカーの頬に触れ。

そうして押し殺した声が、耳元で優しく、囁いた。

「……オスカー……」

オスカーの自由の効かない身体の中で、こころが、その声にこれ以上無いほど引き絞られる。痛いほどに優しく、哀しい、その声。

その手が。その震えが。その声が。その涙が。何もかもを全て顕らかにすると同時に。一度きりと。今この時、ただ一度きりと。それで終わりにするのだと。

その切なく激しく、哀しい想いに、微睡の中で、自分の身体までもが千々に引き裂かれそうだった。

水の守護聖は身を起こし、その優しい手がもう一度、自分の髪を梳いた。

そうして暖かい唇が、ただ一回だけ、微かに、柔らかく——自分に口付けて。

自分の顔を濡らした幾許かの雫がその優しい手に丁寧に拭われると、気配は立ち上がり、さなりと身を緩やかに翻して、扉の向こうへ静かに消えていった。

「……ええ、お疲れのようで、少しだけお眠りに。時間が経ちましたら、寝室でお休みになるようお声掛け差し上げて下さい……」

廊下での微かな遣り取りが聴こえ、やがてそれも消え、送りと思しき馬車の音が去ってから、よ

うやく気付いた。

あの殺気。あれは。

あいつが全身全霊をかけて、縊り殺そうとしたのは、他でもない、俺への想いだ。

俺の髪を撫で、寄り添い、一度だけのキス。

そのためだけに、あの水の守護聖がこんな危ない橋を渡り、そうして俺の下から遠く立ち去って、俺の手の届かない所で、その痛いほどに尊い想いを、永遠に握り潰そうとしている。

もはや謀る必要の相手の居なくなったソファの上で、無様なうめき声を上げながら氣力を振り絞り、辛うじて片手で左耳のピアスのカプセルを折り取ると、その中に在った粉末を、首を捻って舐め取った。

睡眠薬との相互作用で多少ならずふらつくものの、急速に身体のコントロールが手元へ戻ってくる。

酷い顔色で居室から出てきた主あるじに使用人たちが尽こじこじく驚いた顔を見せるが、氣に留めている余力も暇も一切無かった。アグネシカに急ぎ鞍を付けるよう伝え、まだ思い通りに動かない身体を引き摺るようにして厩舎へ向かう。

あいつはそろそろ、自邸に着く頃か。部屋に戻り、一人きりで、あの暖かい涙と決別して、俺への想いをその哀しいところの中で潰えさせるのか。

させない。

たとえお前自身にでも、そんな事は。

俺の事を勝手に好きになっておいて、俺がお前の事を勝手に好きになるのをよもや駄目だとも言わせない。

鞍を付けられたアグネシカの背になんとか這い登り、目的地に着くまでのひととき、脱力してその首に身を預ける。

「…頼むぞ、アグネシカ。あいつの所へ。」

水の守護聖の居邸に着く頃には、もう少し身体の自由が効くようになっていいるだろう。

最善のタイミングの一瞬に、すべてを注いで。

永遠に、俺のものにしてやる。

静かに駆け出したアグネシカの背で、オスカーは不意にそのアイスブルーの瞳に不敵な微笑を浮かべた。

例のふとした事件がきっかけで、長年犬猿の仲であった炎の守護聖オスカーと水の守護聖リュミエールの仲は急激に改善された。

それ以来、こうやって執務後にオスカーがリュミエールの私邸で過ごすことが増えている。リュミエールもこのところ、週末は自分の居館でオスカーが夕食を取るのが当然のように食事を手配していた。

そのまま水の居館に泊まって、土の曜日や日の曜日を遠乗りやスケッチ、あるいは庭でただのんびりと一緒に過ごすことも、最近かなりの頻度になっている。オスカーの私服なども増えてきて、とうとう水の館の客間の一つがオスカー専用の部屋のようになってしまったほどだ。

何をするわけでもない。

ただこうやって、執務が終わったあと私邸に訪れ、食事をしたり酒をたしなんだりしながら、その日にあったたわいもない話をしたり、今まで話せなかった昔の思い出話をしたりするだけだ。

今まで散々対立してきた2人だが、その逆が真であるのと同じように、反感はごく簡単なことで好感に変わるものなのだ。

まるでパズルのパーツのように、オスカーとリュミエールは有るべき所にぴたりと収まった。

ただそれだけのことだった。

そういう習慣をはじめてから、オスカーはリュミエールが随分と子供っぽい一面を持っていることに気が付いた。

よく子供のように笑うし、気に入らないことがあれば口を尖らせて文句を言う。大の大人がやるようなものではない、子供騙しの遊びに本気で興じる。ことに髪をなでられたり、頬に触れられたりといったスキンシップが大好きらしい。満面にうつとりした笑みを浮かべながら擦り寄ってくる。宮殿でいつでも穏やかな顔を見せ、静かに微笑んでいるあの水の守護聖だとはとても思えない。

そう言ってみせたら、それはあなたも同じでしょうにと、やっぱり子供のように無邪気に笑われた。

確かに言われてみれば、子供騙しの遊びに本気になって相手になっているのも、青銀色の髪 of 感触やお返しにと緋色の髪を撫で返してくる手の感触を心地よく思っているのも、全部オスカー自身だった。

考えてみれば、2人とも子供らしい子供時代というのが欠落しているのだ。リュミエールは幼いころの人付き合いの少ない、両親と年の離れた兄弟との穏やかな生活で、オスカーは少年のころから受けた軍人としての教育で、その反動か、今の生活が楽しくて仕方がない。

苦笑しながら肩をすくめ、図星を言い当てられたことを表現すると、オスカーは手を伸ばしてリュミエールの髪を撫でた。

リュミエールは心から嬉しそうにころころと笑った。

それがオスカーには嬉しかった。

それ以来オスカーは、2人だけのときは遠慮なしにじやれあうことにした。

リュミエールもその無言の約束を快く受け取ったようだった。

「とても人には見せられませんか」

毛足の長いカーペットに寝転がって、リュミエールはひどく嬉しそうに隣に寝ころぶオスカーに笑いかけた。

ささやかな秘密の共有。

子供のころに作った秘密基地のような。

オスカーの夜遊びは目に見えて減った。事情を知らない周りの人間が首を傾げるほどに。

オスカーにとつて、女だとか酒だとか夜遊びだとか、そういうものは必要最小限の欲求を満たす程度に扱いが落ちた。

リュミエールと過ごす時間のほうが全然楽しい。

ベッドの上での駆け引きよりも、ふわふわのカーペットに寝転がって、水色の髪をもてあそんだり滑らかな白い頬をつねってみたりすることのほうが何倍も充足感を与えてくれる。極上の酒よりも、リュミエールに勧められて水の館の庭で初めて舐めてみた花の蜜のほうがずっと甘い。楽しかった。

これじゃほんとに、いつも自分が小馬鹿にしている年少組よりもガキだな、とオスカーは思いな

がらも、それでもやっぱり楽しいと思う自分の心を素直に受け止めた。

受け止められるようになったのは、たぶん目の前に水の守護聖がいてくれるからなのだろう。ごく自然にそう思った。

いろんなことを話すようになった。昔の思い出、お互いの考え。

話したいことは尽きなくて、一緒のベッドに潜り込んで一つの毛布を2人で被って話しつつづけるようになった。そしていつしか睡魔にまどろみ、どちらからともなく2人で眠りにつく。それは愉えようもない幸福感にあふれていた。

いちばん最初はやっぱりオスカーもそれなりに気が引けて、カーペットの上で毛布に包まって寝物語をしたのだけれど、そのまま寝て翌朝起きた2人は、いくら毛足が長いカーペットでもやっぱり体のあちこちが軋んでいて、お互いにストレッチをしながら、今度からはやっぱりちゃんとベッドにしましょうねとリュミエールが言ったのだった。そのあまりに無邪気な物言いに苦笑しながら、それでもオスカーはその申し出に従うことにしたのだった。

リュミエールの体温を近くに感じながら眠るのは心地よい。

ある日の夜も、そろそろ眠くなってきた、でもリュミエールがまだ話したそうにしていたので、2人でリュミエールのベッドに入った。

リュミエールは話を続けた。聖地に来る前の話。オスカーが見たりリュミエールの表情は、心なしか少し寂しそうだった。

オスカーは手を伸ばし、青銀色の髪を梳くと、肘を立てて上体を持ち上げ、リュミエールの白い頬と目尻に1回ずつ、慰めるように唇をそつと当てた。

リュミエールは少しだけ微笑んで、オスカーへ体を寄せた。

オスカーは再びベッドに横になり、リュミエールの体をやわらかく引き寄せて抱きしめた。鼻先の青銀の髪からいい匂いがした。

額にキスをして、リュミエールの首の下に自分の手を通し、両手でしっかりと抱き寄せた。

抱きしめた肩は、自分の肩が少し余るくらいで。

でも確かな存在感とぬくもりを持って、自分の中に在った。

朝起きて、自分の腕が誰かを抱きしめたままではいるのは、オスカーにとって初めてだった。

女性と共にする夜も、事が済めばいつもあつさりと腕の中から手放していていたのに。

夜中、自分やリュミエールが寝返りを打つたびに、引き寄せて強く抱きしめなおしていた記憶がぼんやりとある。

寝苦しかったかとリュミエールに聞くと、すぐ気持ちよかったですよまるで海の中にいるみたいでしたと微笑み、ありがとうと言ってオスカーの頬に軽く口付けた。

あんなものならいつでもしてやると答えたオスカーは、リュミエールの唇の上にそつとキスを落とした。

それ以来、ベッドで抱きしめて眠ることと、頬や唇への触れるキスとが習慣に加わった。

それからどのくらいの日が経ったころだったろうか。

いつもと変わらない週末、ベッドの中でじゃれあう。くすぐったそうに笑いながらオスカーの口付けを頬に受け、手を伸ばして自分から寄り添ってきたリュミエールの体を、オスカーは少し強めに抱き寄せた。

リュミエールをベッドの中で抱きしめるとき、自分の体が微妙に欲情していることをオスカーは知っていた。

そういうものなのだろうと思って、最初から別に疑問も抱かなかった。何しろこの頃はリュミエールのところに入り浸りで、性欲を思う存分発散させる機会が減っている。毎晩のように女性を愛し、情熱を体で表現することが息をするよりも簡単なことであつたオスカーにしてみれば、自分の感覚も当然のことと思われた。

だいたいリュミエールは抱きしめているだけで気持ちがいい。それどころか、軽いキスをしたり頬に触れたりするだけでもひどく甘いものをオスカーに感じさせた。

至上の美貌、吸い込まれるような深海色の瞳、白くて滑らかで暖かい肌。天に二物とない輝く青銀色の長い髪。オスカーだけに囁きかける声、緋色の髪を優しく梳く手。子供のような純真さ。それが自分だけに向けられているこの時間。

いつか終わることになるのだろうか、とふとオスカーは思った。

その瞬間、胸がじくりと沁みるように痛んだ。

「オスカー？」

翳を落としたオスカーの表情に気が付いて、リュミエールがオスカーの頬を両手で包み込む。

オスカーは一瞬躊躇して、それから……リュミエールの両手首に自分の手をそつと添えた。

そのままゆつくりとリュミエールの手首をベッドに縫い止めて、上から覆い被さるような格好でいつもの触れるキスをした。

いつもと同じキスと、普段と違うオスカーの表情に、少しだけ戸惑いの表情を見せたけれど、リュミエールは黙って目を閉じ、オスカーの口付けを受けた。

オスカーはそんなリュミエールの表情を間近で見ても、少しだけ深く唇を重ね進めた。

ぱちり、とリュミエールの目が開く。軽い驚き。けれどもその深海の瞳の中に嫌悪の感情はない。

それを読み取って、オスカーは唇を重ねたままりリュミエールごと横向きに体勢を変えると、青銀色の髪に手を差し入れてリュミエールの頭を抱え込んだ。

驚いた顔をしているが、抵抗はない。それに安心した。

リュミエールの下唇を啄ばむように、オスカーは自分の唇を少し動かした。

リュミエールの口から、あ、と言葉が漏れた。オスカーの脳を打つ。

もう一度、唇をただ重ね直す。わずかに深く。いつもの乾いた唇とは違う部分が少しだけ触れ合わさっている。

もう一方の手をリュミエールの背中に回し、引き寄せた。

そのまま撫でさすり、背中と腰を行ったり来たりさせる。

背中まで上がってきた手を、そのまま上げてゆき、うなじに這わせ、すつ、と指先で撫でた。

ぴくり、とリュミエールの体が揺れて、重ねたままの唇から、あ、という言葉が吐息と共にこぼれた。

リュミエールの頬が上気している。

もう駄目だ、とオスカーは思った。

リュミエールに覆い被さった。開いた唇から舌を差し入れる。甘い疼きに体中が痺れる。耐え切れずに指先をリュミエールの指に絡めた。

リュミエールの自由な手がオスカーの背を泳ぐ。決して拒否ではない動きで。その手が居たたまれないようにオスカーの服を強く掴んだ。

深く合わされた唇と差し込まれた舌に、苦しげに溺れるような反応を見せ、最初はただ圧倒的な熱に押し流されて、それでも必死に受け止めようとしていたようなそれに、だんだんと受け答えの

反応が見え隠れしだした。追い立てるオスカーの舌に時折どうしていいかわからないような反応を見せ、戸惑いながらも、躊躇いがちに自分の舌を絡めてくる。

唇を離す。息継ぎの間に吐息が漏れる。熱い。再び深く重ねる。相手の舌を求める。絡まる。何度も何度も。深く求め合い、貪る。

——どのくらいの夢中になっていただろうか。

ようやく唇を離すと、2人とも、上気した息で大きく呼吸した。

それから眼を合わせて。

どちらともなく、笑いがこぼれた。

最初は小さかったそれが、だんだんと大きくなって。そのうち2人で大きな声で笑い出した。オスカーがちゅ、とわざと音を立ててリュミエールの頬に口付けた。くすぐったそうにそれを受けるリュミエールに、2回3回と重ねてキスを降らせる。笑いながら4度目を避けて、お返しとばかりにリュミエールがオスカーの頭を抱きこんで強く額に口付けた。

くすぐったり強く抱き寄せたり、……数え切れないほどのキスを交わしたりしながら、しばらく2人でそうやって笑い続けてじゃれあった。

そうして、ゆっくりと笑い納める。笑みを浮かべたまま、でも少しだけ真面目な顔に戻って、オスカーは自分の腕の中にリュミエールを抱き込んだ。リュミエールの頬を両手で包んで自分のほうに向けさせ、眼を合わせる。

視線を絡めたまま、唇を近づけていった。リュミエールがゆっくりと目を閉じる。その仕草に愛しさが込み上げる。

唇が触れ合って、そのまま深く重ねていった。熱い。

つきん、と甘い疼きがオスカーの脳に走る。

今までいろんな女性と散々唇を重ねたのに、リュミエールだけに感じるこの感覚。

ああ、そうなのかとオスカーは腑に落ちる感じがした。

これがただ一人を愛するということなのかと。

唇を離し、もう一度軽くキスしてから、左手でリュミエールのうなじや耳元を探る。滑らかな白い肌。それがほんのりと桜色に色づいている。

リュミエールの顔を見た。深い海色の瞳は少し潤んで、熱に浮かされたような表情でオスカーを見ている。

たとえばもなく官能的だ。

右手でゆつくりと、リュミエールの部屋着の胸元を開いていく。首筋の白い肌。オスカーは吸い込まれるように唇を寄せた。触れた瞬間、リュミエールの体がぴくりと跳ねた。そんな反応が愛おしくて仕方がない。

一気にリュミエールの軀に溺れそうになる自分に、リュミエールの心と身体を傷つけないため細心の注意を払うよう、残されたわずかな理性に言い聞かせた。

「目が覚めたか？」

私の意識が虚空の彼方からようやく戻ってきた時、一番最初に目に入っただのは他と比肩しようのない緋色の髪だった。

その人の確かな徴が自分の目の前にあることに、笑みがこぼれる。

自分に覆い被さるように覗き込んでくる氷青色の瞳は、優しく心配げな光をたたえていた。ゆつくりと手を伸ばして、その人の首に両腕を巻きつける。

大きな手と力強い褐色の腕が、優しく私を抱き寄せてくれた。

「すまん……無理させたか？」

「いえ、……明日一日は、歩けそうにありませんけど」

身体を隔ていても感じた彼の激情。それを抑え、出来る限りの注意を払ってくれたのだろう、胸元に付けられた彼の所有の印以外に、私の身体に明らかな傷はないようだった。それでも初めて触れるお互いの軀にどちらもが追いつけられ、奔放に欲情を交わした名残は、私の身体の軋みとしてあちこちに残っていた。

お互いが溺れていたのを知っているのに、彼はそれ以上謝罪の言葉を言わず、決まり悪そうに笑っただけだった。それが嬉しい。

首に回した腕に少しだけ力を込めて、彼の肩口に顔を埋め、囁いた。

「全部、あなたに教えてもらったものだから……オスカー」

そう、全部あなたからもらったもの。私の髪を撫でる、あなたの優しい手の感触も。あなたの腕の中に収まる、染み入るような幸せも。あなたを求める恋心も、その恋心を言葉で、身体で、心で交わす方法も。泣きそうになるほどの甘く切ない交わりの時間の後の、この身体の軋みさえも。

オスカーはちよつと驚いたような表情を見せてから、……熱くて優しくて深いキスを、私にくれた。

オスカーはキスを納め、リュミエールから少し離れた。再び欲情に押し流されそうになる自分を抑える。自分はともかく、これ以上はさすがにリュミエールの身体が持たない。

その様子を読み取ったのか、リュミエールがオスカーの腕の中に収まったまま、くすくすと笑った。オスカーにはそれが愛しくてならない。

まったく、この人には敵わない。

苦笑して、リュミエールの髪を梳き始めた。リュミエールが視線を上げてくる。

「リュミエール」

「はい」

返すリュミエールの表情は限りなく優しい。

「なんとなく、順序が違うような気がするが……」

少し躊躇う。

重ねた身体からリュミエールの想いは自分に伝わっていたが、自分の都合のいい思い込みではないかという一縷の不安はやはりある。言ってしまったがゆえに、この人を失うようなことになるのが怖い。

オスカーは一度目を瞑って、ゆっくりと呼吸してから、目を開けて視線を合わせた。

「おまえを愛している。……俺だけのものになってくれ」

オスカーのその言葉を聞き納めると、リュミエールはゆっくりと目を伏せた。

どきり、とオスカーの胸が跳ねる。やはり言わないほうがよかったのだろうか？

不安に渦巻くオスカーに、リュミエールがゆっくりと口を開いた。

「ひとつだけ、お願いがあるのですが……」

「何だ？」

リュミエールが伏せていた目を上げる。その瞳の中に不安げに揺らめく光に、オスカーは再びどきりとした。

リュミエールの手が伸びて、オスカーの首に絡まる。身を寄せてくる。吐息のような囁きがオスカーの耳元から聞こえた。

「私ができるような事ではないとわかっているのですが……でも、もう、……あなたが、……他の女性のところへ行くのを見るのが辛いです……無理は言いません、あなたが出来るだけでいいですから……私の、傍に、いてください」

最後は消え入りそうな声になった。

オスカーは驚いて、リュミエールの方を見た。リュミエールの視線は居たたまれないといったようにオスカーから逸らされている。

次の瞬間、リュミエールは息苦しさを覚えるほどに強く抱きしめられた。

「おまえしかいない。」

熱い声で囁かれる。激情を押し殺したような声で。

「おまえが手に入ったから、もう何もいらぬ。他の女なんて抱けるわけがない」
そう言つて、もういちど震えるほどに強く抱きしめた。

それから、ゆつくりと腕の力を緩め、腕の中のリュミエールと視線を絡める。

「信じられなくても無理はないと思う。俺は今までそう思われても仕方のないことをしてきたし……
だけど。本当だから。何年経つても絶対に裏切らないから」

両手でリュミエールの頬を包む。

「俺は、おまえだけのものだから。だからおまえは、俺だけのものになつてくれ」

永遠のように感じられた、一瞬の沈黙のあと。

リュミエールの顔に、まつさらな微笑が広がった。

オスカーは、長い時を経てようやく手に入れた魂の半身を抱きしめながら、この時のこのリュミエールの微笑を一生忘れることがないだろうことを確信していた。

恋はまだ、始まつたばかり。

大人の特権

「昼間の茶会も悪くはないが、俺に言わせると、物足りないな。…二次会でもするか？」

「いいねエ。当然、何本かあんたが提供してくれるよね？ オスカー」

「ふたりとも…女王候補の前ですよ」

陽はたつぷりと昇り切って昼の天蓋を渡り越し、夕方までの狭間の時間の、女王の宇宙の宮殿の庭園。

「…で、リュミエールも誘うのか？」

ディア主催の茶会が先ほどまで開かれていたその場のすぐ脇で、確認49%、反駁51%の意を込めて念のため訊いてみる。すぐさま皺の寄った眉間と跳ね上がった柳眉でオリヴィエから無言のままに応えられ、オスカーは疑問を口にしたことを後悔した。

「往生際が悪いねエ。あんな会話をしておいて、これでリュミエールに声を掛けなかったら、まっま悪意の塊じゃないの？」

「リュミエールが勝手に話に入ってきただけだろう」

「あんただって判ってるくせに。3人が一人減って話相手が2人から1人になったら、各自が入手できる情報量は半分になっちゃうでしょ」

「判っている。」

『物足りないな』『いいねエ』『女王候補の前ですよ』の言外の意味が互いに理解できるのは、不仲な関係が入り混じっていたとしても、中堅組と呼ばれて久しく守護聖の座を共にしてきた自分たちだからこそと言える。

ただの気楽な飲み会ではない。女王試験の開始宣言から一月。疑問を山ほど抱えたまま、不安定極まりない情勢の現宇宙を離れてでも、かつ女王試験を計画した管理者が唐突に行方不明となった後でも、なお半ば強硬に開始された、その女王試験の行く末が何を意味しているのか。それぞれが知り得た情報をいったん総括する頃合だと見たのだ。そしてそのことを、女王候補には僅かにでも気付かせたくないという思い。

年長の守護聖たちは疑問を抱きながらも各々がそれぞれに行く末を見据え、年少の守護聖たちはこの試験の不自然さに気付く術もなく無邪気に女王候補たちと飛空都市での日々を過ごしている。自分たち中堅にとつての最善は互いに情報交換をすることだと、冷徹な理性では判っているが、それでもオスカーにとつてリユミエルと場を共にするのは気が重い。

「なんでよ」

「判り切ったことを聞くな。あいつと話していると苛々するからだ」

水の守護聖の穏やかな微笑は、自分と一言二言声を交わすだけでさも哀しげに顰められる。

オリヴィエは胸の前で腕を組むと再度眉根を寄せ、しばらく沈黙した後、溜息を付きながら気怠そうに前髪を掻き上げた。

「オスカー、あんたさ、ずっと言おうかと思ってたんだけど。…じゃあ、とつておきの方法、教え

てあげようか」

「方法？」

「そう。方法。あのさア、あんたが余計なこと言い過ぎなんだよ。平和裡に会話を成立させたいっていうんなら、9割5分は黙ってな。」

「は？ 俺が悪いとでも言うつもりか？」

「私に言わせればその通りだね。『お優しい水の守護聖殿』とか『麗しい水の守護聖様』とか、軽い言葉言われてきゃあきゃあ喜ぶ女の子相手でもあるまいし。端から聴いてるだけの私でもイラッとするのに、毎回毎回言われてる側の身としては堪らないと思うよ」

「……………」

確かに心当たりがなくてはならない。反りが合わずどうしても話しづらい相手に対して使う冠詞のようなものの程度の認識で、深く考えたことはなかったが。

「判った。俺にも非があるようだ。今日は控える。」

「結構結構。…って、今後改めるつもりはないワケ？」

「リユミエールの出方次第だろう？」

「…まあ、その程度が今の妥協点ってトコだろうね」

女王の宇宙から新しい宇宙の飛空都市に戻る途上、二人は次元回廊の入口で佇む水の守護聖に会った。

オスカーから声を掛け、その晩の会合の約束を交わす。オリヴィエの忠告通り、いつもの物謂い

は大幅に省いて。

「それでは伺います」というあつさりとした返事が返ってきたのみであつたので、実質的な効果があつたかどうかは判らない。

飛空都市においての守護聖たちの私邸は、女王候補たちの特別寮と反対側、聖殿を挟んで逆サイドの広大な領域内に点在する。

飛空都市そのものが高度に発達したテクノロジーを用い、育成大陸の上空に浮遊していることが象徴するように、その気になれば一切人力を必要とせず全てが機能するようになっていいる。

そこにあえて人手を介入させ、時間をかけるのが貴人の義務として、オスカーの私邸は古典的様式でまとめられ、オリヴィエの私邸は主自身の厳格な美意識に従いアナログとデジタルが使い分けられ、そして人の手を煩わせるのを好まないリユミエールの私邸は、表に見えないところで意外なほどに多くが電化されている。

飛空都市を含めた聖地においての主流としてはオスカーと同様のパターンで、すなわちそう設計すれば各地点間の移動もあつという間に済むのだが、あえてそうはしていないが故に、距離の空いた建造物間の移動は馬車か馬。せいぜいゼフェルがエアバイクを持つている程度だ。

夕刻、したがって馬車でオスカー邸に到着し、姿を表したリユミエールの出で立ちを見て、オスカーとオリヴィエは言葉を失った。

いつもの正装で身に着けている重い肩掛やアクセサリーの類は全て外され、リユミエールは真っ白いコットンシャツにブラックジーンズ、薄手のスニーカーに、やや大判の青いショールを肩から

掛け、19弦の小型のハープを片手に抱えるという恐ろしい軽装でやってきたのだった。またその盛りようが想像を絶していて、美を司る夢の守護聖をして「……嫉妬するほどだね」と言わしめた。

プライベートで行き来をしたことがほとんどないということもあるが、それにしても今まで目にしたことのある私服の中で度を越して無防備な格好だった。

軽装の理由をオリヴィエに問われ、水の守護聖は「新しい正装にまだ慣れず、肩が凝るもので」と、女王試験の開催を機に一新された衣装の感想を口にした。

「確かに、リュミエールに着せるにはちよつと装飾品が多いかな、とは思うねエ。もつと素材を活かした上でメイクしないとね。」

「あの、オリヴィエ、念のため重ねて申し上げますが、メイクはご遠慮したいのですが……」

他愛無い会話を聞き流しながら、それだけではなさそうだな、とオスカーは思った。洗いざらい話し合う用意がある、とのリュミエールの無意識の表明だ。そちらも全て話せ、と。自分がいつもの物謂いを省いたことの影響はあるのだろうか。それについては確信がなかった。

「ね、余計なモノがないってのはいいことだろ？ オスカー。」

「そうだな、メイクもない方がいい。」

「優れたメイクは素材を引き立てるんだってば……」

それぞれの好みに少しずつ沿う形で誂えられた晚餐を済ませ、部屋を居室に改めてから、ソファに思い思いに掛け、全員が持ち寄ったアルコールを改めて開栓する。赤ワインが3本に白ワインが2本、うちオスカー提供の、カティスが残していったフルボディの秘蔵品は開くのに時間がかかる

のを見越してデキャンタージュ済みである。空になった瓶の懐かしいラベルを目にし、念入りなことにヴィンテージも確認してオリヴィエが歓声を上げた。その他リキュールや、炎の館に常備のブランドーやウイスキーなど。

「我々の変わらぬ友情に」

主催者が辞退したので代わりにオリヴィエが発した乾杯の辞は、素直な感情の発露とも皮肉とも取れる。あるいは願望か。自分たちを取り巻く環境を含めての。

滅びつつある宇宙を救うための女王試験。どうやらそれで間違いなさそうだった。しかしその詳細はというと、誰もが理解し得ていない不明な点が多い。最大の問題点は、総指揮者であった前鋼の守護聖が唐突に姿を消したことにある。以来、女王試験の開始までに聖地の時間でも数年を要しているが、王立研究院の雰囲気からして、万全に準備出来たとは言い難いようである。

この時期にそれでも女王の直々の声掛かりで次期女王試験が断行された理由が、不安定さを加速度的に増す宇宙と、それとは対照的に現れた2人の女王候補の並外れた資質、その点にあるのも疑いが無い。

女王およびその候補生が力を用いることといえば、「願う」そのことだけだ。彼女らが力を尽くして願ったそれが、守護聖の力を引き出し、大陸に、星に注がれ、願いが宇宙の時の流れを変え、果ては離れた宇宙同士をも繋ぐ。女王候補からの真摯な願いを受諾するたび、自分たちから驚くほどの力が引き出され、大陸へと降り注いでいくことに、今でも日々改めて感嘆させられている。

彼女らから請われると、その願いの強さ深さ故に、誰もが滅多なことでは断れないようになっていたのだ。あるいは「いかに断れないか」ということを測ることそのものが、試験の一端とも

言える。女王の資質として不可欠な、宇宙をも動かす一種の強制力を観ているのである。

もつとも彼女らから願われるのは、そう気分の悪いことでもない。

「じゃ、私はこれで」

ゼフェルがどうやら女王試験の真相を気にかけて調査に入りそうだと、話がそこまで辿り着いたところで、明日の日の曜日は用事が入っているからとオリヴィエが断り、夜半を前に炎の館を後にした。

「：どちらの女王候補でしょうね」

残ったリュミエールが、普段は滅多としない、ひとの事に口を出すような珍しい発言をした。もつとも口調に色味は一切なく、軽交う気配も羨む気配も皆無の、ただ暖かい疑問形だった。

どうやらどちらとも相性が良いらしく、また見た目とは似つかわしくない意外な常識人としてほとんどに碎けているのがいいのだろう、オリヴィエは試験開始直後から、たびたびアンジェリークと、もしくはロザリアと一緒に過ごしていた。それに比べると、オスカーやリュミエールはまだ2人から躊躇いがちに、遠巻きにされている雰囲気がある。

オリヴィエと同時に邸を辞するかとも思ったので、リュミエールがその後も残ったのはオスカーにとって意外だった。ここに至って、オリヴィエの忠告がとりあえず今日のこれまでの経過に少なからず影響していることを思い知る。そもそもオリヴィエ自身が、会の成り行きを見、これなら二人で残していつでも大丈夫、と判断した気配がある。

その後も杯を重ねた二人は、オスカーならこの程度はざらにあることだったがそれでも多少は酔っており、リュミエールの方はというと普段より相当に飲んでいるはずだった。もはやソファから

滑り降り、床に敷かれたラグに座り込んでソファの座面に背を預けている。もっともオスカーも似たようなもので、ラグの上で胡座をかいてグラスの中のブランデーを舐めていた。

皮肉を交えた普段の物言いを省くと、それもオリヴィエがいなくなると必然的にぽつりぽつりと途切れがちの会話になるが、言葉に気を払う面倒さはあるものの、意外にもオスカーにとって不快なものでは決してなかった。

居心地がいい、だからリュミエールも残ったのだろう。ずいぶん機嫌が良さそうだ。

もっとも機嫌が良さそうだからといって、何かが大幅に変わっているわけでもなく、むしろ普段通りすぎるほどいつもの水の守護聖である。女王候補と話す時の、飛空都市の人々と話す時の、自分以外の守護聖と話す時の、穏やかで優しい気配。自分に次いで相性の悪そうな光の首座と話す時でさえ、暖かい微笑みを絶やすことはない。

それをこれまで悉く潰してきた、その原因が自分の発言の側にあつたのかと考えるのはオスカーにとって複雑な気分だった。

目を閉じてソファに背凭れるリュミエールを見遣り、軽装の、全くもって無防備な彼が自分の居室にすることを改めて考え直すと、互いが聖地に招聘されてからの長い年月の間でもおそろく初めてその経験に、多少の酔いが混じって不思議な心持ちになる。会話も途絶え、オスカーが見続けるその先で、リュミエールが首を反らせてことりとソファに頭を倒し、目を閉じたまま酒精の熱を含んだ呼吸をひとつ吐いた。白い首筋が襟元から頸になり、水色の髪が頬を縁取り流れ落ちて、目元はほんのり朱く色づいている。

よく見ようとして近づいた、のだろうと思う。ひとの動く気配に、リュミエールがゆっくりと目

を開いた。オスカーの影が覆い被さりながら、それでもその深海色の瞳とオスカーの視線とが合った、それが却って最後の切掛になった。

唇を重ねた。何気なしにやってしまった、というのが一番正しい。アルコールの所為か、触れる直前に想定したよりも唇はずいぶん熱く、そして緩やかに唇を合わせ続けているリュミエールの反応が、拒否でも応答でもなく、全くのただの受容であることに、オスカーは自分の仕掛けたことでありながら頭の隅で戸惑った。

一度唇を離し、表情を確認する。リュミエールの視線はかなりの酔いの混じったそれで幾分かとりとりとしていたが、瞳の奥の意識はどこまでも澄んでいて、視線の合ったままのオスカーを無色で見ていた。

自分も同じ程度には無表情でいられているだろうか、と思いながら、オスカーは再度唇を重ねた。触れ合う場所がぴりぴりと痺れ、脳髓へと響き渡るような感触は、ここ数年の女性相手には感じたことのない昔の経験の浅かった頃を思い起こす。

幾分かの内心の逡巡の後、抱き寄せて、軀を囲い込み、深い口付けに導く。抗いがたい誘惑があった。掻き抱いたオスカーの腕から溢れるほどの水色の髪がさらさらと音を立てて零れ落ちる。

深い口付けの奥、オスカーの舌がリュミエールの舌と絡んだ時、初めてリュミエールの軀が僅かに揺れた。唇の僅かな隙間から「…ん」と小さな言葉が漏れ、その時に至ってようやく、ほんの少しの躊躇いがちらりと垣間見えた。

あの、水の守護聖が。いつも穏やかな微笑を湛えて静かに佇んでいる人が。よりによって自分の腕の中で、自分の動きに呼応して、密やかに垣間見せる、これ以上はないほどに忍びやかな反応。

本人にそのつもりがなくても、オスカーにとっては最高の媚態だった。

思わず強く抱き締めた、そのリュミエールの躰からふわりと漏れ出た気配のようなもの。何かと瞬間訝しんだが、それが水のサクリアだと気づき、その暖かい気配が自分を包んで炎のサクリアと交じり合うに至って、オスカーは理性のコントロールを手放した。

リュミエールにとっては間違いなく初めてであることが有り有り取するように判るのに、オスカーの愛撫に対して抑え気味に反応する他には、時折ちらちらと見え隠れする僅かな躊躇いと、同じく僅かな戸惑いのみで。その一滴一滴が、絶え間ない媚薬のようにオスカーを煽り続ける。

潤滑剤代わりに手近のブランデーを使ったのが、更にまずかったといえばまずかった。それまでに蓄積した分と併せて酔いが一気に周り、肌を火照らせてとろとろに溶けたリュミエールと、それにオスカー自身が溺れまくってしまった、という意味では。

ラグの上で数回、それから寢室のベッドに移動して更に何度か。酔いと疲れとで抱き締めたまま眠って、うとうとと目を覚ました夜明け前の未明にも一回手を出した。

「オスカー」

「……」

「…オスカー、もう陽が高いですよ…そろそろ離してくれませんか」

「嫌だ」

「オスカー……」

「今日一日一緒にいると約束するなら、離してやる」

「……………」

リュミエールがひとつ息を吐いて承諾したら、離してやると言っていた手は背後から抱き締めた状態から愛撫の動きに変わった。アルコールはとうの昔に抜けていたが、昨晚のうちに知られた弱い部分を探られ、同じ程度には溶かされた。

オスカーは手早くシャワーを浴びて、居室に戻った。テラスに続く扉が全て開け放たれていて、淡い風が室内の昨晚の酒精をすべて吹き流している。テラスの先に続く飛空都市の草原の向こうの聖殿が目映った。

先にシャワールームを使って出ていた水の守護聖は、恐縮する使用人とともに昨晚の飲み会の後片付けをしている。着ているものこそ昨晚の軽装の珍しい格好のままだが、立居振舞はいつもの凛とした優しい風情の水の守護聖そのものである。ただし昨晚は開いていたシャツの一番上のボタンが、今はしっかりと掛けられていた。

客間に使用した形跡がないのを使用人たちに訝しく思われただろうが、水の守護聖はこの居室のソファで寝^{やす}みでもしたのだと思われている程度だろう。それにしたって恐ろしく珍しいことで、ましてや昨晚本当にあったことには到底思い至りようもないに違いない。

誰よりも一番、信じがたい当事者がオスカー自身であるからして。

風が心地良いからテラスの方で、と話すリュミエールの声が聞こえる。オスカーが予め言い付けてあったブランチの軽食の用意がテラスに整えられると、使用人たちが引き払ってすぐさま、オス

カーはリュミエールを引き寄せて抱き締めた。そのまま鼻先の水色の髪に顔を擦り寄せて埋める。^{うず}
オスカーが相当に背が高い所為で、女性相手では普通この位置に頭が来ない。

とにかく、そうやって抱き締めていると恐ろしく気持ちが良いかった。守護聖のサクリアのせいなのか、体の相性がいいのか、初恋じみたこの胸の詰まるような感情のせいなのか。その陶醉といったら、まるで麻薬のようだった。

目を閉じてなすがままにされているリュミエールの表情はどこまでも透明で、なんの感情も窺い知れないものの、うっとりとしているように見えなくもない。少なくとも自分と同程度にはこの感覚を共有しているはずだった。

軽く添えられるだけの相手の腕に焦れて、オスカーが「お前も腕を回せ」と自分の手を使って促したら、リュミエールはオスカーの首筋にうつすら顔を伏せてくつくつと小さく笑った、その振動に鳥肌が立ち、ゆっくり自分の背に回ったその指先の感触に総毛立って、オスカーの両手はリュミエールの頭を抱え込んで深いキスに戒めた。

ブランチを済ませると、テラスから庭先に降りた。はるか遠目に聖殿が見える。日の曜日でも登殿するのが常だが、今日ばかりはそんな気にもなれない。

リュミエールはハープを持ち出し、草の上に座ってゆるやかに爪弾いている。オスカーが草波に寝転んで黙って聞いていたら、小さく歌まで詠い出した。異郷の言葉で歌詞の意味は解らない。

ふと気が付くと、その音が途切れていた。オスカーが身を起こして見遣ると、リュミエールはいつの間にか横になり、ハープを傍らに置いて目を閉じている。昨晚から相当疲れさせたはずだし、

そもそもあまり眠らせてもいなかったもので、むしろ今までいつもと変わらない凜然とした様子で起きていたのが確かに不思議なくらいではあった。

飛空都市の柔らかな日差しで、かつショールを掛けているとはいえ、充分とは思えなかったのも、オスカーは室内から毛布を持ってきて水の守護聖の身体に掛けてやった。淡く覚醒したリュミエールが、薄く目を開いて「……ありがとうございます」と小さく呟く。

隣に腰を下ろしたオスカーのすぐ脇で、僅かに体を丸めて毛布に埋まり、再び眠りに落ちた水色の姿を見た瞬間、オスカーは唐突に想像を絶する勢いで狼狽した。

もし、この人を本当に欲しいと思ったのなら。

生まれついてからずっとそうであった、王立派遣軍の名門の継嗣としてではなく。聖地に招聘されてからの、いかなる女性にとっても雲の上の存在でしかありえない炎の守護聖としてではなく。かといって、聖地を離れて密かに過ごす時の、互いに一夜だけと知ったその場限りの相手としてもなく。

時と共に生きる者として、守護聖という地位が何の役にも立たないただの一人の人間として、想いを伝えなければならなくなることがあったとしたら、自分はどうすればいいのか。

あれだけ深く身を交わしていながら、何も知らない。なぜ拒絶されなかったのかも。その透明な表情で何を想っているのかも。

答を与えてくれるはずの存在は、目の前でただ穏やかに眠っている。

かそけ

幽きものと思い知らされたこの儚い繋がりを今ひとたび確認しようと、オスカーは身体を傾げ、眠る水の守護聖の瞼の上に唇を落とした。

日の曜日、森の湖で、女王候補と軽やかな会話をいとも容易く交わしながら、オリヴィエの内心は半ば呆然を続けたままだった。

昨晩の炎の館を辞してから私邸に戻り、アルコールの影響が残らないように念入りに肌の手入れに時間を掛け、ベッドに入って眠る直前、習慣の就寝前の水を口に含んだ時、その気配に気がついた。片眉を寄せて訝しく思いながらその正体を探ろうとした瞬間、それ、つまり絡み合う水と炎のサクリアに背筋を撫で上げられるような感触に唐突に襲われ、嚔下する寸前の水で思い切り咽せ込んだ。

「ちよつとー……ッ!!?」

思わずそう大声で叫んで、夢の館の使用人が何事かと2・3人寝室へ飛び込んできたが、なんでもないなんでもないからと詫びを言つて引つ込んでもらい、その後で思う存分頭を抱える。

これは、確実に、ヤツちゃつてる……

年少組はとつくに夢の中であろし、たとえ起きていたにせよ、この気配に気付くほどの聡さもまだ無い。ルヴァは朴念仁で、ジュリアスは良くも悪くも独善的だ。おそらく気付かないであろう。

クラヴィスは、これはもう確実に気付いているはずだ。夜の闇は彼の領分で、その安らぎをこれだけ乱す気配に気が付かない訳がない。

などと考えながら、その発端が確実に自分の成した忠告にあることに、この上ないほど現実逃避したくなる。

(誰がそこまで仲良くなれと言つたツてのよ……)

今更二人の元にとって返し、よろしくやってる最中に割り込む訳にもいかない。そう考えている間にも気配は嫌が上にも陶酔と甘ったるさを増し、オリヴィエはどうとうベッドに突っ伏して枕を引つ被り、とりあえず顔を合わせる後日まで綺麗さっぱり無視することにした。

とはいえ夜更けまで続いたそのサクリアの睦み合う気配から枕一つで逃れられるはずもなく、悶々としたまま夢現にうとうとと一晚を過ごし、翌朝はさぞかし酷い顔になっているかと思いきや、鏡に写った自分の肌が思いのほか色艶良いことに却ってがっくりと肩を落とした。その艶の良さが、昨晚のこの上なく色めかしい気配に少なからず影響されているのを判っていたので。

仕掛けたのがオスカーの側であるのは、ほぼ間違いない。おまけによりによって執務室に約束の女王候補の来訪を受けている最中、朝っぱらからまたもや仲良くやってる気配に気付かされて喉の奥から奇妙な音を立ててしまった。

森の湖の散策中、今度会ったら絶対絞めてやると思いつながら、女王候補に伝えて森の湖から聖殿のテラスへ案内した時、はるか遠目に見えてしまった。こんな遠距離でも馬鹿みたいに目立つ、あの緋い髪と水色の長い髪が。そして緋い髪の持ち主が、もう一方の上に覆い被さる様が。

慌てて女王候補の両目を片手で覆いながら、それでもう一発炎の守護聖を殴る理由が増えたな、と考えた。

オリヴィエがさらに頭を痛めたことに、絡み合うサクリアの気配はその夜も再び生じて飛空都市の空気とオリヴィエとを取り巻いた。

「今日一日、と言っただろう？」

「……明日は執務がありますので、配慮していただけますか」

「努力はする。保証はしないが。」

という会話が至極真面目に交わされたことなど、知る由もなかったが。

「ようこそ、オリヴィエ。何か御用ですか？」

月の曜日、早々に押し掛けた水の守護聖の執務室で、普段と何一つ変わることなく穏やかに微笑む水の守護聖の姿を見て、大いに脱力しながら、泣いてもいいかな、とオリヴィエはちよつぱり思った。水のサクリアの気配からうつつすら予想はしていたが、オスカーの行為がひとまず傍目にはそれほどドリュミエールを傷付けていないことに、思ったよりも深く安堵する自分がいる。

いや、変わったところといえばひとつだけある。水の守護聖の正装、肩掛の内側で首の大きく開いていた內衣が、然り気なく首の詰まったそれに差し替えられていた。

オリヴィエが、あー、あー、あー……と声の出ないまま3回呟いたところで、悟ったリュミエールが目元をうつすら赤くする。

「すみません、お騒がせしてしまいましたか」

水のサクリアが炎のサクリアと絡んで漏れ出ていたことに自覚はあったのだろう、そんな謝罪を口にした。

「いや、いいっちゃいいんだけどさ……その、大丈夫だった？」

「ええ、たいへんに良くしていただきましたので。」

とんでもない爆弾発言はどう聴いても「悦くしていただいた」にしか聞こえず、オリヴィエは何

も含んでいないにもかかわらず再度大いに咽せ返った。

「すみません、そういうつもりでは」

涙目の夢の守護聖に慌てて水を用意してから、リュミエールがその背中をさする。

「…オリヴィエ、貴方でしょう？ オスカーに言付けてくださったのは。」

余計なこと言い過ぎ、9割5分は黙ってる、の、そもその発端のあれである。詳しい物言いは知らなくとも、何かしらの発言がオリヴィエからオスカーにあったのを察したのだろう。リュミエールに手を添えられながら水を飲んでたオリヴィエは動作を止め、情けなくも眉を下げてリュミエールの方を振り返った。

「あー、うん、…ゴメンね、なんかこんなコトになっちゃって。」

「とんでもありません。お陰様で快適に過ごしていますよ。」

快適、過ごしています、というその言葉。恐ろしく濃密そうだったその時間とは、ずいぶんと掛け離れた違和感がある。

オリヴィエは訝しみ、しかし事が事だけに相当に逡巡し、それでもやはり結局は尋ねざるを得なかった。

「…あのさあ、単刀直入に訊いてもいい？ どうしてオスカーに抱かれたの？ 酔ってた？」

「確かにかなり酔ってはいましたが、それが理由というわけでもありませんね。というより、特に理由はありません」

「理由が…」

ない。なんの躊躇いもなくあっさり返答が返されたことにも驚いたが、涼しげな顔で告げられた

その予想外すぎる内容に絶句した。

「いつもの彼の調子で冷笑しながらにでも求められていれば、一も二もなくお断りしていたでしょうけれど。随分と真面目なご様子でしたから、特に否やはありませんでした。無碍にお断りして、また皮肉交じりの会話に逆戻りするの、不本意でしたし。」

「……」

「その後、悪いようにはされていませんから、正解だったと思いますよ。…だから私は、貴方に感謝しているんです、オリヴィエ。」

感謝。感謝つて。思考はぐるぐる回り続けて、とてもではないが付いていけない。

付いていけないが、しかし。

発端を引き起こした責任がある人間として、それでも確認しておかなければならないことがあった。

「…この後、どうするつもり？」

「どうするつもり、と言われましても…それは私が決めるところではないと思いますが。」

「…つて、」

「いつもとはちよつと違う趣向に、たまたま彼の気が向いただけでしょうから、所詮は長続きするものでもないと思いますよ。いつまで続くかは判りませんが、この期間の間だけでも、心持ちの良くない物言いをされずに過ごすことができれば、それで充分ではないでしょうか。」

だから何も心配なさらなくていいのですよ、と逆に氣遣われるように言われ、オリヴィエは啞然としてリュミエールを見遣った。そこに居るのは、いつもと何一つ変わらない、どこまでも透徹と

して、優しく穏やかな水の守護聖の姿。

言わんとすることはわからなくもないし、これまでの誂い混じりのオスカーの発言の数々はよほど不愉快であつたのだろうし、確かにオスカーの情熱を一時の気紛れではないと保証する術など有り得るはずもないが、それでリュミエールが応じた「出方次第」は、オリヴィエのような常識人の理解の範疇を遥かに超えていた。

どれだけ溶かし尽くされ、どれだけ深く軀を重ねても、リュミエールの心は一欠片たりともオスカーの手の中に存在していない。それが水の守護聖の初体験であつたろうことや、その交わりがどれだけ濃密なものであつたかなど、リュミエールにとっては微塵も意味を持たないのだと思ひ知つた。

オリヴィエは昨日の昼間、聖殿のテラスで見た光景を思い出した。眠る水の守護聖の上に、遠くからでもその躊躇いを伺わせるほど、ゆっくりと緩やかに覆い被さる炎の守護聖の姿。このリュミエールに比べれば、まだしもあのオスカーの側の方が恋情めいたものを抱いているに違いないことは容易に想像がついた。

やっぱり泣いていいかな、と夢の守護聖は思った。オスカーにも、そしてリュミエールにも、自分とはとんでもない業を背負わせてしまったのかもしれない。

唐突にノックの音が室内に響き渡り、オリヴィエは文字通り飛び上がった。開いた扉の陰から女王候補の姿が見える。

「あ、ああ……じゃ、私はこれで」

女王候補を迎え入れ、挨拶してから入れ替わりに水の守護聖の執務室を立ち去ろうとする途中、

室内を振り返った。ただ何気なく、そうしただけなのに。

「あなたが、私を必要としてくださるとは……とても光栄です」

ちよつと待ちなよ、とオリヴィエは我が事でもないのに激しく狼狽えた。水の守護聖と女王候補、二人の距離が近くて、なんだかものすごく雰囲気がいい。そういえばこっちの女王候補は、一昨日のお茶会でリュミエールの隣に座っていた。おまけに持参した手製の菓子はカモミールゼリーで、水の守護聖にずいぶん喜ばれた。予想外の急接近。

見詰め合う視線は明らかに見て取れる優しい甘さが混じっていて、二人を包む空気がうつすらと色付いているようにさえ見える。濃密に軀を交わしたはずの相手に対して「所詮は」と語った時のどこまでも透明なそれよりも、そうと言ってよければよほど愛情が込められていた。

これを炎の守護聖に見せてはまずい、恐ろしく嫉妬するに違いない、と思い、慌てて執務室を後にしながら、なんで自分がそんなことを考えなければならないのかとオリヴィエは脱力する思いだった。水の守護聖を巡って女王候補と炎の守護聖が恋の鞆当て、だなんて、一体どういう構図だ。

聖殿の廊下に出て後ろ手で扉を締めた、その音に重なって隣の執務室の扉が開く。案の定出てきたオスカーは上機嫌さを隠しもせず、明らかにこちらへ向かってくる様子で、目的の扉の前にいた夢の守護聖の姿を認めるとその想定外に身を固めた。

その強張った表情に、あー、こっちの奴も私が気付いてるって判ってんのねー、と薄ぼんやり思う。

いくら自分が切掛を与えたとはいえ、このバカが考えもなしにリュミエールに手を出さなければ。果たしてどういう態度を見せてくれるのか、徐々に怒りを込み上げさせる夢の守護聖の前で、口

元を手で覆い幾分かの逡巡を見せた後、開き直ったらしい炎の守護聖はよりにもよってこの上なく
幸せそうな笑みを浮かべ、あまつさえ目元をうつすら染めて、ゆっくり近づきながら

「よう、極楽鳥。ご忠告は効果絶大だったぜ」

と言った。

その炎の守護聖を評して、かつて女王候補相手に

「たまには、照れたりすることあるのかな？ あるなら、ちよつとだけ見てみたいよね」

なんて言ってた昔の私のバカ、そして暫くサヨナラ私の綺麗な手、と思いながら、オリヴィエは
久しぶりの右ストレートを思い切り繰り出した。

大人の特権 後日譚

淡い光の中で最後の一言を叩き終え、この辺りで少し休憩にしようかとリユミエールは考えた。

一応週一で主科と副科の講師にそれぞれレッスンに来てもらっているが、どちらともからまず問題ないと既に太鼓判を押されてはいる。とはいえまだまだ学ぶことはあるし、当日まで何もせずにのほほんと過ごす類の話でもなく、また恵まれたことに今は毎日が自由時間なので、起きている時間の大半は練習に費やしている。

開け放った明るい部屋よりもレースカーテンを一枚閉めた程度の少し薄暗い部屋の方が集中できるのは、長年闇の守護聖の執務室や私室で曲を奏で続けてきた習慣のせいだろうか。あの方の前では演奏だけに集中できた。人が演奏している最中に堪え切れない様子でしょっちゅう邪魔を入れてきた、別のもう一人の前とは違って。

楽典に関しては問題ない。宇宙中の音楽にいつでも触れられる、しかも自分の体験として歴史的にも精通するという、ある意味この上なく最適の環境に居たので。聴音もまず大丈夫だろうと思う。今度この曲を弾いてくれ、としばしば請われることが長らく続いて、耳から楽譜に変換する事にずいぶん慣れてしまった。副科のピアノもハープほどには得手としていなかったが、調性変化が激しくてハープでは演奏できない部類の曲もリクエストされたりしたので、代わりに鍵盤楽器で演奏し

てきたのが今になって良かった。

あの鮮烈だった人の影響が暗に陽に自分の中で残っていることに、小さく苦笑する。そもそもこの当面の進路を決定したことによって、あの人の影響があるのだ。

生涯豪遊を続けても充分なほどの恩給がこれから一生支給され続けるとはいえ、はいそうですかと人の金で日々を無為に過ごすのは自分の性質ではなかった。今後、何の職に就いてどうやって自力で糧食を得ようか、と、自由の身になってからしばし考えた。

旧職に就く、だけは絶対できないことなのだと最初に気付いて、心の底から大笑いした。あれを職業というのなら、特殊も特殊極まる職業だったのだ、あれは。しばらく笑い続けた後、さてと振り返って自分にできそうなことを考える。

宇宙の運行に力を尽くすのは嫌いではなかった。王立研究院の研究者として身を立てることも考えたが、表立って言わずとも研究員たちには自ずと気付かれるであろう元守護聖なんてものがあれば、さぞかしやりにくかろうと思ひ残念だけれども諦めることにした。もはや自分は旧時代の人間なのだ。

炎の守護聖の横で王立派遣軍の業務を見ていたので、いざとなったら一兵卒から務めようかとも思った。が、向き不向きはともかく自分にとって心楽しくはなさそうなので、どうしても食べていけないとなった時の最終的な選択にしようと考えている。

飛空都市の件以来、システム管理の重要性に気付かされたので、ゼフェルや王立研究院とともにソフトウェアエンジニアリングにもずいぶん関わった。システムエンジニア。しかし実践的なところばかりやっていたので、基礎が抜けている気がしていまいち心もとない。

山のように積み上がった業務や書類を片っ端から捌いてきた経験もあるし、普通に事務作業などでもいいが、いささか臺^{とう}が立っているのが就職に関しては難点だろう。

そうやって検討を続けていた頃に街中で見初められ、熱烈に要請されてモデルも一度やってみたが、ものすごい騒ぎになったのでお詫びを伝えて早々に引退させてもらった。この先ずっと身辺が騒がしく落ち着かないのは避けたかった。今でもひらりちりとファンレターや仕事の依頼などが舞い込むことがあるが、この類の仕事に関しては断れる限り断っている。ただ、同じように街中で目を掛けられても「引退した伝説のあの人」という扱いにしてもらえるので、今後の騒音を削減するという意味では却って良かったのかもしれない。

しばし逡巡してから、やっぱり一度は自分の好きなことを思う存分やってみたいと思い、大学受験をすることにした。しばらくの生活費程度は稼いだとはいえ、学費は恩給に頼らざるを得ないが、17歳という歳から十年以上に渡って休みなく執務を続けてきたのだし、退職金くらいは受け取ってもいいだろうと、後ろめたさを覚える自分を納得させることにしたのだった。

美術にするか音楽にするか検討したところで、いつの間にかずいぶん音楽寄りになっている自分にその時初めて気がついた。

誰の影響かといえば、間違いないあの人のせいだ。

最初の女王試験中のあの特筆すべき出来事以来、イーゼルを用意しキャンバスを用意し油絵具を用意してゆつくり風景に向き合う、なんて悠長な時間はしばしば妨害されてきた。おかげで徐々に、準備不要、一曲完結型の、集中力と瞬発力があれば済む趣味の方にすっかり偏ってしまったのだった。だからこそ自由になった今は絵画の方を、と思わなくもないが、真面目に職として検討する必

要があるのであればより習熟している方に力を入れるべきだと思い、音大受験の準備を進めている。年齢制限のある大学が多いし、制限がない所でも十代の輝かしい将来の若手と合格枠を競い争うのは気が咎めたので、少し亜流の、自分のような変わり者が多く入学している大学を選んだ。これで必然的に受験地、すなわち居住地が主星になった。本当ならば故郷のような、海洋の多いゆつたりとした星を選びたかったのだが。

それでも人の多いところは苦手なので、かなりの郊外に小さな一軒家を借りている。

ずっと座っていたピアノの前の椅子を立ち、カーテンを開け光を取り入れて、庭に出てからしばらく迷い、結局はカモミールの花を十個弱ほど摘んだ。このところずっと続いているが、生花で楽しめるのは今の時期だけなので存分に堪能しておくことにする。家に戻って軽く水洗いし、耐熱ガラスのティーポットで時間を掛けて濃い目に抽き出す。

テーブルに着き、カップに注いで、一口味わい、室内に降りた静けさを同じように味わったところで、その静けさに予感がした。昔のように。そうして昔ではない今の状況を省みて、そんなまさか、と思う。

郊外だし在宅していたので鍵を掛けていなかった玄関扉が激しい騒音とともに叩き開かれ、テーブルの上のポットの水面が大きく波立ち、直通のこのリビング兼キッチン兼練習部屋に風とその姿が飛び込んできた。

「リュミエール！」

ぎりぎりカップを置くのが間に合った、とこちらは思っているというのに、案の定自分の姿以外は何も視界に入らない様子で、駆け寄ってきて性急に引き上げられて抱き締められる。

昔のように。昔ではないのに。軽装にジャケットという出で立ち。昔ではないのに、普通りのその緋い緋い髪で視界が塞がる。力任せの腕が自分を絡め取る。何度も何度も何度も、繰り返し繰り返し聖地でそうされてきたように。

そんなまさか、とふたつ思った。背に手を添えてみたその熱い身体から、炎のサクリアの気配がしないこと。彼が顔を埋めた自分の首筋に、暖かく湿った涙の気配がすること。

一度も彼は泣いたりなどしなかった。自分もそうだったけれど。

「オスカー……？」

顔を伏せたままの身体がびくりと震えた。

「……………その声が聴きたかった。その声だけが欲しかった……」

涙声を隠しもせずにそう答えられる。

「どうしてここに？」

「判り切ったことを聞くな。退任したからに決まっている。」

自分が退任して聖地を降り、外界で過ごし始めてから1年も経っていない。外界と聖地との時間差を考えると、早過ぎるほどあまりにも早い。

「言っておくが、卑怯な手は何一つ使っていない。最後まで勤めを果たして、引き継ぎもきっちり済ませてきた。」

まだ涙の残る顔をようやくやく上げて、リュミエールを抱き締める手は離さないまま、ふてぶてしい

ほど凜とした表情で言い切られた。それでもこの様子だと、すべての残務を能う限りの最速度でこなしてきたであろうことは容易に想像がついた。最年長となつて残り全てを押し付けられたオリヴィエに、一度詫びの手紙を書いたほうが良さそうだとリュミエールは思った。

「それはそれは、永の年月、お勤めご苦労様でした。それで、どうしてここに？」

改めて訊いたら、視線を合わせたまま深い深い溜息を吐かれた。そうして顔が寄せられ、深く唇が重ねられる。息継ぎもろくにさせてもらえず、かなりの長時間探られた。いつもの如く器用なことでと思うが、唇が休みなく動く一方で腕は腕で確かめるように自分の身体を辿り撫で擦る。キスも愛撫も、相変わらず相当に上手くはあった。

「…薄々気付いてはいたが、お前、俺のことなんて何とも想つてなかっただろう……」
唇を離して、脱力したように小さく呟かれる。

「貴方の方こそ、女王試験などのたびに誰かしらと親しくなっておいででしたよね。特にエンジンとは。彼女と将来を共にするのかと思っていましたまほゆが」

「そりゃあ、彼女らは皆、魅力的だったからな。眩いほどに。」

「今でも間に合いますよ、きつと。王立派遣軍の指揮官として貴方が戻れば大歓迎されるでしょうに」

「ようやくただの人間になる権利が与えられたっていうのに、何を好き好んでそんなことをするのか」

「そうですね、わたくしもそう思います。」

オスカーの腕の中から離してもらえないまま、リュミエールは目を閉じ、万感の思いを込めて呟

いた。

「ただの一人の人間として、自分の生活を自分で営み、日々働いて糊口を凌ぎ、ささやかに社会に貢献し。恋をして。適うことなら、誰かを愛して結婚し、家族を持ちたいと思っていますよ。」

「け」

「もはや普通の幸せが許される、只人となったのですから」

「そうだ。普通の幸せが許される只人だ。だからこそだ!!」

怒鳴られて両腕を掴まれ、身体を突き放された。

身を離して涙を隠そうともしないオスカーが、ポケットから箱を取り出し、開いてその環を手にした。

リュミエールの左手を柔らかく引き寄せ、薬指に嵌める。ルビーとアクアマリンが配されていた。リュミエールが視線を自分の手からその人に戻せば、未だ涙の残るアイスブルーの瞳が、これまで見た中で最大の真摯さを伴って自分を見詰めている。

「…愛している。俺と生涯を共にしてくれ。リュミエール」

あまりにも想定外すぎて、しばし呆気にとられた。

少しも恥じる様子もなく再び涙をその瞳に満ちさせるオスカーが、手を伸ばして再度リュミエールを抱き寄せた。髪の中に大きな掌が差し入れられる。

「ジュリアス様が去られたよりも、彼女らと未来を異にしたよりも、お前が傍らにいなくなつたこ

とのほうがどうしようもなく堪えた。死ぬかと思った。息もできなかった。」

「……聖地の時間では、ほんの何週間かのことでしたでしょうに……」

「お前に二度と逢えなくなる絶望は、何千億年よりも長かった……」

「……」

その恐怖の淵を思い起こさせるような、震える声で告げられた。自分が聖地を去るまでは、そんなこと、微塵も伺わせもしなかったのに。

それまでずっとリュミエールの頭の中にあったものが、ゆっくりと滑り降りてきて心を満たし、胸を締め付ける。

恋を始めてもいいんだな、と思った。ようやく。

心が痛い。彼はいつから、こんな想いを抱いていたのだろうか。

知った後でこの想いを引き剥がされることを考えたら、確かに相当に辛かった。

「……覚悟はできていらっしやるんでしょうか。わたくしは多分……かなり貴方を困らせますよ」

「何事も、お前の望むままに。お前がいれば、もう何もいらぬ。俺の永遠のリュミエール。」

くすぐたく甘く、低くて深い言葉が耳と心を打つ。体の芯が震えた。何もかも、すべてが初めて戸惑うことばかりで、微笑が零れる。

まさか自分が出される前に、自分が出すことになるとは思っても寄らなかった。

「……よろしいでしょう。合格です。」

その声に応えて、もう一度、深い口付けが降ってくる。

「……じゃあ、これから検討しておきますね」

「これから!？」

大人の特権 後日譚の後日譚

目覚めと同時に、広いベッドの上で、蕩けるバターの匂いが鼻腔に届いた。
カーテンの向こうには綺羅綺羅とささめいて輝く朝の光が見える。

独り残されていたほの暗い寝室で、私は緩慢に身を起こし、ベッドから出て周囲に散らばっていた寝間着を拾い上げ、ゆっくり着直していった。

とはいえ昨晩は、ベッドの中で服を剥がされて素肌にされた後は多少の悪戯を仕掛けられたくらいで、何もせずにそのまま眠った。はず。確か。

今日がレコーディングの日だから、という私側の事情を彼が考慮してくれたのかどうかは判らないが、いずれにせよ私としては、彼との生活の日々は、日常の諸々を含めて適度なペースで進めてもらっていると感じる心地良さがある。

彼に改めて訊けば「毎晩でも」と臆面もなく言われそうなので、まだ敢えて尋ねたことはない。
もう少し落ち着いてから、ゆっくり休暇でも取れることがあれば、いずれ彼の^{なにかし}某かの希望も、叶えてあげたい。

いずれ、は意識的に気を付けていないとそのままではいつまでも実現しなかったりするから、忘れないように近いうちに具体的に計画することにする。

「……おはようございます。」

扉を開いてリビングに入りながら発した自分の声は、まだ幾分かぼんやりとしている。

「おはよう、リュミエール」

ニュースでも見ていたらしい傍らのタブレットから目を離し、ダイニングテーブルから立ったオスカーが私にキスをして、両腕で抱き締めてくれる。彼の身体はいつも私より熱く、こうやって抱き締められるのはとても暖かくて気持ちいい。朝は大抵彼のほうが早く起床し、時間のぶれも彼の方が少ない。私などは時に妙に早く目が覚めてしまったりする事もあるけれど。

普通と言うには随分恵まれ過ぎている境遇だという自覚はあるが、それでも、普通の生活というのはこういうものなのか、と、彼の腕の中で改めて思った。

聖地に招聘されてからというもの、朝、起き、身支度を整えて、用意された食事を摂る。一人で。執務から帰ってきて、用意された食事を摂り、自室での時間を過ごし、就寝の準備をして、眠る。一人で。

もう随分永い間、ほとんどの時間をそうやって過ごしてきたから、家族のある生活というのを、未だにふと、不思議に感じる時がある。

幸せだ、と、改めて思う。

「朝飯、どうする？」

テーブルの上を見遣る。彼の朝食、バターの効いた半熟のチーズオムレツと何切れかの厚切りベーコン。オーダーを言えば何でも彼が進んで作ってくれる。最初は恐縮も遠慮もしていたが、作っ

てやれることが嬉しいし、作ることが楽しい、と彼が言うから、ほどほどに甘えさせてもらっている。

だからといって非科学的な古典栄養学などは一顧だにしない人だから、「朝は何か食べる」と私に強いるような事もないし、早い時間帯には往々にして食欲の出ない私にはとても助かる事だった。

「…一口、貰ってもいいですか？」

「もちろん」

椅子に座った彼がスプーンで切り分けて掬った、オムレツの一口分が口元に寄せられて、素直にそのままぱくついた。バターとチーズのいい匂い。

蕩ける食感とほんのりした塩気を味わって食べて、コーヒーも一口貰ってから、もう一度彼とキスをして、出掛ける支度を整えに部屋へ戻った。

「今日は？」

「送るよ」

用意が全て出来てから彼に尋ねたらそう応えが返ってきたので、軽く頷いてから彼とガレージに向かった。公共交通機関で通学する方が何かと気が楽なのだが、彼の事情を知っているので強いて一人で行くような事はしない。

季節が深まり、良い天気でも外の空気は少し肌寒い。葉が色づき、澄んだ青い空を背景に街の色が少しずつ変わっていているのを見上げながら、彼の車の助手席に乗り込んだ。

聖地には準備が必要なほどの寒冷な季節が無かった——何回かのハプニングは別として——から、

幾度目かの、まだ習慣づいてないこの先の冬支度の事に思いを馳せる。

「行つてらっしゃい。氣を付けて。愛してる。」

彼の運転で大学近くの駐車場に到着してから、車を出る直前、そんな言葉とともに抱き寄せられて、少しだけ深く口付けられた。人目がないような、あるような。けれども私も随分と慣れた。軽く腕を回して、彼の口付けに少しだけ長く、応える。

時々無意識に、彼の中にサクリアの氣配を探している自分に気付くことがあつて、聖地に居た随分永い間、いつの間にかそれが習慣になっていたのだとその度に思い返す。

当然の事ながらもはや彼にも私にもサクリアの感覺は辿れず、その代わりに互いから感じ取る氣配と暖かさは、もつと近しい、もつと物質的で即物的で、身近なそれに取つて代わつた。

「行つてきます。貴方も氣を付けて、オスカー。…愛してます。」

彼の笑顔を後にして車から降り、校舎へ向か…おうとして、ふと気付いて開いたままのドアの中を振り返つた。

「帰りも？」

「迎えに来る。大学には一度戻つてくるんだろう？」

頷いて、軽く手を振つてドアを閉め、校門に向かつて歩き始めた。

そのまま車内でしばらくニュースのチェックやメールの確認、返信、スケジュールリングをするのが彼の習慣だ。見送るか見送られるか、その悩ましさをスマートに一択で解決する、彼らしい捌き方。

背後の暖かさに心残しつつ、葉の落ち始めた歩道を歩く。

今日は朝から2単元の授業を受講して、それからレコーディングスタジオへ向かう予定になっていた。

未だ学生の身だが、有難いお声掛けや学内の指導者の薦めもあって、既に幾つか楽曲をリリースさせてもらっていた。私のような変わった経歴の人間が入学するような独特の学風の音楽大学で、学校としても在学時から学生の幅広い活動を支援しているような所だ。

ハープはやはり単品の作品、ソロまたは少人数でのアンサンブルの需要が高く、これまでのアルバムもそういうラインナップでの発刊だった。有名曲から知られざる小作品、自作の楽曲も有難いことに幾つか。そのうちいずれは古典や近現代の奏鳴曲^{ソナタ}、協奏曲なども広く世に知ってほしいと思うし、指導者からも将来的にはこの楽器の認知度や裾野、可能性を広げていくようなそういう活動を期待されている。

それ自体に否やは当然無いのだが、

「持つて生まれた物は、最大限活用しないとね」

と指導者からもプロデューサーからも当然のごとく要望があり、言われるがままに私の写真撮影などがあつて、リリースの度にかなりしつかりしたブックレットが併せて製作されている。撮影も複数箇所、しかもかなり遠方にまで移動して行われたこともあって、収録よりも撮影の方が手間が掛かっているように思うのは、きつとあながち気の所為でもない。

この現代にあつてディスクの形態での楽曲の販売など、ちゃんとした売上が立つのか半信半疑だったが、うっかり毎回チャートにランクインしてはその度ごとに周囲よりも自分が一番戸惑っている

る。

私が一番率先して売り出すべき立場にあるのだから「うつかり」など言うべきでないのは承知しているが、これには未だに慣れ切れない。

そうして今回は、初めてのシングルリリースを、自分のオリジナルの曲で行うことになった。コンセプトははっきりしていて、恋人への想い、すなわちオスカーへの。ジャケッとは私とオスカー、二人のツーショット写真を載せる事になっている。ブックレットにも。その撮影は今日でなく後日改めて行う予定になっていたが。

それはどうなのだろう、と思ったけれど、大学関係者も音楽事務所も、オスカーすらも、周囲が揃って太鼓判を押すものだから、半ば自動的に順調に事は進んでいた。

話の挙がった当初から、オスカーは「喜んで」と、嬉しそうに笑って了承してくれていた。

この企画を受けたのにも、理由がまったく無い訳ではない。

オスカーの事を想って作った曲の幾つか。身近な人達を前に時々弾いて披露し、彼の事も特段隠しもせずにといたら、彼を想って弾く時だけはジャクリーヌ・デュ・プレのようだね、と、往年の名演奏家の名を挙げて評された。

水のように、穏和、癒やし、芯のある澄んだ音色、そういう評価を主に受けてきた私にとって、奏でる楽器は違えど、時に奔放なほど情熱的な演奏で知られた彼女と比されるのは極めて珍しい事態だった。また指摘されるまで、そういう自覚もなかった。

演奏家として表現の幅を広げるのは当然必要な事で、今回のリリースまでの取り組みはそういう点で、一種のチャレンジのようなものだった。

ちなみに当の対象であるところのオスカーは、ジャクリーヌ云々の話の件を私から伝えた時、何とも言えない微妙な顔を見せた。

どうかしたのですか、と私が問うたら、

「……お前は、俺が絶対、誰よりも幸せにしてやる」

と言つて、私を強く抱き寄せて深々と長いキスをくれた。

若くして病に倒れ、幸福だったとは必ずしも言い切れない彼女の事を、そこはかたなく聴き知っていたらしい。

昼からスタジオに入る。今まで使ってきた録音スタジオの中では広い方だ。前半はソロから始まって通奏低音が加わり、後半より小編成のオーケストラが入る。オーケストレーションはこの機会に、大学の高名な客員教授に指導と共著を受ける事が出来た。本当に身に余る光栄だと思う。

何度かのテイクの後、終了の合図が入って、自然に周囲から拍手が沸き起こった。素直に嬉しく思う。

気付けば薄く、汗を佩いている。幾人かの演奏者に請われて握手し、皆で記念写真など撮影した。

オスカーのことを想って演奏する、私にはまだ、それを完全にコントロール出来ている自信がない。

普段の演奏では弾くほどに心が落ち着き、聴く人々皆を幸福にしたいと、旋律、和音、ただそれだけに集中することが出来る。

それがオスカーを想う時は、悩みが生じ、迷いが出る。彼はこの旋律を、好きだと言ってくれらるうか。緩急、強弱、私の奏でるこれが、想うが如くに彼に伝わるらるうか。

彼の笑顔、彼の真剣な眼差し。

この音色で彼を包み込みたいと、そのはずがやがて意識の中の彼の存在に包まれ、どこまでも没入してゆく。あの存在の中に。

簡易的に編集を済ませた録音のコピーを受け取り、傾き始めた陽の中を大学へ帰った。輸送を依頼していた楽器が先に帰ってきていて、練習曲を何曲か弾き、その後でレポート作成のために図書館へ暫く籠った。

いつもの約束の時間、すっかり日も暮れて、街灯が照らす冷えた空気の中を歩いてゆくと、ちょうどオスカーが校門に着いた所だった。私がうっかり時間に気付かず約束に遅れた時は、何度か校舎まで迎えに来てくれた事もある。

共に駐車場に向かい、帰りの車中で今日の収録したての曲を再生する。

「どうですか？」

最後まで聴き終わり、彼の感想を聞きたかったのだが、彼は無言で再度、その曲を最初から流しただけだった。

ガレージに車を止め、家の中に入るなり、彼にベッドの中へ引つ張り込まれ、抱かれた。情熱的に。

時々、思う。この時間の時、彼に奏でられているようだ。

彼の指が私の肌を辿り、彼の腕が私の臍を抱き込む。彼の動きに私は反応し、応え、声音が零れる。彼の思うまま、熱を煽られ、彼を求め、彼への想いが私の中から溢れ出す。

「街中に流れるよ。きっと。お前の曲が。」

想いを交わし逢った後の、彼の腕の中での微睡みの中、彼の言葉が聴こえた。

「お前が俺を想う、愛の謳が。街中に、この宇宙中に満ちて。」

彼は日中、どうやら、王立派遣軍に関わっていた頃の人脈を活かし、各惑星国家間の要人の会合をアレンジするような仕事をしているらしい。

定期的で確実な収入が見込めるような類のものでもないし、彼もそれを承知の上での行動のようなので、仕事、と呼ぶべきかどうかは微妙だけれども。

何故そんな事を、と言えば、彼として、最終的には現宇宙内の惑星国家の軍備縮小を推進したい、という目的があるようだった。

それを知った時、改めて思い返した。炎の守護聖として在った間の彼を幾度となく襲った、戦乱の記憶の数々を。

目を開き、腕枕で私を抱き寄せている彼の、アイズブルーのその瞳を覗き込んだ。彼の腕の中か

みじろ
ら身動いで手を伸ばし、頬に触れ、緋色の髪を撫でる。

オスカーは、どうしたのか、と言いたげな表情をしたけれど、無言で私の手付きのされるがまま、私の方を優しく見詰め返してくれている。

当然の事ながらそういう話には利権だの既得権益だの権力だのが絡み、彼のその行動を歓迎しない勢力も常に存在し続ける。彼はそういう情勢を見計らい、物騒だと判断した時期には私の送り迎えをし、可能な限り、私の傍らに在ろうとする。

あからさまにそれと気付いたことはないけれども、そんな時期には自宅周辺の巡回も強化してもらっているようだった。こういう点、主星の行政機関は要人警護に慣れているから、これは進路を主星上の大学に定めた事の意外な利点だった。彼とこうなるまでは想定だにしかかった事だが。

「腹、減ったろ？」

「そうですね」

「待つてろ。そのまま寝てていい。」

私の髪を撫でてオスカーがベッドから抜け出し、服を着て寝室を出る。言葉に甘えてとろとろと微睡みながら、彼が料理する手際のいい音を遠くに聴いていた。

少しスパイシーな匂いがしてきて私の空腹を唆そそった、その時だった。

インターフォンの音色に思い切り被る形で、声がした。あの懐かしい声が。

「やつほー、御役御免おやくごめんでお邪魔虫に來たわよー。開ーけーてー。」

キッチンからは派手に何かを取り落とす音がし、私はと言えばベッドから思い切り飛び起きた。

「オスカー、待つてください！ 私も！」

「待ってやるから、せめてガウンを着て来い！」

けたたましく室内で交錯する様々な音と、玄関の外から響くあの明るい笑い声とが、奇想曲のよう
に鮮やかに私達の心を彩った。

剣とハーブと貴方

オスカーは不機嫌だった。

今日は日の曜日。いつもどおり朝っぱらから無駄に元気なランディが「オスカー様、覚悟っ！」とかなんとか言いながら襲ってきた。

ランディに襲い掛かれても全然嬉しくない。どうせ襲い掛かられるなら――。

変な方向に走り始めた自分の考えをぶるぶると振り落とす。

とにかく機嫌が悪かった。少しずつは成長しているのだろうが、それでもどうてい自分の本気すら出せない風の守護聖にひどく手厳しく指導してしまうくらいに。

「早く俺とともに勝負できるくらいになるんだな」

そう言い捨てて、座り込む風の守護聖を尻目に早々に私邸を出てきてしまった。珍しく徒歩で宮殿に向かいながら、道々会う警備兵たちに剣の相手を申し込んだが、彼らは一様に恐縮して、辞退の言葉と共に頭を下げるばかりで。

それはそうだろう。当然のことと思いながら、それでも悪くなる一方の機嫌を抑えられない。

はつきり言つて、オスカーは強い。剣技でまともに渡り合える相手など、この聖地の何処にもいない。必然的に、オスカーの練習相手になる相手は――オスカーの剣技を上達させられる手合わせは何処にも望めないのだった。

いや、「ただ一人」を除いて。

その「ただ一人」が問題なのだが。

とにかく昔のオスカーなら誰が相手になってもなれなくてもそれで良かったのだろうが、今は状況が違う。なんとしてでも、もっともつとずつと強くなつて、あいつに勝たなければならぬ。

そんなことを考えていたら、いつの間にか宮殿に着いていた。

とたんに目に入る水色の姿。いつものように、右手にハーブを抱えて。宮殿の廊下ではなく脇の芝生の小道を歩いている。

あの道なら王立研究院からの帰りか、休日まで仕事かご苦労なことだな、とかわりとどうでもいいことを、オスカーは頭の片隅で考えながら。

周りに人がいないことを確認すると、おもむろに左腰の剣を抜き放ち、アイスブルーの瞳に強い光を煌かせて、その方向へ駆け出した。

水の麗人は気づいてこちらを見、軽くため息をついた——ように見えた。

ギン！

高らかな剣戟の音が響き渡る。

リュミエールに向けられたオスカーの一閃は、いつの間にかリュミエールの左手に握られていた懐剣の短刃にあっさりと受け流されていた。続いて2回、3回とオスカーが剣を振るう。それを右

へ左へとリュミエールが短剣で受け流す。

「貴方も、懲、り、な、い、人ですな」

ギン、ギン、ギン、ギン、と響く剣戟を挟むようにして、あきれた表情で（その表情が思いつきり余裕しゃくしゃくで一層オスカーを苛立たせたのだが、）リュミエールが話す。オスカーは無言で剣を振るい続けた。というか、オスカーの方は次々繰り出さざるを得ない剣閃に必死で、返事をする余裕もない。

くっそ~~~~~!!!

オスカーの胸に悔しさが込み上げる。

オスカーが剣技でただ一人敵わない相手、それがこの、一般にはとろくて運動神経皆無と周囲から思いつつつつつきり思われている水の守護聖だった。オスカーもとある出来事がきっかけでこの秘められた水の守護聖の真実に気がついてなければ、今でもやっぱり数少ない宇宙の不変の真理のように当然の如く当たり前すぎる事実としてそう思っていただろう。

「だいたい、真剣での、手合わせは、大変、危ないと、わたくしはいつも言っ、いますのに」

オスカーの剣をかわし受け流し、時には（信じられないが）押し返す動作の合間合間に、リュミエールが端正な唇と天上の響きを持つ声でそう言葉を紡ぐ。

「お前がつ、普通に手合わせを申し込んで、受けて立とうとしないからだっ！」

オスカーは苛立ちを混じらせてそう叫ぶと、大きく踏み込んで剣を繰り出した。

「当たり前です」

綺麗な言葉がそう聞こえた。

リュミエールの手から、ハープが天高く投げ上げられた。

ふわり

と、水色の姿が浮いた、と思った。

胸元を狙ったオスカーの一閃は、リュミエールの白いサンダルの、「下」を通り過ぎていた。

見上げた空には、短剣の柄を両手で握った水色の姿と、長い髪。

「わたくしは、争い事が嫌いなのです」

ごいんつつつ!!!

と、次の瞬間オスカーの後頭部に沈んだ激痛。言葉にならない叫びが上がる。間を置いて、すぐ近くで水の守護聖の着地する軽い音。

リュミエールに短剣の柄で思いつき殴られたのだと気づくまで、しばらく時間がかかった。

思わずしゃがみこんだオスカーが見上げたリュミエールの右腕に、すんと、と空から落ちてきたハープが収まる。

「背中の隙が甘いと、何度言ったらわかっていただけるのでしょうか？」

左手の懐剣をローブの隙間に納めながら、ため息のようにリュミエールがそう言った。

オスカーの背中が隙だらけに見える人間など、宇宙中探してもリュミエールしかない。

だんだんと腫れ上がってずきずき痛む頭を抱え込み、全然威厳のない姿で、オスカーはそれでも有りつ丈の力を込めてリュミエールを睨み上げた。リュミエールはその視線を平然と受け流す。

オスカーが何度挑戦しても、いまだ一度たりと勝てたことのない相手、それがこのリュミエールだった。しかしなんとしてでも、絶対にこいつには勝たなければならないのだ。なぜならば――

「リュミエール」

最悪のタイミングで聞こえてくる陰気度26³%の声。オスカーはいつそう頭の痛みが増したように感じて再び頭を抱えこんだ。

「クラヴィス様」

リュミエール、お前いつも、そんな語尾にハートをつけたような声で、ああ、そんな嬉しそうにそいつの名前を呼ぶな！

何故あの声は俺に向けられないのだろう、なんとなくオスカーは泣きたくなった。

そう、見かけに全然似合わず恐ろしく腕の立つリュミエール、そのリュミエールにいつもオスカーが絡むのは嫌いだからじゃない、いやむしろその逆で。

いつか絶対こいつを負かして。初めての経験に気落ちするリュミエールを優しく慰めて、そしてそれから、俺は胸を張って何年間と重ねてきた自分の思いを告白する。

オスカーの胸の中で密かに練られている計画がそれだった。

ひとつ計画に根本的な間違いがあったとすれば、いつになったらリュミエールに勝てるのか未だにお先真つ暗な状況だということだろうか。

そんなオスカーの目の前で、嬉しそうに闇の守護聖にてちと駆け寄るリュミエール。

オスカーの氷点下のアイスブルーの視線を真っ向から受け止めるクラヴィスの、その唇の端が皮肉っぽく吊りあがっているように見えるのは、たぶんオスカーの気のせいではない。

聖地の誰にも目撃されたことのない水と炎の手合わせだが、闇の守護聖だけはしばしば場に居合わせる。まるで見計らったように。

「クラヴィス様から、オスカーに一言仰っていただけませんか……私はいつも、このように争いは嫌だと申しておりますのに……」

「勝手にやらせておけ」

……オスカーは、ようやく、その時に気がついた。

闇の守護聖の声音は、この上もなく楽しげだ。

眉根を寄せたオスカーに、クラヴィスは再び視線を向けて。

悪魔もかくやと思うほどの、最高に上機嫌そうな冷笑を唇の端に浮かべて。

『ふふんつつつつ』

と、思いつきり鼻で笑ったのだった。

—— つつ絶対こいつ俺の目的を知ってやがるつつつつ!!!

『私の可愛いリュミエールが欲しければ正々堂々と、この子に勝てるものなら勝ってみろ』

濃い紫の目がありありとそう語っている。闇パパも節操なし狼のオスカーに虎視眈々と狙われて

いる自分の愛娘（？）が宇宙最強とあれば、自身は何をせずともさぞや安心してだらだらと心楽しく傍観していただけることだろう。

「では、リュミエール、約束通り私の部屋でハーブを聴かせてもらえぬか」

「はい♪」

軽やかに答えるリュミエール。2人揃って歩き出す。オスカーはまだ痛む頭を抱えながら忌々しげにそれを見送る事しか出来ない。

ふと、水の麗人が振り返った。

「ああ、オスカー、頭のコブはどなたかにきちんと手当てをしていただいた方がよろしいと思いますよ。……それでは、ごきげんよう」

クラヴィスは振り返ってもう一度オスカーに氷の冷笑を浴びせると、もはやすでにクラヴィスの方をしか見てないリュミエールを引き連れ、2人して宮殿の奥へ消えていった。

——— つ、俺なんか、俺なんか ———

『演奏前のチューニングも聞かせてもらったことないってのに~~~~~~~~っ！』
情けない叫び声は、かろうじて胸の中だけに留めておいた。

オスカーの受難は、まだまだ続きそうだった。

今更だが、気付いた事がある。

こここの草原は、故郷の景色を少し思い出させる。

しかし——と、馬上のオスカーは考えた。

それでも、違うのだ。

今日もこの地を照らす日差しは、常春のそのように包み込むような柔らかさで。風は適度な湿気を含んで、掠める頬に優しい。

その陽の下、視界の届く限り広がる緑の波。緩やかな丘がいくつも重を作る。

風景自体は故郷のそれとさほど変わらないもののはずなのに、与える印象はひどく違う。

故郷の日差しは厳しく、強かった。昼も、夕焼けも。

水分をほとんど含まない乾いた風は、天高くからの光をそのまま強く草原に照り映えさせ、視界一面の草葉の縁は、触れれば切れそうなほどに鋭く見えたものだ。

どこまでも続くように思われる草の波の中、愛馬の上でゆっくりと揺られながら、珍しく感傷的な気分になっている自分に気が付き、オスカーは小さく苦笑した。

以前にこの辺りを通った時は、まだ思考がひどく混乱していて、景色を見るゆとりすらなかった。

いや、草波を目にはしていても、風の音を耳にはしていても、それはオスカーの前を通り過ぎるだけで、オスカーの中身はここに到着したその時から、真っ白の状態から遅々として更新されなかったのだ。

自分の内部へ入力される視覚や聴覚の情報を、「受け取っている」という実感がオスカー自身に湧いてこなかった、というべきか。

今は違う。

柔らかく重なり合う緑の波も、踏み分ける草の湿った匂いも、故郷のものとは違うそれらが、確かに、染み入るように自分の中に入ってきているという実感。

あれから少しの時しか経っていないとはいえ、既にこの景色は、自分の手の中にあるべき「自分のもの」だという感触がある。

ここ——そう、この「聖地」の風景は。

オスカーの中にある一番古い記憶は、どこまでも続く草原を夕日が照らす中で、一面の朱い世界に包まれて佇む自分自身だった。

果てしなく遠くまで、ただ冴え冴えとした朱い光景しか自分を取り巻くものはない。

幼いオスカーはその時、急に不安な気持ちを感じた。ただ一人、この世界の中でありとあらゆるものから切り離され、果てもない孤独に取り残されたような。

目にするもの、目に入るものの全てが、どんなに手を伸ばしても一体となることのできない、自分自身とは異なる存在であるということ。

それは確かに、幼い子供が、彼自身を取り巻く周りの世界とは異なる存在である「自我」というものに気付き、その周囲の世界から分離した瞬間でもあった。

それは人に恐ろしいほどの孤独感を苛む。オスカーは生まれて初めて恐怖というものを覚えた。なにものとも、つながることが出来ない。すべてのものから遠く隔て分けられた、無防備で無力な自分。そんなことを思った。

その時、馬に乗って迎えに来た母親が遠くからやってくるのが見えた。

草原の女は皆、男勝りだった。

馬上から降りて、ゆっくりと近づいてくる彼女の姿。その柔らかな曲線も紅に彩られていた。

……ああ、このひとはここにいてくれる。自分から切り離された、その向こう側の世界

にはなく、自分の、傍らに。……オスカーはそんなことを考えた。

彼女はオスカーの横まで歩み寄ると、あなたの髪はこんな夕焼けの中でもいちばんに目立っていて綺麗だわ、と優しく髪を撫でてくれた。

そしてその暖かい手が、オスカーのまだ小さな手を握った。

その彼女はオスカーとその周囲の世界とを繋ぐ掛け橋のように、彼を家へと、そして彼を取り巻く世界へと、彼が彼自身のものとして受け取ることが許された世界へと、手を引いて連れて帰ってくれたのだ。

例えば、そんな母や、その時の彼女の掌の感触や、巨大な恐怖の後の、言葉で言い表すことができない染み入るような暖かさや、……

オスカーは長兄であつた。彼の下には、弟と、可愛い妹。

彼らの世話を焼くのはとても好きな事だつたし、彼らもオスカーを慕って暇さえあれば戯^{じゃ}れてきていた。

弟にはよく剣の稽古をつけてやった。妹は少し年が離れていたこともあって、可愛くてたまらないほどで、兄馬鹿と周囲からかわれるほどにべたべたに甘やかした。

次は彼らに何をしてやろうか、何を教えてやろうかと、あれこれ考えるのが好きだつた。

彼らの髪を撫でる時や、彼らを愛情いっぱいに力を込めて抱きしめる時の、自分の手に伝わる柔

らかい感触と暖かみが好きだったが、そんな時に惜しみなく返されてくる彼らの満面の笑顔はそれ以上に愛おしかった。

例えば、そんな弟妹や、抱き締める感触や、響くように返され染み入ってくる暖かい笑顔や、
：

軍人の家系だった。

祖父や曾祖父たちと同じように、やはり軍で活躍する父の姿を見ながら育った。自分も軍人になり、父と同じ道を歩むのだと信じて疑わなかった。

15の年に士官学校に入学した。規律も訓練も厳しかったが、オスカーはそれまでのどの生徒より優秀で、強靱だった。学友どころか、教官たちにすら一步も引けを取らなかった。

たまの休暇に、草原の中の家へ帰ると、祝いの酒で酔った父が自分の戦歴を自慢するのが常だった。父親の話に誇張はなく、語る内容全てが事実であつたから、オスカーは少しも不快な気分にならず、むしろそんな父を誇りに思つた。

オスカーが初めて覚えた酒の色は、決して不快ではない夜の深淵の中、暖炉で燃える火の照り映えた琥珀の色だった。

例えば、そんな父や、耳に心地よい響きの低い声や、ひとつひとつが生き生きと語られる話や、

グラスの中で揺れた灯火の揺らめきや、……

そして再び士官学校へと帰り、日々の訓練や講義を受け、
もうすぐ卒業しようかという17のあの年に、

唐突に自分の中から膨れ上がる、爆音と閃光の洪水にも似た、激しい衝撃。

時を置く間もなく、自分の前に跪いた見慣れぬ人々が――

例えば母だとか、父だとか、弟妹だとか、今まで出会った全ての人だとか。
自分が現実のようにくつきりと思い描いていた自分の未来だとか。

歴史が傷となって残っている白い校舎の壁や、父から貰い受けて手に馴染んだ万年筆や、来週の
授業の予定。

そういうものを、あの日、
自分の中から湧き上がったあの莫大な力と引き換えに、
あの日、全てを――

全てを無くしたのだ。

何もない、自分。

真っ白な、自分。

今まで関わってきた人、物、時間、全てを失って、自分の中に空いた巨大な空洞。

足元がふらつく。

踏みしめるべき大地さえ、奪われて。

何処とも、何物とも、繋がる術はひとつも無い。

軀が震えた。

聖地に持つてゆくことが許されたのは、新たに自分のものとなったその力と、父から譲られた帯剣を始めとする2・3の品物だけ。

それが慣例なのだと聞いた。

聖地に入る、守護聖となるべきものは、全ての過去から切り離されるのだと。

故郷の星の王立研究院から、アーチ状の柵の中、虹色の渦が巻くゲートの前に立つ。迎えのものが同行するのはここまでだった。

ただ一人で、ゲートをくぐる。

実家を発ってから王立研究院に着き、ここに立つ直前、差し出された衣装に改めさせられた。衣服すら、過去のを共に携えては行けないのだ。

そして足を踏み出した先の――

故郷では見たことのない、柔らかな日差しが太陽。

頬をなぶる柔らかい風。

草を踏む、足元の感触。

迎えに来た、初めて会う人。

あの日から、全てを奪われたゼロの状態から、再び、一つ、一つ、平然とした振りをしながら、その実——必死に、「自分のもの」を懸命に手に入れ直してきたのだ。

そのものたちとの繋がりを増やすたび、次第に濃くなる、自分の輪郭を獲得するために。

故郷の星から、ゲートをくぐって出た先は、目の前に広がる広大な草原だった。

故郷とは違う、常春の風景のそれ。

聖地に辿り着いたのだ、と気が付いた。

ふと、自分の背後を振り返って——

目にした光景に、驚愕した。

思えばあの時、迎えを待つてその場に佇んでいた間、自分はひどく緊張していた。

ひとは誰しも、普段は些細だと思っている、しかし数え切れないほど多くのものとの繋がりの中で、自分という存在を支えることができるのだ。

関わるものを全て取り払われた、寄る辺の一切無い生身の状態の自分が、どれほどに不安定で揺らぐ存在であるか。

覚えのある感覚——あの幼い日の、夕暮れの中あの絶対的な孤独。

再びぐらつきかける足元を自覚した時、遠くからゆっくりと近づいてくる馬影に気が付いた。

これも既視感。あの日の、母のような。

単身迎えに来たその人は、オスカーから少し離れた所でひらりと馬から降りた。一目見るからに人を安心させる、暖かい微笑と包容力、そして長い金の髪を持つ人だった。

「よお、新しい同僚」

そう言つて、不安に身を固めて待つオスカーの背を力強く叩き、暖かく笑ったその人——緑の守護聖に、オスカーの不安は多少なりとも和らいだのだった。

聖地の果てにあるその場所から、中心に聳える女王陛下の住まう宮殿までの道のりを、その日、彼を単身迎えに来たカティスに伴われて通った。

あの日、人生の全てがリセットされて、再び始まった、その日に通ったこの草原を、今、オスカ

―は逆方向に辿っていた。

あの時とは、逆の立場
う者となるために。

――先輩として、
新任の守護聖を迎えに行き、
そして聖地で初めて出会

「俺が、ですか？」

敬愛する首座の守護聖に対して無礼になるかと思いつつも、気が付いた時には既に思わずそう尋ね返していた。

「俺はカティスみたいに歳が往ってる訳でもないし、まだ聖地に来て数か月も経ってないのに——」

「誰が歳が往ってる、だ、おい」

楽しい笑い声で反論されては怒られている気にもならない。もちろんカティスも怒ってなどいないのだろう。

「お前の相棒なんだよ」

続いて聞こえたカティスの声は、確かにそう言葉を綴った、ように聞こえた。

「はあ？」

よく話が飲み込めず、炎の守護聖にしてはいささか情けない声で聞き返してしまう。

そなたはいつも話を急ぎ過ぎる、とジュリアスに言われ、舌を出しておどけてみせるカティスの姿は、まるで子供のようだった。

カティスと違い、聖地に来て間もないオスカーがその新任の守護聖となるべき人を迎えに行く理由は、新たに来るその人が、オスカーの対となる存在、だからであるかららしい。

長い在任期間を共に生きる、水の守護聖なのだと。

首座を始めとする、先輩の守護聖たちからそう聞かされた時のオスカーは、まだ見ぬその相手を、単なる同僚ぐらいにしか思わなかった。

オスカーが迎えに行くその人は、自分よりひとつ年下だと聞く。

そいつもあの時の俺のように、何もかもを無くした状態で不安に身を包んでいるのだろうか。

だとしたら、俺はあの時のカティスのように、そいつの不安を解消してやって。

俺があの日から今日までに手に入れて、自分のものとした、いろんな事を教えていこう。

サクリアの扱い方だとか、惑星の育成の方法だとか。先任の守護聖たちを紹介してやって、これまでに知った彼らの裏情報をこっそり教えてやって。

そろそろ慣れてきた、聖地の佳い女たちのことや、気晴らしとロマンスを求めて下界へ抜け出す手段――

そこまで考えて、自分が先ほどまでの感傷から抜け、普段の自分らしい自分に戻っていることに気が付いて、少し笑った。

故郷に少し似ている広い草原。

しかしそれが故郷のものでないという事をはつきりと知らしめる、その光景が視界に入るようになってきた。

聖地は主星上に存在するのだという。

しかし聖地は、主星の他の場所とあらゆる意味で隔てられている。時の流れ方さえ異にする。外界と聖地を分け隔てる、女王陛下の力によるそれは――

どこまでも続くと思われた草原は、そこで真一文字にぷつりと切れている。実際には聖地を取り囲んでいるのだから、直線ではなく緩い円周であるはずなのだが、聖地はあまりに広大で、視界の届く範囲では真つ直ぐにしか見えない。

その先は――何も無い。無い、という事さえ存在しない。

視線をその先に向けようとすると、まるで両眼が存在しなくなったかのように、その先の視界だけが奪われる。

明らかに人知の力を超えたものだと思われる、それは――壁、そう、「壁」と呼ばれていた。

初めて聖地に着いたあの日、最初に目にした草原の風景から振り返ると、今しがた自分が出てきたばかりの七色に渦巻く「道」の出口と、――この「壁」があった。

歩けばほんの数メートル先で、こちら、と、そうでない場所、をすっぱりと切り分ける、目で捉

えることの出来ない境界が、地平線に霞んで消えるその先まで、一直線に伸びるその光景に、圧倒的な畏怖感を覚えた。

そして動くことすら出来ないまま、身を竦ませて、「道」の前で、

——あの時の自分と同じように、佇む姿。

足元まである白いローブを纏っている。

楽器らしきものを胸に抱くように両手で包み、「道」の方を向いて立ち、こちら側に背を向けている恰好だ。

清流のような、背に流れる透明な青が、その人の動きに合わせ、揺れた。

水色の髪？ ——珍しい。

オスカーは、やはり聖地に来てから、自分のものとして手に入れた愛馬をゆるやかに駆り、近付いていった。

確か、名は——

蹄の音に気が付いたその姿が、ゆっくりと振り返る。

視線を合わせようとして、オスカーは——

名は——確か、「リュミエール」と——

……その瞬間に、生まれた渴望。

全身の血が逆流して、その人へと向けて迸り出てゆくかと思うほどの——激情を覚えた。

「……お前…、欲しい」

オスカーの口から、勝手に言葉が滑り出していた。

至上の美貌。

過度の緊張に耐えるように、わずかに強張った表情は、それでも今までオスカーが目にしてきた何者よりも美しく、しなやかで、優雅で。

何よりも。

強さを司るオスカーとは正反対の、それでいて、ただ一人の半身として、オスカーの魂をすら包み込む、溢れるほどの優しさを湛えた包容力。

今まで築き上げてきた全てのものを失って、空いた巨大な空洞を補って、なお余りある存在。この人の笑顔ひとつに比べれば、今までに手に入れたどんな宝でさえも、塵ほどにその意味を無くすに違いない。

オスカーの言葉に、大きく見開かれた、深海の瞳。

「……………え？」

……ああ、なんて優しい声音だろうか。

その動きに合わせて波打つ、青銀の髪。

透けそうなほどに白い頬の下には、紛れもない紅い血潮が流れている。
生きて動いて息をしている事が奇跡のようだ。

……ようやく、と思った。

ようやく逢えた。

俺の、俺だけの相手。

もう、何も要らない。

こいつさえ居れば、もう、何も要らない。

オスカーは滑り降りるように馬上から降りた。

自分が馬から降りたということすら意識に上らなかった。

一步一步、確かめるように、こちらを向いたままの人に近づいてゆく。

合わされたままの視線は一度も外される事なく、目の前に、向かい合って立った。

「お前が欲しい」

お前が、お前だけが欲しい。

お前の代わりになるものなど、何もない。

これから先の永い永い時の流れを、この人と共に歩めるのだと。

この人の微笑みも、小さな仕草も、怒ったり泣いたりする姿も、その全てが手に入れられるのだと。

そう思った瞬間、狂おしいほどの愛おしさが込み上げて、腕の中に囲い込み、壊れんばかりに力の限り抱き締めていた。

全身で感じるその人の存在。抱き込んだ腕の中で跳ねる軀からは、脈打つ鼓動が伝わってくる。

両腕を掴んで、間近で顔を覗きこむ。暖かい海の色の瞳を縁取る長い睫。動きに合わせてさらさらと流れる、子供のような艶の髪。

微かに動く唇が、何かを言いたげに息を零した。

それを目にした瞬間、オスカーの自制は吹き飛んだ。

強く引き寄せて、荒々しく、強引に唇を塞ぐ。

そのまま、深く口付けていった。

オスカーは溢れるほどの幸福感に襲われながら、何度も何度もその感触を確かめた。角度を変え、舌を絡め、ようやく手に入れた存在を捕らえて離すまいとするように。

自分の肩の後ろ辺りの服を掴むその人の仕草に、愛しさがいつそう煽られた。その人の全てを探るように舌を使った。

……魂さえも溶かし尽くすような、熱情の口付けは、いったいどのくらいの間、続いていたのだろうか。

ふ、と、オスカーの腕に掛かるその人の重みが、変わったような気がした。

「？」

夢から覚めたように、オスカーは自我を取り戻し、しかしまだ甘い感情に半分以上まどろみながら、唇を解放して、腕の中の人を見た。

白い頬は薄く朱に色づき、濡れた唇はこの上もなく扇情的で、ついっかかりオスカーは呆然と見惚れてしまった。

オスカーの腕に凭れて見上げてくる、薄く開いた青碧の目。

その視線が、オスカーの視線と絡んだかと思うと——瞼が完全に落ち、かくん、と白い首が仰け反った。しなやかな軀はぐったりとして、さほど重くない体はオスカーの腕一本で抱えられる形になる。

白い衣装に囲われたハープが白い腕の中から滑り落ちそうになるのを、オスカーのもう片手が慌てて支えた。

「——ちよ、おい、ちよつと!？」

冷水を掛けられたように意識が覚醒して、オスカーの全身からどつと汗が噴き出す。

腕の中の美貌の人は、キレイさっぱり気絶してしまっている。

まずい、とかやりすぎた、とかいう言葉だけが次々と頭の中を巡り、今までに誰にも晒したことのないような狼狽ぶりでオスカーは慌てた。

「ちよつと、おい、大丈夫か、……リュ——」

咽喉まで出かけた名前が、何故だか解らずにそこで止まる。

リュミエール、と言うのだと。その人の名前を、そう、先輩守護聖たちから聞いていた。

初めて音に出して呼ぶ名前は、しかもまだ自己紹介すら交わしてない状況では、微かな抵抗と違和感がある。

片手のハープを地面に下ろすと、その手を青銀の髪の中に差し入れて、傾いた首をそつと支えてやる。

「——リュミエール……」

小さく、小さく、囁くように、初めて、その人の名前を呼んだ。

瞬間、オスカーの胸に痛みが走る。

その痛みを、オスカーが不思議に思う間もなく。

「……………ん……………」

腕の中の人、微かに身じろぎした。人というのは、大声での無闇な呼び掛けより、小さな声であつても自分の名の方が意識に触れやすいものらしい。

浮上しつつある意識に、オスカーはもう一度、呼び掛けた。

「リュミエール……………」

つきん、と、再び胸に走る痛み。そして再び甘美な夢の中へ沈んでいくような感覚。

ああ…………、と、オスカーはそこで気が付いた。

愛しいのだ。

名前を呼ぶだけで、胸が詰まるほどに。

初めて出会った、最後の相手。

その人が自分の腕の中で目覚める様子を、オスカーはじっと見守った。

深海の瞳がゆっくり開かれていく。視線は焦点を結ばずに、しばらくの間、オスカーを彷徨った。

「…あ…………、…………わたくし……………」

まだ状況をはっきり理解していない様子のその人の唇から、年齢よりもあどけない声音が零れて、オスカーはつい微笑んでしまった。

そのオスカーの微笑を向けられた白い頬が、ぱあっと花卉を散らしたように朱に染まる。

その変化はあまりに鮮やかで、まじまじとオスカーは眺め入ってしまい、軀を支える手が緩んだ。次の瞬間。

青銀の髪の人、オスカーの胸を、どん、と突き飛ばし、くるりと振り向きざま、闇雲に駆け出した。

その先にあったのは、——七色に光る「道」。

オスカーの伸ばしかけた手と開きかけた口の前で、目の前に輝く光に驚いてよろめいた白い衣装の軀が、すう、と水に溶けるように、「道」の光の中へ消えていった。

——後に残ったのは、さわさわと嘲笑するような草波のざわめきと、

ざあ、と音を立てそうな勢いで、一気に顔から血の気を引かせた炎の守護聖だけだった。

「道」は常に下界のひとつところに繋がっているのではない。土地から土地、星から星へと、次々に接続する場所を変えてゆく。

炎の守護聖を迎えるときは炎の守護聖の星へ、水の守護聖を迎えるときは水の守護聖の星へ、それ以外のときはそれ以外の何処かへ。

まるで「道」が、それ自身の意思を持っているかのように。

七色の光に飲み込まれた新任の水の守護聖が、どの星のどの土地に辿り着いたか——全く見当が

つかなかった。

見るからにたおやかで優雅で、儚げで頼りなげな印象の、運命の人が、見知らぬ土地でどんな目に遭っているのかも。

女王陛下に、他の守護聖たちになんと報告すれば。かの人は何処に辿り着いたのか。追いかける術は。無事でいるのか。

ぐるぐる回る思考に、狼狽えに狼狽えたオスカーが、なんだか訳のわからないことを叫びそうになった瞬間。

「馬鹿か、お前……………」

背後からの呆れきった声音に、オスカーの膝が思わず抜けそうになった。

「気になって後を追ってみれば、色恋沙汰に関しては百戦錬磨のはずの炎の守護聖が、とんだ失態だなあ、おい？」

凶星だったので振り返る気力もなく、思い切り脱力してオスカーは呟いた。

「……楽しんでないか、カティス……………」

「まあ、それは置いておくとして」

「措いとくなっ！」

振り向きざま叫んだオスカーの目に入ったのは、その口調とは懸け離れた、真剣な表情の緑の守護聖だった。

「措いとけて。いいから、さつさと追え」

そう言つて「道」を指差す。

「は？」

「行け！ 今ならまださほど到着ポイントは移動してないはずだ！ 聖地の1秒が下界のどれほどに当たるか、知らない訳じゃないだろう！」

珍しく鋭い語調のカティスの言葉には、それでも同僚を思いやる暖かい響きが含まれていて。

一瞬、表情を引き締めたオスカーは、すぐに笑顔になって、「道」へ向かつて駆け出した。

「後のことは任せとけ」

いつもの大らかな口調で、最後にそう呼び掛けたカティスに、オスカーは「道」へ飛び込む寸前、軽く上げた片手と自信に溢れた笑いで応えた。

あつという間に、炎の守護聖の体が七色の光の中へ吸い込まれていく。

そしてその場に残ったのは、緑の守護聖と、地面の上に置かれたハープ、そして草原の葉擦れの音だけになった。

「……さて、と……」

ほんの少し、垣間見ただけの水の守護聖の印象そのままに、優雅な曲線を描くハープを手に取り、

カティスは何処へともなしに呟いた。

これは運命。与えられるものではなく、選ぶものである、それ。

守護聖という、宇宙中で9人だけの至上の地位にあり、年月を重ねるにつれ、実感する、それ。

女王の慈愛は、宇宙の全てのものの上に降り注ぐ。それは、全てを奪われ、何もかもを無くして、聖地と言う孤境に来ざるを得なかった守護聖に対しても何ら変わることはない。

失ったものの全てに比するほどの、無二のものを、守護聖たちはこの聖地で手に入れることが許されているのだ。

だがその過程は易しいものではない。それをそれと気が付かないこともよくある。

だからこそ、聖地でのさまざまな過程は迂遠な手順がやたらと多い。

女王陛下の御座す宮殿までの道のりを遥かに進まなければならない、聖地の辺境のこの場所に在る「道」に象徴されるように。

長い道程の中で、迷い、悩み、新たな発見をし、乗り越え、手に入れる。

どうやら炎の守護聖に関しては一瞬で気が付いたらしいその、唯一無二のものを、あの2人は互いに、順調に手に入れることが出来るだろうか。

ましてや対の力は、引き合う時には強く引き合うが、反発する時のそれも並ではない。

「ま、楽しくなりそうだってのだけは間違いないな」

嬉しそうにそう口にする緑の守護聖は、けっこう無責任かもしれない。

若い2人の同僚の、とりあえず無事な帰還を祈りながら、宮殿へと共に帰るため、炎の守護聖の愛馬へ挨拶をしに、カティスは「道」に背を向けた。

目立たない普段着でも、普通に道を歩いているだけでも、そのさらさらと水の流れるような涼やかな気配は、本人が思う以上にその存在を主張している。

「あら、リュミエールちゃん、お帰りなさい」

学校から家への帰り道では、必ずと言っていいほどご近所さんから声を掛けられるリュミエールだった。今日のお相手は庭の芝生の手入れをしていたご近所のお婆さん。

近所といってもリュミエールの住む家は、集落から少し離れた海辺にあるから、彼はこれから家までもう少し歩かなければならない。

「こんにちは、お婆さま」

リュミエールが微笑みながら返事をする。その匂い立つような美貌に思わず見とれてしまうご近所さんだった。

「お母さんの具合は如何？」

「ええ、最近氣候が良いせいか、このところ調子がいいみたいなんです」

本当に嬉しそうにしてそう笑うリュミエールの微笑は、彼を知る誰もが斯く有れと強く望む笑顔だった。特にここ何か月かは、彼の母親の病状が悪化する一方で、彼の表情も得てして曇りがちであつたから。

「そう、それはよかったわ」

その言葉に、リュミエールの笑顔は一層深くなる。

彼独特の、人を思い遣る、暖かな慈愛に満ちた微笑は、まるで見るものの方が逆に癒されていくようなそれで。

軽く会釈して自宅の方向へ歩み去ってゆくリュミエールを、長い間見送った。

確かに彼は、他に類を見ない、稀有な存在だった。

リュミエールは門扉を開けて家に入った。玄関脇の金木犀は今が盛りとばかりに咲き誇り、家全体を芳しい香りが包んでいる。

母親の体調のためには良いのだが、1か月に40日雨が降るといわれるこの土地にしては珍しく晴れ続きだった。庭の植物たちに水を遣ったほうがいいだろうか、と考えながら、鞆から鍵を出して、玄関のドアを自分で開けた。

「ただいま帰りました」

家の奥に向かって声を掛ける。返事は無かった。

父は仕事で、兄たちも妹も学校のはずだ。

そして母は。

リュミエールはいったん自室に鞆を置きに行くと、両親の寝室へ向かった。ノックをしてからドアを開ける。

「ただいま帰りました、母さま」

ドアから覗き込むようにして声を掛ける。

「……お帰りなさい、リュミエール」

返された声は、弱々しい、とても小さなものだった。

かつては美しい人だった。リュミエールの容姿は母親譲りだ、とよく言われた。

雪のように白かった肌は、今は黒ずみ、目は落ち窪んで、痩せ細ってしまった体がベッドに横たわっている。

そんな母親を深海色の瞳で見つめ、一呼吸空けてから、リュミエールは部屋の中へ入った。

ベッドサイドに置かれた食事はほとんど減っていない。

「今日は……ずいぶん早かったのね」

何でもいいから口にしてほしい。何か食べたいものはないか、とリュミエールが聞こうとした時、母の方から先にそう問われた。

「私のことを心配して、早めに帰ってきたのではなくて？」

母のその言葉に、リュミエールは曖昧に微笑み返した。適当に誤魔化してしまった方が良いことはリュミエールも判っている。けれども母と同様、どうしても嘘は吐けない性質だった。

「駄目ですよ……来年の進学について、先生とちゃんと相談してきましたか？」

だいぶん前、少しだけ話した話題を、彼女はすっかり覚えていた。

不意を衝かれて、リュミエールは一瞬口籠もった後、ベッドの脇に膝をついて、細く細くなってしまう母親の手を両手で包んだ。

「母さま……やっぱり、学校を辞めて、母さまのお世話をさせてください」

「駄目ですよ」

リュミエールの要望に対して、即座に返事が返される。

「だったら、せめて何処かで働いて」

「駄目です」

「母さま」

「子供は勉強をするのが仕事ですよ」

「もう充分すぎるほど、勉強させてもらいました」

少し顔を赤くしながら、リュミエールは反論した。

「それに、もう16です。子供じゃありません」

「子供ですよ」

「母さま」

「貴方は、いつまでも、私の大切な子供ですよ」

静かな言葉。リュミエールは息を詰めるように言葉を失った。

「大切な大切な子供だから、本当の意味で、貴方のためになることをしてほしいの」

「……………考えておきます」

答えるリュミエールの声は、微かに震えていた。

たったこれだけの会話をするのも、母にとっては体力的に辛いことのはずだ。息が乱れている。

どうすることも出来ない。考えうる限りのありとあらゆる治療は、もはや彼女の身体を痛めるこ

とにしかない。安静にさせておくぐらいしか対処法がないのだ。
庭の植物に水遣りをする旨を告げて、リュミエールは部屋を出た。

ドアを閉めて、そのままドアに背を当てて凭れ掛かる。

そのままじつと、母から与えられた言葉を想って、立ち竦む。俯いた両頬に青銀色の髪が流れ落ちた。

浮かんでくる涙を、白いシャツの袖で拭う。

どくん、と、胸鳴りがした。

(…………え?)

リュミエールは俯いた姿勢のまま、目を見開いた。

続けてひとつ。ふたつ。

潮騒のように繰り返され、そのたびに大きくなる何かが——自分に向かって流れ込んでくる。

優しいけれども容赦なく自分を飲み込んでしまうその何かに、揺さぶられ、押し流されていってしまう。

鼓動が速くなり、ひとつ胸を打つごとに、どんどんと膨れ上がって行く、それ。

「……リュミエール？」

ドア越しから微かに声を掛けてくる母も、何であるか解らないその何かに気が付いたのだろうか。

その時だった。玄関のチャイムの音がしたのは。

リュミエールは顔を上げると、もう一度手早く涙を拭いてから玄関へ向かった。

ドアを開ける。

——瞬間、違和感に包まれた。

男女合わせて数人が玄関先に立っていた。一見これといって特徴のないように見えるその人々は、しかしこの辺りの土地に普通に見られるその地味な服装が、どこか馴染んでいなかった。

この地域の人ではない、という事はすぐに判った。しかし自分の家に何の用があるのだろうか？訝しげにそう考えたリュミエールの前で、先頭の男性が、膝を突いて低く身を屈めた。

「リュミエール様——で、あらせられますか」

彼らが訪れた目的を聞かされたとき。

頭が、心が、

自分自身が、真っ白になった。

光に包まれたかと思うと、天地がひっくり返るような感覚に襲われた。

それから急に、重力を感じた。咄嗟に受身を取る。

ばしゃん、と膝まで水に漬かる感触。跳ね上がる水飛沫が目映った。

片膝を軽く曲げて着地した姿勢のまま、しばらく目の前の水面の波紋と、透明な水の中でゆらゆら揺れる白いローブの裳裾を眺める。

そうして、ゆっくりと顔を上げた。

さつきまで自分が何処にいて、何が起きたから、どうなったのか、を。
一時的に失念した。

明るいようにも暗いようにも思える光の中で、長いようにも短いようにも感じられた時間の間、思い出していたのは、故郷での、あの運命の日の出来事だった。

(……ああ。)

あの日に訪れた人々は、絶対の存在からの丁重な要請、しかし実情は絶対の命令であるそれを、自分の元へと届け。

自分の行為の無意味さを知りつつも、母を案じてその命令を拒否した日々。

静かに促す母の言葉。

何人もの護衛に囲まれ、家族に見送られながら家を後にした。立つことすらままならない母が玄関先まで見送りに出ていた。

その家族に、母に、背を向けなければならなかったあの日。

「道」をくぐる直前、自分の後を追うようにして届けられた報せ。

「――」

別のことを考えようと思いを逸らしたら、とたんに意識の光景に緋い色彩が広がった。それから、高温の炎の色の瞳。

深い深い、口付け。

ぱつ、と頬に熱が上がった。

リュミエールは慌てて頭をぶんぶん振った。今は思い出したくないことだ。

とりあえず、目の前の現状を把握することにした。

眼前に見晴らす草原は、遠くでいくつかの丘が重なって地平線に続いている。まばらに生えた木は、ところどころで林を、遠くの山手の方で森を形成している。

見渡す範囲に、人工物の影はひとつも見られない。

背の方から風が吹いて足元の水面をさざめかせ、草原に掛かって草波を揺らし、そのまま視界の先へと流れていった。

日はあと少し傾けば、夕暮れの色を作りだすだろう。

小さな頃、友達と遊んでいて、夕方になり、子供たちはひとり帰り、ふたり帰り。

誰もいなくなった茜色の景色の中、独りきりで見た海に沈む夕陽の光景を思い出す。

(帰らなければ)

咄嗟にそう思う。

それから気付く。

(帰るって、何処へ?)

故郷の星とは既に別の時間を歩み出し、過去の中にしかそれを求める術は無い。

ほんの数分居ただけの聖地と呼ばれるあの場所を、帰る場所と思えるほどの執着も無く。

ただひとつ故郷から持ってくることを許されたハープも——ただひとつ、自分を支えてくれたものたちとの絆を証すハープも、いつの間にか自分の手の中から消え。

行く場所も、帰る場所も無い。

真っ白なままその場に立ち竦んでいた、その時、

——背後に、微かな気配を感じた。

振り返ると、視界を遮る草波の合い間に、小さな小さな人影が見える。

ずいぶんと小柄で、草間に埋もれてしまいそうなほどに背の低いその人物は、女性で——老女？

ゆっくりゆっくりと、一步一步近づいてくるその姿に引かれるように、リュミエールは自分をびしょぬれにした泉の中央から、濡れた裳裾を引き流しつつ水際の岸边の方へと歩み寄っていった。

けれども何故か、最後の淵から先へは——草生い茂る陸へは上がれなかった。リュミエールの足はそれ以上動かなかった。

自然、緩徐に歩み寄ってくる老女を待つ態勢になった。

やがて草波を掻き分けて、その人物がリュミエールの目の前の岸边に立った。

小さな顔に深く刻まれた皺は、静かに年老いた者特有の穏やかな笑みを湛えている。

その背は曲がっていて小さな身体をますます小さく見せていたけれども、リュミエールは何故かその老女から、何ともいえない不思議な強い威厳を感じた。

「……綺麗な髪をしていらつしやるのね」

老女を見つめたまま茫然と立ち竦んでいたリュミエールに、^{しわが} 噎れた小さな声が——しかし決して無視することのできない存在感に満ちた声が届いて、そこで初めてリュミエールは我に帰った。

それから相手の言葉と、濡れねずみの自分の醜態に気が付いて顔を赤らめる。

そんなリュミエールの様子に、老女はさわさわと笑い、可愛い人ね、と囁いた。

「息子がいた頃なら、うちのお嫁さんにぴったりだったのに。残念だわ」

最初リュミエールは老女の言葉の意味が判らず、その文章はぐるぐると頭の中を3周ほど駆け巡り、それからようやく何を言われたのかを理解した。

「いえあの、申し訳ありません、わたくし、男なんです」

よくわからないこの状況と老女の対応と会話の流れに混乱しながら、リュミエールは切れ切れにそう答える。

老女は小さな目を軽く見開くと、もう一度さわさわと小さく笑った。

「それは……失礼なことを言ったかしら。ごめんなさいね」

「いえ、故郷の星でもよく間違えられていましたから」

「そうでしょうね。だってとても涼やかにお綺麗でいらつしやるもの」

混乱したままの会話を続けながら、リュミエールは頭の片隅でぼんやりと、ここも星間航行技術を有する——つまりは主星文化圏内の中にある惑星だということを悟った。故郷の星、という単語に老女が驚かなかったから。

「とりあえず、そこからお上がりなさいな。年寄りの一人住まいの家にいらしても、大したもののご用意できませんけれども、泉の中よりは暖かいベッドくらいありますから」

ただそれだけを言つて、自分に背を向けて再び歩みだす老女にリュミエールは驚いた。それから——その姿を追うことが出来ず、その場に立ち尽くす。

動かない気配に、老女が振り返つて、軽く首を傾げた。

もうずいぶんと傾き始めた太陽に照らされた、一面の見慣れない広大な乾いた草原の光景の中、すぐ目の前に立っているはずのその小柄な女性との距離が、果てしなく遠く感じられて。

リュミエールは唐突に気が付いた。

自分がそれ以上、先に歩めない理由を。

自分は異邦人なのだ。

何処とも、何物とも繋がりを持たず。自分が立つこの場所でさえ、自分のものではなく、行く所も、帰る場所も、帰る方法も知らない――

足元が揺らいだ。

「どうかしました？」

「……いえ、あの……」

穏やかに尋ねてくる老女をしばらく見つめた後、リュミエールはゆつくりと目を伏せた。

「……わたくし、この星の人間ではないんです……」

何からどう言っているのか判らず、リュミエールはそれだけを小さく呟いた。

「ええ、そう思いましたわ、服装も、その髪の色も。それにお見かけしましたもの、宙に現れた綺麗な七色の光の中から、落ちていらつしやったところ。」

さらりとそう答える老女に、リュミエールは驚きを隠せなかった。

未だ動こうとしないリュミエールに、老女はただ不思議そうな顔を見せるだけで。

「……お尋ねにならないのですか？ わたくしが何処の星の、何者であるか、とか――」

混乱を深める様子のリュミエールへ向けて、老女は皺の深いその顔に、より一層の穏やかな笑い皺を作った。

「何処の星の、どなたであつても、暖かい料理と柔らかいベッドと、帰る家は必要でしょう？」

その言葉に、リュミエールはただ目を見開くことしか出来なくて。

何も言えず立ち尽くすリュミエールに、老女はゆっくりと、皺の寄った小さな小さな手を差し伸べた。

その瞬間。

リュミエールは、まるで風が通り抜けるように、白い道がその女性に向かって延び、己の身の水のサクリアが迸るように流れ出して——そして目に映る限りの草原いっばいに広がっていくような感覚を憶えた。

リュミエールの足が、自然に動いて。

真っ直ぐに、その人の元へと導かれていくように。

老女は微笑んで、手を差し伸べたまま、穏やかに微笑ってリュミエールの歩みを待っている。

差し出されていた小さな小さな手を、リュミエールは少し震える両手で包んだ。

傾き始めてもなお強い日差しに包まれた草原を通り抜け、着いた先は、老女の言葉に少しも違わない小さな小さな木造の小屋だった。

質素な作りだが、外構には幾許かの種類の花が咲いていて、丁寧に手入れをされている様子が見て取れる。これまた簡素な木製の玄関扉を開けて中に入れば、ひと部屋の中にキッチンと小さなダイニングテーブルとソファ、ベッドが収まっていて、その他にはドアの先の別室に風呂と洗面所があるだけだった。

ガスや水道のパイプラインは当然のように無く、辛うじて有線電源がこの場所を終端として、地平線の向こうから一本だけ、ひよろ長い電柱を伝って頼りなくここまで伸び、強さを増してきた風に靡いている。その根本の地面には、同じように草波の切れ目なのか道なのか判然としない程度の薄い筋が一本、やはりこの家を終わりに視界の先まで長く伸びていた。

濡れたロープの裾とブーツは実用に程遠い薄手の儀礼用のものだったことが逆に幸いし、泉からここまで歩いてくる間、からからに乾いた草波と空気とに晒されて、氣を使わずに室内に入れる程度には既に水気が飛んでいた。実用品なのか装飾なのか、室内の壁に唯一ある装いは剣と蹄鉄とをあしらったもので、女性の一人暮らしでも武威を忘れず保とうとするのは、この土地の風習に寄るものなのだろうか、と考えた。

家の中に水道があるところを見ると、地下水からポンプで汲み上げているらしい。乾いた土地のようだったが、先ほどの泉といいこの地下水といい、この辺りには僅かに水脈があるようだった。

星間航行も可能な主星文化圏であれば相応に科学技術は発達しているはずだが、余計な文明を受する娯楽の類は一切見当たらず、ただダイニングテーブルの隅にひっそりと、糸目も解らないほど繊細なレース織りの仕掛けが置いてあり、台座の周りを無数の糸巻きが取り囲んでいた。

「休んでください。どうか」

リュミエールへ客人としての饗しを用意したがる老女に、リュミエールは重ねてそう声を掛けた。何度かの固辞の後、ごめんなさいね、と最終的に老女は言い、ベッドにその小さな身体を横たえた。リュミエールがそれに包まれてこの地に現れた、異変の光を見てからの今日の彼女の歩みは、普段と比べて随分と長過ぎたようだった。

その威厳に満ちた精神とは裏腹に、老女の身体はずいぶんと長かったのであろう年月に、もはや既に酷く擦り切れ、萎んでいた。それはこの大草原の中の風へ溶け込もうとするような、ごく自然なことであるかのようにあり、それをことさら隠す気も、この老女にはさらさら無いようであった。

「こう見えても、これまで随分と栄誉と栄華に塗れた人生を送ってきましたの。最期くらいは、この星のこの素晴らしい自然の中で過ごしたくて。」

それとなく問うリュミエールへ、老女はそう答えた。

彼女の望みであるのなら、それは喜ばしいことなのだろう。そう思いはするけれども、つい今しがた、母の報に接し、そうしてまたこうやって、どうしようもない運命に対する己の無力を突き付

けられて。

「哀しいお顔は、なさらないで。歩み出すその時まで、どうかここで穏やかに過ごしてください。」
何もかもを無くして過去から切り離された、空虚でただの真っ白な自分に、その言葉が染み入る。
その気遣いに心から感謝しながら、リュミエールは多少の無理をして微笑を作った。

外部との通信の手段は何も無いとのことで、今から移動を始めれば夜に掛かる。何にせよ、明朝までは言葉に甘えてこの家で厄介になることにした。

家の中のものには自由にしていいたいと言われ、何か食事を作ってあげたいと思い、食材などを確認する。故郷から離れてまた再び、ひととき、誰かの世話をする事が出来て、不謹慎極まりないとは思いつつも多分にそれを嬉しく感じた。

リュミエールにとって、誰かの事を想い、何かをしたいと考えるのは、自分に対するそれよりもずっと喜ばしく、息をするより自然なことだった。

「息子さんか——お身内の方が、いらしたのですか？　つい最近」

それにしても物品に乏しそうだと、思いつつ尋ねる。

「え？　いいえ、身内は誰も。3週前に、雑貨と郵便の配達さんが、おひとりだけ来ましたが」

「え？」

リュミエールは思わず振り返り、聞き返した。

では、あれは。

確かにあった。

玄関先の、乾いた土に僅かに残された、蹄鉄の跡。まだ新しそうな。

この家に対して幅広に並んだように残されていて、少なくとも単独での来訪ではなかったのが見て取れる。

「……まあ」

念のためもう一度玄関先まで出てから、再度確認したその事を知らせると、彼女は驚いたように声を上げた。

「よくぞ、そんな事にお気づきで。…と、いいですか」

そうして小さく、溜息を吐いた。

「もしそうだとすると、不本意ですが、貴方を面倒なことに巻き込んでしまったかも、しれませんねえ」

「面倒なこと？」

それ以上の確認は、すぐに不要となった。

玄関扉が激しく繰り返し叩き鳴らされ、軋む悲鳴を立てたからであつた。

訪問の理由が穏やかならぬものであることは、その無礼極まりないノックの音だけで十二分に知

れた。

老女の方を見遣れば、ゆっくりと身を起こそうとする気配を見せながら、リュミエールへ向かって、「ご随意に」、とその瞳で語っている、——自分の気の所為かもしれないが——ように思われる。

リュミエールは無言で、壁に掛けてあつた剣をすらりと引き抜いた。軽く構えて、未だ殴打の音が鳴り続ける扉のノブに手を掛ける。

「国母様！——国母様!!」

——国母？

リュミエールは疑問に思いながらも、扉を開け、素早く剣を構えた。

先程まで激しく扉を叩き続けていたであろう、扉の前のその人物は、呆氣にとられた、を絵に描いたように、永い間呆けて自失していた。

それも無理からぬ事で、何分にも、東屋のような小屋の扉から出てきたのが、宇宙の粹を集めた威儀の儀礼用のローブに身を包み、不可思議にも流れるような気配を纏った至上の美貌の麗人で、しかも剣を構えているというのだから。

随分と永い間の呆然を続けた挙句、軍人らしきその人物はようやくむっとした様子で、

「な——何者だ、貴様、」

それでも狼狽を取り繕いきれず、どもりながらリュミエールに問うた。

リュミエールは目の前のその人物の装備品、装飾をざっと見計らった。背後に3名の部下らしき

者を従えている。国軍ならば分隊長クラスであろうか、と見当を付けた。

そうしてふと、なんだか可笑しくなった。

何者、か。

過去のすべては故郷とともに置き去られ、新たな地では未だ着任にも至っておらず。

何もかもを引き剥がされた、何も無い自分。

それがこんな所で、こんな風に役立つとは、思ってもみなかった。

柔らかな笑みを浮かべて、リュミエールは清々しいほどに言い切った。

「何者でもありません。……が、招かれざる客人から、貴方が国母と仰っているらしい、あの優しい方を護りたい、とは思います。」

涼やかにも気迫に満ちたリュミエールに完全に気圧けおされる形だったが、それでも分隊長は辛うじて反撃を試みた。

「な——何たる無礼な物言いを、」

「無礼なのは、そちらのほうでありましょう」

リュミエールの背後から人影が現れ、

「国母様！」

突進しようとする軍人を、リュミエールが構え直した剣で無言のうちに押し留める。

「勝手な戯言を、仰らないでくださいな。私は、ここから動きませんからね。」

その言葉も、細くはありながら見過ごす事が出来ないほどに重々しく。

軍人たちは一步引き、こちらの様子を窺いながら小さく話し合っている、その会話の端々が漏れ聴こえる。

「――派遣軍に悟られれば、厄介な――」

「――我軍の後発隊がもうすぐ――」

「――多勢で一氣に――」

「い、致し方ありません。それでは後ほど、また威儀を改めまして、国母様をお迎えに参ります。」
可能な限り重々しく、を図りつつ、この場の誰の目にも明らかに滑稽な言葉を残し、小隊長とその部下たちは去っていった。

老婆はふう、と溜息を吐き、リュミエールに向かって、皺の深い笑みで笑い掛ける。

「ごめんなさいね」

「……いいえ。」

剣を扉の内の柱に立て掛けると、もう氣力もずいぶん尽くした様子の小さな老婆を支えながら、ベッドまでの道程に戻った。

「国母、とは……」

差し出がましいかとは思ったが、この人を護り通すのであれば、今少し状況は理解しておきたかった。

「そんな、大層なものではありませんよ」

ベッドに身を傾けつつ、老婆の言葉は続く。

リュミエールは椅子を寄せて、小さな人の横たわるベッドの傍らに座った。ぽつり、ぽつり、と、彼女は話を続けた。

「女王陛下のご加護を頂く宇宙の内に在り、共和制を敷くこの星に於いて、国母など、愚かなこと。それでも時折、ああやって物の道理の解らぬ人々が、この婆を何やかやと担ぎ上げようとするのですよ。」

このところはめつきり途絶えてましたから、このまま死ぬまでは、安楽できるかと思っておりますが。」

ひととき言葉は途絶え、場はしばらくの沈黙に包まれた。

彼女の威を借りて、自らの勢力を誇示したい集団が常に絶えなかった、ということなのだろう。窓からは、朱い夕焼けの光が差し込み始める。

宇宙の女王の加護。国母。

守護聖、という存在。

「……煩わしいこともありますし、どの勢力にも与するつもりは毛頭ありませんが、それでも……息子^{くみ}の名が世に違わず、宇宙に広く響くことの証として、多少は喜んでよいのでしょうかね。」

トントン、と、儀礼正しいノックの音が軽く響いた。

リュミエールもついさっき驚いたのだが、辺境の地にあるこの小屋には、扉の鍵すら付いていなかった。先ほどの小隊長は、無闇矢鱈と扉を殴打せずとも良かったのだ。

リュミエールが振り返った視線の先で、正しい者には正しく開かれる、その扉が、静かに開かれた。

「……お久しぶり、オスカー。元気にしています？」

リュミエールは、その人の名を、その時、初めて知った。

緋色の髪は朱い陽の光に縁取られ、その瞳は、高温の星の色。

その全身から燃え立つ、己とは性質の異なる、しかし同じように溢れ出す、サクリア、というものの気配。

「……………ご無沙汰しております。母上。」

室内のその光景を改めて見遣つて、オスカーは内心、少なからず驚いていた。

サクリアの気配で気が付いていたとはいえ、リュミエールがこの星の、この場にいることが、自分の、故郷の星の。

そして共に在るのが、紛れもない、己の母であるということが。

これも「道」の意図した導きの内なのだろうか。

リュミエールは、先ほどの聖地での初めての出逢いの、あの時、とは随分印象が違つていて、凜とした深海色の瞳で、ベッドに歩み寄る自分を、驚いた様子もなく、真つ直ぐに見上げている。

「判つていたのか？」

そう尋ねた。ベッドの上のこの人と、聖地で逢つた自分とが、親子である、という事を。

「……途中から、判りました。何となく、似ていて。」

「似て？」

「ええ。雰囲気とか、……ちよつとだけ、強引なところ、とか、でしょうかね」

そう言つて、水色のその人は悪戯げに微笑い、オスカーは思わず苦笑した。

ちよつとだけ強引、か。詳細は母には、とても聞かせられない。

そうして母の方へと、改めて向き直る。

母、とはいっても、つい数か月前のオスカーと共に在った、記憶の中の母ではない。髪は白く、皺は深くなり、小柄だった身体は一層小さくなって。

それでも彼女は、過たず、この自分の母であった。

そう遠くないであろう生涯の終焉を前にして、変わらぬ笑顔。威厳を伴った強さ。…波動。守護聖としての任を受託した時に、もう一度と逢えないであろう事は、正しく覚悟していたのに。別れと出逢いと、思い掛けぬ再会の、運命の数奇を思う。

ベッドの脇で両膝を付いて屈み、記憶よりも小さくなったその手を取った。

「オスカー。あなたにとつては、ほんの少しの時間でしたでしょうに。

随分、立派になった気がするわ」

「母上の名譽を汚さぬよう、日々、精進しています」

「まだまだ子供っぽい所も、おありのようだけれど」

ウインクを飛ばされて、その仕草を酷く懐かしく思いながらも冷や汗がどつと出た。

多少の後ろめたさを抱える自分の中の、どこまで、何を見透かされているのか、いつもこの瞳の前で肝が冷えたものだ。そして今も。

「…すみません」

椅子に掛けたまま、目を伏せて俯いたリュミエールが、その時、ぽつりと呟いたのが聴こえた。自分も母も、何の事かとそちらへ視線を移す。

「この方には、行く先も、己すらをも見失ったわたくしを、ここまで暖かく導いていただいたのに。わたくしには、何も出来なくて。…何もして差し上げられなくて。

…また、何も。」

ほんのりとした幼さのまだ残る声音に、切実な痛みが滲んで見える。

この水色の透明な人が、彼の故郷で思い知らされた、その痛切な何かが垣間見えた気がした。

「そんな事を言うな。……母を守ってくれたんだろう？」

ここへ来る途上、遠目に見えた、立ち去る軍人らしき者たちの姿。扉の脇に立て掛けられた剣。

このあえかなる人が、その細い身体を張って、精一杯に立ち向かつて。きつと。

膝を付いた自分の目線の高さにあるその頭を、軽く引き寄せて青銀の髪を撫でた。水のように指の隙間を流れてゆく、艶やかな髪。

リュミエールはされるがままに頭をしばらくオスカーへ預け、それから涙の滲んだ目元を緩く拭くと、

「……少し、風に当たってきますね。」

そう言つてふわりと、質量を感じさせない動作で立ち上がった。

白いローブに包まれた、すらりとしたその背を少し見送ってから、オスカーは視線を母の方へ戻した。

扉を出る直前、リュミエールは、脇に立て掛けてあった剣を、音もなく、すい、と手に取った。

リュミエールは扉を閉め、もう一度目元を軽く拭い、大きく息を肺の中まで吸った。

この土地に独特の、からからに乾ききった草波の匂い。

この何処までも続く草原の中で、あの緋い人は成長し、残されたあの暖かい方は生涯を過ごし通したのか。

そう考えてから、遙か遠くに視線を遣る。

一面の夕焼けの景色。

その中にほんのりとした夜闇が混じりつつある丘の方で、蠢く複数の、人影。視線をそちらから外さないまま、吸い込んだ息をゆっくりと吐いた。

たとえ己の故郷の母の短い生涯が、彼女にとって不本意なものであったとしても。

たとえこの、あの彼の母の長い生涯が、彼女の本懐であったとしても。

そこに何らの違いはなく、どちらのひとも、力の限りに精一杯生きたのだ。

そうしてこの己が何も出来ない、無力な存在であるというのなら、なおさらに輪を掛けて、力の限り。

「……もう、泣きません。二度と。」

片手に下げた剣を緩やかに夕暮の風に靡かせ、歩き出した。

「あの優しい方たちの代わりに、わたくしが、あの方たちの慈しんだ、この宇宙の全てのものを護ります。」

力を尽くして。

わたくしの命の、そしてこの守護聖の使命の、及ぶ限りに。」

「……俺達に氣を使ってくれたんでしょかね」

オスカーの自問にも近い何気ない問い掛けに、老女は緩やかに笑っただけで応えた。
それから別の問い掛けを、オスカーに返す。

「判りましたか？ ……判っていますね、オスカー？」

「…無論です。」

『いつかきつと、あなたにも唯一無二の人が現れるわ』と。

オスカーの幼い頃から、聖地に招聘されての別れの時まで、それが彼女の口癖だった。

未来を占う予言ではない、定められた事実を告げる預言のような、彼女のその言葉を時に訝しく

思いつつ、故郷の星に在った時も、聖地に移ってから、いつも自分を取り巻いてきた蝶や花の如き女性の数々と次々に恋の華を咲かせながら、全ての相手が俺にとつては唯一無二さ、とずつと嘯うそぶいてきた。

あの衝撃に、出逢うまで。

「……時を共に渡る相手ひとで、何よりでした。

絶対に、離してはなりませんよ。あの人は水。少しでも気を抜けば、あなたの手から流れ落ちる。」

「承知しています。俺が、護ります。」

母は再び、緩やかにただ、笑った。

『ちよつと違うのだけれどね』、という口の中だけでの呟きは、オスカーに届かない。

「……何か仰いましたか？」

「いいえ」

オスカーが訝しげに眉を潜めながら母を見遣れば、彼女は昔に比べて些か霞んだその瞳に、昔と

変わらぬ悪戯げな光を宿してオスカーを見返している。

覚えのある、こんな時のその瞳の色。そして続く言葉。

思い出しかけた瞬間、家の外からの何かが神経を掠めた。

沈黙して、外部の気配に集中する。時折り草原を吹き渡る風の音。風。

その風に混じる、……微かな繰り返す剣戟の音。

「母上！」

椅子を蹴るようにして立ち上がり、再度母を見遣れば、自分とは対照的な母の「大丈夫よ」と言いたげな落ち着き払った微笑み。

それと、先程からのその瞳の色。

閉じられたまま笑む母の口から、懐かしいあの言葉が、

『何事も、あなた自身が経験しなさい。

でなければ、判らない事もあるものよ。オスカー。』

その言葉が朗々と流れ出たような気がして、オスカーは苦笑した。

最後まで、この人には勝てなかった。そんな気がした。

別れはとうの昔に済ませた。思いがけない再びの邂逅に、あの綺麗な人へどこまでも感謝したい
思いだった。

「どうぞご健勝で、母上！」

その言葉と力強い笑いだけを投げ掛け、背を向けて、彼女の終の棲家の、小さな家を飛び出した。

母はただ、いつまでも穏やかに微笑い続けていた。

最後の瞬間、ダイニングテーブルの上の、何処までも繊細に綴られたレース織りの仕掛けがオスカーの目の隅に留まった。

家の外に出、素早く争いの音の源を探す。

すぐにそれは突き止められ、そちらに目を遣り——オスカーの時はそこで止まった。

一面の夕日の朱く煌めく光の中、小高い丘の上で、靡く水色の髪。

水の流れのようにしなやかに翻る、純白のローブに包まれた細い身体。その手に握られた剣。遠く高く繰り返し響き渡る剣戟の音が、まるで楽の音のようにその姿を彩る。

周囲を取り囲みながら常に後退り、気圧される事しか出来ない十数人の軍人たちは、優雅な舞曲を引き立てる哀れな取り巻きの演出でしかなかった。

『何事も、あなた自身で。でなければ、判らない事もあるものよ。』

母の言葉が再度脳裏に流れて苦笑しつつも、胸の奥から込み上げてくる限りない高揚感に、ただその水色の人を目掛けて駆け出した。

思い掛けない、思い掛けないこの宇宙にも稀なる人と、この先の、生涯を共に——！

人の波に割って入り、その綺麗な人の元へ辿り着き、抑え切れない高揚感のままに剣を思い切り

振るって軍人の一人のそれを弾き飛ばした。周囲が低くどよめく。

白い姿の剣舞は背後のオスカーの気配に、やがて緩やかに剣を下ろし納め。

静かに振り返り、深海色の瞳でオスカーを見上げて、そうして。

「……オスカー。」

薄めの唇が、あどけなさの残るその声が、初めてその名を呼んだ。

迸る感情のままに力の限り抱き締めたくなる衝動を、何とか遣り過し、その肩に手を回してから、自分たちを取り囲む一同を見渡す。

「何者だ！ 多勢に無勢だ、全員、態勢を整えろ！」

先程のいかにも小物に比べれば多少はましな指揮系統のようだったが、それでもこのあえかなる人ひとりにただ押される一方だったという厳然たる事実を、焦りのあまりか客観的に勘案できていないのには変わない。

取り乱しながらも一歩引いて隊列を組み直そうとする連中を見遣りながら、オスカーは考えた。

強権は趣味ではないが、王立派遣軍には今少し睨みを利かせてもらおうとしよう。

いくら武威を尊ぶ気風の星といえども、いや——そういう気風だからこそ、こんな底の浅い私軍に、自分の大事な故郷を荒らされては堪らない。

唐突に、ざわめきが周囲の軍人の間から沸き起こった。オスカーの背後の空から響いてくる、彼

らも聞き慣れているはずのその音。

経過時間から考えて、そろそろ頃合いだろう、と思っていた。自分の判断ミスが引き起こしたこの不測の事態にあつて、その舌先三寸で素早く聖地を上手いこと丸め込んでくれたであろうカティスに、胸の中だけで感謝しておく。

夜の帳の降り始めた空の遥か彼方から急速に疾走し、接近してくる複数の船影に、狼狽と驚愕とが巻き起こる。何かを叫び、あるいは慌てて逃げ出す者たち。

巻き起こる風に靡かれつつ、振り返ってわざわざ確認せずとも、オスカーには有り有り目に浮かんだ。

いずれの船体にも誇り高く掲げられた、気高き神鳥の紋章が。

その紋章を思い起こしながら、隣の凜とした佇まいの、どこか母に似たその人を見遣り。そうしてふと、懐かしい遥か昔の記憶が甦る。

父が相当に機嫌良く酔った、幾度かの夜。暖炉の前。

部屋離れた所で趣味のレース編みが続けながら呆れる母を横目に、父は密かに、子供達に語った。

『父の生涯で最大の戦果はな。お前達の、母だ。』

見たこともない程、強いひとだった。長い間、流浪の旅を続けたのだという。

自らの人生は宇宙のために捧げ終えたのだと、素気無く断るそのひとを口説きに口説き倒して妻

に娶った。

なぜ彼女が国母と呼ばれるに至ったか、想起するも憚られるその真の理由は、もはや時の流れに摩滅して久しいようだった。

やがて彼女の生涯と共に、この雄大な草原の自然の中へ、彼女がそう望んだように還ってゆくのだろう。

彼女が好んで幾度も織り上げた、レース編み。

生涯の終焉の間際に至つても威厳に満ちた、その姿。

暖炉の前で誇らしく続いた父の語りを、今、思い起こす。

そのひとは、かつて宇宙をその手で織り上げてきたひとなのだ。

カティスの報せにより、研究院がサクリアの位置から割り出した現場へ緊急派遣された王立派遣軍の艦隊は、二柱の守護聖に対する私軍の狼藉につき、管轄地域内の統制不行き届きを重ねて詫び

てきた。幾度も頭を下げる責任者にオスカーは鷹揚に応じ、新任守護聖の着任に際しての『道』の不調』のために派遣軍の手を煩わせた事を、逆に慰労する。

オスカーがこの星を離れてから、数十年とはいえそう間も空いておらず、この地が炎の守護聖の故郷である事、その母と守護聖達との接触があつたらしき事実は、双方の側から暗黙のうちに不問に付された。それは本来、有り得べからざる事であつたから。

そのまま派遣軍の船艇で宙域を移動しながら慌ただしく二人の無事を連絡などするうち、感慨に耽る間もなくあつという間に聖地へと到着する。

新旧の守護聖の対面、他の守護聖達への引き合わせ、次々と重ねられ繰り返される自己紹介、休む間もなく女王への謁見、女王補佐官ディアによる聖地の案内。

何故かその全てに、もはや事の成り行きでオスカーが同行しながら、目捲るしい程に忙しいその行程の最中、ふと、あの陰鬱な闇の守護聖の姿が無いな、と思った。

陰気なかの守護聖とはどこまでも相性の悪さを感じていたオスカーには、これ幸いと好都合ではあつたので、そのまま気付かぬ振りを決め込んだ。

そうしてようやく一息つき、気が付けば、またこの隣の水色の人と二人、聖地の宮殿の中庭で、佇んで。

隣のリュミエールが小さく、長く息を吐いた。

今まで気を張って凜と事の対応に当たっていたその人が、再びあの「道」の前でのあどけない姿

に戻ったようで、オスカーは小さく笑った。それが聞こえたのか、リュミエールは視線をオスカーへ投げ掛け、恥ずかしそうに首を少し竦めて、微笑む。

守護聖の生涯は孤独なのだと、そう覚悟を決めたこの地で、出会った運命の半身の人。

これからの永い永い時を、その微笑みも、喜びも、哀しみすらも。そして誰よりも何よりも強いその身体を、心を、何もかもを。

この手で。そして二人で。

引き寄せて唇を重ね、何処までも溶け合うように深々と舌を絡めた。

運命の相手。

何も疑いようなない、自然な事だった。

…と、思っていたのは、果たして自分だけだったのか。

ふ、と、オスカーの腕に掛かるその人の重みが、変わったような気がした。

……唇を重ねたまま、

(……………)

……どこかで、覚えがあるような気がする。それも悪い方の。
この状況。

唇を解放し、腕の中の人を見れば、かつくりと力なく、豊かな水色の髪の毛の流れは自分の腕に落ち掛かり、薄く開かれた目はまた気絶寸前で。

（ちよっ——！）

だって、そんな、あの地で、自分の母を穏やかに優しく労り、多勢にも一切怯む様子も見せず、しなやかに誰よりも強かった人が。

こんな程度のことです。

この水の方は、つまり結局は、こういう色恋事に関してはどこまでも純真で初心^{うぶ}なのだった。

オスカーがその事実気付くのと、再び意識を取り戻したりリュミエールが、目を見開いてオスカーの腕の中から身を翻したのとが同時。

リュミエールが駆け出した、その先には「道」——
……ではなく。

「道」のように何処までも果てしなく、その先の知れないような漆黒の——闇の守護聖の姿。
何故かその手に、小型のハープを抱えて。

リユミエールはたと立ち止まり、その長身の漆黒の姿をしばし見上げると、

——オスカーにとつてはあろう事か、
その懐へと、思い切り飛び込んだ。

「……ほう？」

漆黒のローブを纏った己の腕の中にすっぽりと収まった白い姿と、呆然と立ち尽くすオスカーとを順に眺めた後、

「……新任の守護聖の忘れ物だと、ディアから渡され、挨拶を促されて来てみれば——」

闇の守護聖は、その唇の端だけで、この上もなく楽しくげな悪魔じみた笑みを、

「——何事も、経験せねば判らぬ事があるものだな？ オスカー。」

炎の守護聖に向けて投げて寄越した。

闇の守護聖がハープを持ったまま掌中の白く細い身体を両手で易々と抱え上げ、さっさと執務室へ引き上げてゆくのを、身動きも出来ず呆然とただ見送った。

少し離れた背後で、途中から様子を見ていたカティスが腹を抱えて笑い転げている。

もはや笑い死にしそうな程に蹲うずくまって悶える年長の緑の守護聖の尻を、オスカーは力一杯蹴り上げた。

そうして、時は遙かに下り――

執務室の控えの間を満たす心地良い旋律の数々へ、ソファに横たわるクラヴィスは身を任せている。

カーテンの裾を軽く引けば、窓の向こうの階下の庭園で、幾人もの華やかな官女に囲まれて手当てを受けているらしいオスカーの姿が見える。

派手な頭のコブのその成因について、炎の守護聖は果たして何と言いつけたのやら。

「……オスカーも、奴は奴で難儀な事だな。そう思わぬか、リュミエール？」

「……何の事でしょう？ クラヴィス様。」

グランドハープの複雑精緻極まりないパッセージを、その長い指でいとも軽やかに弾きこなしながら、淡い視線を闇の守護聖の方へ流し、水の守護聖が苦もなく応えを返す。

カーテンの隙から垣間見える階下では、炎の守護聖がハープの音の漏れ聴こえる窓を一瞬ちらりと恨みがましく見上げたのが見えた。

闇の守護聖はただ小さく笑って、一時も留まる事のない旋律の波に再び身を預ける。

海洋の惑星の故郷から招聘されてこの聖地へ足を踏み入れた、彼のその当初からの一事が万事の出来事で、炎の守護聖から寄せられる想いは明々白白々である筈なのに。

それについてこの水の守護聖がどう思っているのか、ほんの少しですらも読み取れるものは無く。

恐ろしいほど強く、恐ろしいほど純真で無垢だった水色の細い身体は、しなやかに成長し、やがてその深海色の瞳に不可思議な色^たを湛えるようになり、果て無い強さはそのまま、綺麗な、わかりにくい大人になった。

闇の守護聖にとつては、それこそが好ましい。

判りやすい人間など、側に置いた所で何の面白味もないではないか。

(…また――)

買い被っておいでのようなだ、と、リュミエールは思う。

闇の守護聖が思っているらしいほど深い人間でもない、自分では考えている。何ということでもない。ただ。

ただ自分は、自分を生まれ変わらせてくれた、あの時の誓いを守っているだけ。

旋律を奏でる手を休めることなく、少し離れたテーブルに置かれた小型のハープを見遣る。

故郷との繋がりをただひとつ遺す楽器の上に覆い掛けられた、糸目も判らぬほど繊細な純白のレース織りの布地は、あの時から程なくして、宇宙に数多溢れる水の守護聖への捧げ物のひとつとして、奇跡的に自分の手元まで辿り着いたもの。

あの優しい人たちの代わりに。

己の生を与えてくれた故郷の母の、そして何もかもを無くした自分を新たな世界へ導いてくれたあの草原の地の母の、その彼女らの代わりに。

力を尽くして。この命の、この守護聖の使命の及ぶ限り。

あの人たちの慈しんだ、この宇宙の全てのものを護ると。

あの草原の母の慈愛と強さが育て上げた、その人の事をも、力の限りに護り通すのだと。ただ、それだけの事。

微笑みを浮かべ、あれからずっと胸の中で熱く絶えることなく続く誓いと共に、迸る感情の赴くまま、リュミエールは最後の一小節のグリッサンドを思い切り掻き鳴らし上げた。

水の守護聖

本当に優しい子だね、と小さい頃からよく言われていた。

それは父だったり、兄だったり、その他の親戚だったり、友人だったりしたけれど。私はいつも、それらの言葉にただ微笑んでいるだけだった。

温暖な気候と豊かな海洋だけしかない辺境の星とはいえ、一応は星間航行も可能な程度の文明を持つ主星文化圏の惑星だったから、聖地とそこに住まう女王陛下、守護聖方のことは知識として皆知っていて。

いつかリユミエールは優しさを与える水の守護聖様として聖地に呼ばれるかもね、などと冗談に紛らせて、でもかなりの割合で本気の声音が混じった調子でよく言われていたのだ。

それらの言葉も、私はただ微笑って聞いていた。

誰よりも一番そんな風に思えなかったのは、私の事を一番良く知っている、私自身だった。

だから聖地からの迎えがきたときは、本当に、心の底から驚いたものだ。

おそらくは、私が最も。

どうも家族などは、嵐と言うよりは竜巻のように、平和で平凡な日常生活の中心に唐突に沸き起こったその話に、驚きながらも納得している節があったようだ。

聖地から迎えに来た使者方に至っては、私の容貌と物腰を見るなり「優しさを司る水の守護聖か

くあるべし」といたく感激したようで、すでに私が水の守護聖になったかのように、恭しく、丁寧すぎるほどの礼節を取った。

どうしてこうも、ひとは、先入観、というものに支配されてしまうのだろうか。

私の顔立ちが穏やかだからといっても、物腰が静かだからといっても、私の中身が、真実の私が、優しいとは限らないのに。

別に腹立たしいとは思わなかった。

小さい頃に遭遇した出来事のせいで、あるがままの状況を受け入れる癖が長いこと私の身についていた。人から自分のことをどう思われても、あまり気にしたことはない。

しかしそれにしても、日頃から、優しいね、と言われる事は多すぎて、現実の私とのあまりのギャップの大きさに、流石にそれは如何か^{どう}とよく思ったりしたものだ。

おまけに今、目の前で、よりもよって全宇宙の至上の場所に、全宇宙の優しさを司る至上の存在として召還されると言われているのだ。

世の中が、それほどまでに皮肉に出来ていることを改めて強く思い知ったのは、この時だった。

病気の母のことが心配だから、と聖地行きを最初断った私の台詞も、使用者方にとっては「優しさを司る水の守護聖に相応しいエピソード」と感激の種を与えることになったようだ。

病に臥せている母親を、おそらく聖地に一度向かえば永遠に会う事の出来なくなる母を、心配することくらい、水の守護聖でなくても、優しさを司る存在でなくとも当然の事だと思うのだが、私

以外の人々は誰も気がついていなかったのだろうか。

いや、母は……母だけは、そのあたりを正確に、しかしあくまでも表には出さず、理解していたような気がする。

それまで、私の事を一番真実に近い形で知っていたのはおそらく母で、そしてほぼ唯一の人であつただろう。

もともと海の多い土地柄だったけれども、父は殊更に海に近い場所に家を建てた。私が小学校に上がつて2年か3年か経つた頃だった。

それほど著名でもない画家の父の収入で、それほど豊かとは言えない生活の中、眺望のよい海を抱える白い家は、父が少しばかり奮発して建てたものらしかった。

幹線沿いの、しかし近所の家々とは少し離れた、小高い丘に立てられたその家は、洋館風のちよつと洒落た白い家で、完成したそれを見上げる父の顔は子供のように無邪気に嬉しそうだった。

海の潮にすぐ痛んでしまいそうだ、などと隣で考える私とは大違いで、父のそのあまりの純粹さに少し笑つてしまったものだった。

どうしたのか、と父は聞いてきた。可愛いから、と、私はそう答えた。

当然のように家に対する感想だと取つたらしい父は、そうだろうそうだろう、と本当に嬉しそうににこにこしていた。

そんな父に、私は思わず更なる笑いが零れてきて、声を押さえるのにとて苦勞したのだ。

その頃にはもう私は、優しいね、というお決まりの例の台詞を、家族を含めたいろいろな人から何

度も掛けられていたけれど。

父は口に出しては言わなかったけれど、おそらくは一家揃って海の好きな家族のために、殊更綺麗な海を抱くこの土地に家を建てた、その父のほうが、冷静に家の耐久度を計算する私より、よっぽど優しい。

何故、人は私のことを優しいなどと言うのだろうか。

その時、そう考えた事を、覚えている。

綺麗な海を目の前にしたその土地に家を構えた父にはとても感謝した。

私はとても海が好きだったから。

海は私に、優しいね、などと言わない。

優しくないね、とも言わない。

ただその中に、あるがままの私を受け入れてくれる。

その懷に抱かれるように、私は海へ抱かれる。人の背丈ほどの水深で、横たわるようにして上を見上げると、光は水面の複雑な傾きに揺らめかれて、さまざまな色合いのあおを重ね、私へと降ってくる。

海の中は常に水音が聞こえているのに、不思議な静寂がある。それは人の鼓動にも似ていた。

海が私に与えるその感触はとても心地よくて、長くその中に居たくて、自然、私の泳ぎは上達した。

私の取る行動なんてそんなものだ。したい事をする、ただそれだけで、それは他の日常生活のあ

あらゆる行動に関してもそうだった。

けれど不思議と、何かにつけ、優しいね、そう言われることが多かった。

海と違って、人は私を評する。いつも、誰しもが、判で押したように同じ台詞で。

たとえば私がその時、心の中で何を思っている。

それは無邪気に喜ぶ父の横で冷静に潮風のことを考えた、あのときの奇妙な感触と一緒に、それは私にいつも違和感を与えた。

母はその台詞を言わなかった唯一の人だった。たとえば心の中で思っていたにしても、口に出しては言わなかった。

だから母の傍は、とても居心地が良かった。ありのままの私を受け入れてくれるという点で、母と海は良く似ていた。

母の横では、私は私自身の知る私と人が語る私との違和感を感じずに済んだ。

だから母の傍を離れるのは、もちろん病のことも心配だったけど、私自身のこととしても本当に辛かったのだ。おそらく聖地に行ってしまうば、名実共に優しさを司る水の守護聖になってしまう私の、本当の姿を認めてくれるものは誰も居まい。

そんな私の様子が、病床の母を心配する姿、とだけ取られてしまうのは、やはり先入観というか、とにかくそういうものの所為なのだろうか。

そういった私の受け取られ方も、私の聖地行きを拒否する要望も、どちらも結局は諦めてしまうしかない。

どちらも、自分のままにならない、大きな目に見えない力のせいだ。ひとはこういった力を、こんな時、運命、と呼ぶのだろうか。そう思った。

だとしたら、運命と言うのはよほど気紛れで、面白い筋書きを用意しているものだ。
聖地入りした後になって、私の抱いた感想はそれだった。

聖地に到着した私の姿を見た人々は、私の星まで迎えに来て、そして私をこの常春の地へ、どこまでも花が咲き乱れる人工の楽園へ、私の意思とは関係のないこの地へ私を連れてきた使者たちと同じように、物腰の穏やかな私を見ていたく感激したらしい。

安心。そう、安心とも言える。

自分たちが水の守護聖と言う存在に対して抱く、理想像のようなもの、私がそれに相応しい姿を持つ存在であったこと。彼らは確かにそれに安堵していたようだ。

彼らの期待を裏切るのは気の毒だ。

そう思ったから、優しさを司る水の守護聖に相応しい、暖かく穏やかな万人向けの微笑を常に絶やさないようにした。

微笑を向けられた彼らは、ひととき感動してその身を打ち震えさせ、感激に目を潤ませる者すら居た、らしい。

ひとつというものは、なんと愛すべき存在であることか。

万能ならざる人の、知らざる事の、幸いなる哉。

彼らに知らざる事の責を問うのは、気の毒だし、お門違いだ。なにしろ私の本当の姿というのは、母を除く家族すら気がつかなかった事なのだから。

ひとびとに安心してもらうために、これからずっと自分を作り続けなければならないかと思うと、少し気が滅入ったが、まあ仕方ないことだと本格的に諦めた。

だからその直後は、本当に驚いたのだ。そう、聖地からの迎えが来た、あの時と同じくらいには。私の正体を見抜いた人間が、2人も居た、ということに。

一人は、漆黒の衣装と紫水晶の装身具を身につけた人だった。

「無理をしても続かぬぞ」

私の前任者に連れられて、宮殿の廊下で初めて顔を合わせた時、擦れ違いざまにかの人はそう、言つてのけたのだ。

彼の行き過ぎた後の空間で、私は振り向くことなく、唇から、笑みを零した。

彼と私は、似たもの同士だ。直感的にそう思った。

彼の傍は、さぞかし楽で、さぞかし居心地がいいことだろう。これから先、彼のもとへ通う事が多くなるであろう私の日常生活を予想して、私は少しだけ心が軽くなった。

そしてもう一人は。

一度でも目にすれば、網膜にまで焼け付きそうなほどの緋色の髪と。

そして彼に認められない生温い存在であれば、その存在を一瞬にして凍りつかせるであろうと思わせる、冷たい瞳を持った人だった。

私のほんの少し前に就任したばかりという彼は、私を眼にすると、けして優しくはない笑いで、しかしこの上も無く楽しそうな笑いで私を強く見据えたものだった。

「嬉しいよ、お前のようなやつが俺の相棒で」

私にしかその本当の意味を読み取る事が出来ない笑いと共に、彼はそう私に告げた。さきほどの漆黒の人の場合とは違って、私は自分の身がひどく快い緊張感に包まれて引き締まってゆくのを感じた。

嬉しい。

そう、私もとても嬉しかった。

永い永い、気の滅入るような永い時を渡る魂の半身に相応しい相手だった。

そうこなくては。

私は、やはり彼にしか読み取れない笑いを、いつもの水の守護聖の至上の微笑みに含ませ、返してあげた。

だから水と炎の私たちの仲が悪かったことなど、実のところ一度も無かったのだ。

炎の彼は私を見た瞬間に私の本質を悟り、そしてどうやらその本質の部分をことさらにたく気に入ったらしく、それは私にしても同じ事で、彼のそんな鋭敏な、そして思ったよりも深い現実感覚

をととても快く思った。

どんなに会議で対立していたとしても、それはもともと私たちの司る力が正反対であるが故の当然の過程である。だいたい子供ではないのだから、本来活発な討論を交わすべき会議の場で仲良くしようとするこの方が可笑しいと思う。

どんなに対立しても、彼と私とのそれは、少なくとも当事者達にとっては、適度な緊張感を持つたとても心地良いものの以外の何物でもないのに。

それでも周りの人々が、私たちの仲を悪い方へ悪い方へと取ろうとするその思考形態は、やはりこれも、炎と水の対立、という、先入観、に寄るものが大きいのだろうか、そう思った。

というか、そう思わざるを得ないほどに周りの人々からは不仲と取られた。

まあ、私の事を強く知る人が2人も居る今となっては、私たちへの周りからの評価など、私にとって昔よりなおさら気にすることではなくなっていた。

なつてはいたが、やはりあまりの重々の言われように少し気になる時もあった、一度私は私の対の存在に、私たちがそう思われることについての是非を問うたものだ。

「俺たちはただの人間に過ぎないが、同時に信仰の対象でもあるからな」
信仰の対象。

要するに、水の優しさの印象も、炎との対立の構図も、私たち守護聖に対する人々の尊崇の顕れとして甘んじて受ける、と言いたいらしい。

私は思わず笑ってしまった。地上では気の遠くなるような時が過ぎてしまった今となつては、彼ともう一人しか知らない、私のあるがままの笑い方で。

彼のそんな、ある意味冷めた、しかし非常に的確な現実感覚は、私にとって本当に快いものだった。

炎の守護聖の彼は、そんなに頻繁と呼べるほどではないけれども、時々、日中の執務後、日が暮れてから私の私邸に訪れてくることがあった。

「お前の所ぐらいだぜ、こういう気分の時に気を許せる場所ってのは」

ささやかな恒例となったその彼の訪問の、とある日、私の私室に入ってきた彼はソファに深く身を沈めながら、げんなりした表情でそんな台詞を言ったものだ。

「それは光栄ですが……何かあったのですか？」

彼の表情はずいぶんと疲れているようだったが、何に疲れているのかまでは私にはわからなかった。そういえば彼は昨日の深夜、惑星の視察から帰ってきたばかりではなかったか、とふと思いついた。

「何処に行っても、俺が強さを司る守護聖だからといって、俺を強い人間だとはなから思い込める連中ばかりで嫌になる」

……、ああ。それは私もよく知っている現象。

「……わかる気がします」

ここにも、周囲からの先入観と理想像に困惑している人がいる。

彼は私の返事に氷青色の目を軽く見開き、それからいつもの唇の端を上げるだけのシニカルな笑いを私に超越した。

「そういうお前だからいいんだよな」

笑った彼は、とても、とても嬉しそうだった。

彼は私の目から見ると、十分に強いと呼んでもいい人だと、そう私は思ったが、彼が彼自身をそうは思っていないのなら、彼の思いを尊重しよう——。

……ああ。

そこまで考えたその時、私はようやく気づいたのだ。

私の胸に、そして彼の胸にも同じように存在する違和感の正体を。そして私が他人の言うように本当に優しい存在であるかどうか、その間に対する答えを、私が今まであえて追求しなかった理由を。

それは私が本当に優しい存在であるかという間、彼が本当に強い存在であるかという間、その間に対する事実あるいは答が欲しかったのではなく。

私が私自身を優しい存在だとは感じていないこと、彼が彼自身を強い存在だとは感じていないこと、自分自身にそういう思いを抱いているという事実を、ただそのままに受け止めてくれる人がお互い以外に殆どいなかった、その所為なのだと、この瞬間、ようやく気づいたのだった。

彼と私は、しばらく無言のまま、顔を見合わせた。

たぶん彼も、私の気がついた事に気がついたに違いない。

だって彼と私は、対の存在だから。

どちらからともなく、小さな笑い声が起こった。

とても、暖かい。なんとなくそう感じた。

彼は笑いながら立ち上がって、ゆっくり私に近づいてきた。身長差があまり無いとはいえ、そうやって近づくと私はやはり彼を見上げる恰好になる。

「素晴らしく物分りのいい水の守護聖様に、物分りのいいついでで、もう一つ頼みがあるんだが」
彼は端正な顔に浮かべたシニカルな笑いを崩さずに、私を見下ろしながらそう語りかけた。

「なんででしょうか？」

私は彼を見上げた形のまま、小首を傾げて尋ねる。背中に流していた髪が流れる音がした。

「お前を抱きたい」

笑ったままの変わらない表情で淡々と、彼は私にそれだけを告げた。

私は二・三度目をしばたたかせると、傾げた小首を、今度は逆の方向に傾げた。

「どうしてですか？」

意外といえば意外な彼の申し出に、私は単純に不思議ではあったが、嫌悪感も違和感もそれほど感じなかった。少なくとも例の、優しいね、というあの言葉よりはずっと自然だった。

私の言葉に、に、と彼は片方の唇だけを楽しげに上げた。

「抱きたいと思ったからさ」

その彼の言い方に、私は思わず弾かれたように笑い出してしまった。それはそうだ。

私と彼の間に、難しいことなんて何もないのだ。

思い切り笑ってしまっている私の反応に、彼は睨然として少し不安げに、口を尖らせた。

「嫌なのか？」

その彼の様子は、今まで私が見たこともないくらいに子供っぽくて。

その様子にも、私は更にどうにも笑いが止まらなくなつて。

辛うじて息をつきながら、構いませんよ、と私は笑いの合間に返事したのだつた。

夜を迎える準備が全て済んで、照明を落とした部屋、月影が照らす中、静かに横たわつた私を囲うように彼がベッドに上がった時、その氷青色の瞳は何か大事なものでも見つめるようにわずかに細められていて、私の瞳を覗き込んでいた。

そのあまりにも意外なほど露骨に暖かさと優しさを湛えた色合いに、私の鼓動が唐突にどくどくと波打ちだした。

急に見えない何かに締め付けられるように、胸と息が苦しくなる。何かを言おうとして開いたままの唇がじんじん痺れた。

視線で私の視線を絡め取つたまま、彼はゆっくりと唇を近づけてきた。触れた瞬間、私の唇から思わず吐息がこぼれた。

こんな。こんなはずじゃなかった。

彼の手荒い扱いを静かに遣り過ぐすつもりだったのに。

彼が嫌いではなかったから、彼の申し出を受けたのに。それなのに。

嫌いではなかったのに、これでは。

……好きになってしまいそうだ。

彼の軀が執着と愛情を露わにして私を優しく包み、彼の手が大切な壊れ物を愛おしむように私の軀の上を滑る。

意外な、予想だにしてなかった唐突な悦びに、彼の全身全霊から与えられるその感覚に、私は静かにひどく狼狽した。

彼の手に導かれて、私の軀が跳ね、夜の闇の深淵のままに乱れる。

堪え切れずに時折零れる私の小さな高い艶声は、彼が私に与える愛撫を一層深いものにしていった。

「綺麗だ………」

背と首筋を仰け反らせたまま、彼の上で揺れる私を見つめながら、熱に浮かされたような表情で彼が呟く。

彼の紅い髪を掴み、彼よりもっと熱に浮かされた細い声で、何度も彼の名を呼んでいた私自身を、辛うじて覚えている。

ベッドの上で申し訳程度にシーツを被り、うつ伏せになって、私は抱かれた余韻に全身をゆだねていた。

目元の辺りがまだ熱を帯びて火照っているのが、自分でもよくわかる。

「……可愛いよ、お前」

私の隣で横になって頬杖をつき、時々私の髪を梳く彼の仕草は、とても優しくてひどく心地よかった。

私の髪の中を泳ぐ彼の手が、時々軽く爪を立ててかきかしと私の頭を甘搔きする。

ああ、もう。どうしてこの人は……。

どうしてこの人は、私の弱い所をこんなにも的確に探り当てるのだろうか。憎らしくて、憎らしくて、あまりに憎らしすぎて、……とても可愛い彼。

「お前、初めてじゃなかったんだな」

彼のその言葉に、私の唇から笑みが零れた。そして少し驚いた。

とても昔の事だったから。

「わかりましたか？」

「なんとなくな……誰が相手だったんだ？」

「誰、というわけでもないのですが」

彼が不思議そうに、目だけで問うてくる。

「小学校に上がる少し前でしたか、上がった後でしたか……拉致、といいますか、誘拐された事が

あるんですよ」

彼の表情は変わらない。

私は彼と同じように体を起こし、頬杖をついた。

「その男性のそういう性癖のために私が攫われたのかどうかまではわかりませんでした……私は程無くして警察の方々に救出されましたし、まあ普通の身代金目当ての誘拐事件として処理されたようですが」

彼は沈黙したままだ。私の話の続きを待つ表情。

「その時に思っただんですよ……これが人間の本能であるなら」

その本能までが、人間という存在を形作る要素であるなら。

「人間のそういった闇の部分、そういうものが、人間の中に存在する、その事を認めよう、そう思っただんです」

その闇は、私の中にも、誰の中にも、存在してしまっているかもしれない要素だから。

だからだろうか。あるがままの状況を受け入れる癖が私の一部になってしまったのは。

だからだろうか。私が例の、優しいね、という言葉をいつもかけられてしまうのは。

「死んだのか、そいつは？」

静かな声で彼が聞く。

「さあ……その後の事は詳しく知りませんが、まあある程度の有罪刑は受けたでしょうね。どちらにしろ今は亡くなっていることは確実でしょうけど」

そう、聖地とは違う下界の時間の中で、はるか昔に。

同じように流れ去ってしまった時間の中で、過去の人になってしまったであろう私の両親や兄妹が、私の身に起きた事実を知っていたか知らなかったか、その答を私自身が知らずに終わってしまったのは、きつと私にとつて幸せだったのだろう。

話を聞き終えた彼は、ごろん、と仰向けになつて、紅い頭の下で褐色の腕を組んだ。

「もっと早く聞けばよかったな」

私は彼に聞かせるに値しない下らない話をしてしまったかな、と少し心配だったので、その意外な言葉に目を丸くした。

「どうしてですか？」

「そいつが生きてれば、生き長らえてきた事を後悔させてやるほど、なぶり殺してやれたのに」

彼の言葉は相変わらずとても静かだったが、炎の激情を押し詰めたような熱を帯びていることに、そこでもうやく気がついた。

驚いて何も言えない私のほうへ急に彼の逞しい両手が伸びてきて、痛いほどに力を込めて抱き締められた。

性急に、深く唇を塞がれる。何かに縋りつくように彼の舌が私の舌を求める。

最初は驚いて息もつけなかったが、落ち着くと私は彼の激情を鎮めるように、腕を回し、彼の深い口付けに応えた。

ああ、もう。どうしてこの人は……。

どうしてこの人は、私の軀をこんなにも熱くさせてしまうのだろうか。

長い時間の後でようやく唇が離れた時、だから私は、また思わず笑ってしまった。
心が、とても温かい。

「笑うなよ」

そう言つて彼が拗ねる、その様子は、とても子供っぽかった。
嬉しかった。

たぶん彼のこんな表情を、私だけが知っている、そんな想いで。

「嫌か？」

心配そうに彼が聞く。

「いいえ」

私は微笑んで、そう答えた。

私の言葉に彼は笑つて、それはやはりとても子供っぽく嬉しそうな笑いで。

彼は今度は、柔らかく私をその腕に抱きこんだ。

愛しげに、私の髪を何度も撫でる。

「お前を抱きたいと思う理由、次から変えることにするよ」

その答えは、聞かなくてもわかるような気がしたけれど。

「どういう理由にするんですか？」

彼の言葉で聞きたくて、微笑いながら、つつい尋ねてしまった。

彼はちよつと目を見開いて私の体を少し離すと、やや皮肉っぽい、自信に溢れた笑いを見せた。

「そんな優しくない台詞を言う唇は、塞いでしまうに限る」

彼はそう言うのと、少し強く唇を重ねてきた。

私はもう知ってしまった。そんな笑いを見せる彼が、実はそんな時いつも、微かな不安を抱いている事を。

優しくない私。

強くない彼。

だから。

「好きだよ」

「好きですよ」

長いキスの後、離れた唇の隙間を埋めるように、彼と私はそう囁きあった。

○初出

WATERBEAT

<https://waterbeat.hisagi.com/>

FIREHEART WATERBEAT

2002年8月27日

理想の箱庭 - Side White -

2002年7月31日～12月29日

Selfish Gene

2016年4月29日

La Vie en Rose

2016年6月2日

微睡

2017年10月3日～10月5日

幼馴染

2002年12月23日～12月29日

大人の特権

2016年3月15日

大人の特権 後日譚

2016年3月21日

大人の特権 後日譚の後日譚

2017年11月23日

剣とハープと貴方

2002年2月23日

聖地と故郷と貴方

2002年7月2日～2018年6月1日

水の守護聖

2002年4月25日～5月13日

W A T E R B E A T
2002 - 2018 (上)

発行日 2022年10月17日

発行者名 楸

連絡先 W A T E R B E A T

<https://waterbeat.hisagi.com/>

表紙画像

Cosmic Cliffs in the Carina Nebula
RELEASE: NASA, ESA, CSA, STScI
Public Domain